上田市文化財調査報告書第92集

常入遺跡群

下町田遺跡Ⅳ

信州大学（常田）総合研究棟新営工事に伴う
常入遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査報告書

2003.3

信州大学
上田市
上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第92集

常入遺跡群

下町田遺跡Ⅳ

信州大学（常田）総合研究棟新営工事に伴う
常入遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査報告書

2003.3

信州大学
上田市
上田市教育委員会

序

このたび、信州大学（常田）総合研究棟の建設工事を実施するにあたって事業地に所在する「下町田遺跡」の一部が失われることがわかり、その部分を調査して写真や図面などに記録することとなりました。その結果をここに御報告します。

私たちにとって信州大学繊維学部は近代上田の象徴というべき特別な場所です。明治44（1911）年に設立され、蚕糸業が日本の基幹産業であった頃から現在に至るまで、最先端の研究が行われ、優秀な人材をたくさん輩出し続けています。今日の上田は繊維学部の存在無くしては有り得なかったと言っていいでしょう。

上田地方が蚕糸業の一大中心地として繁栄していた明治・大正時代は、全国有数の文化都市でもありました。信濃自由大学（のち上田自由大学）や山本鼎先生の自由画運動と農民美術は、この時代に興ったものです。個性尊重の芸術教育や、身近な場所で自主的に学習・文化活動を行おうとする考え方は、県内外の各地に広がって日本の教育に大きな影響を与えました。蚕糸業は江戸時代末期に発展し物資と人々の交流を盛んにしたといわれますが、これによってもたらされた広い視野と知識は大正時代になると豊かな経済力等を背景に大きく実を結んだと言えましょう。

21世紀の今日は様々な分野で国際化が進み、世界はずっと身近になっています。異なった文化や考え方を持つ人たちと共に理解し、尊重しあいながら生きていくことの大切さがこれまで以上に強く認識されるようになってきています。そのためには、一人一人が何が真実なのか、何が大切なのかを見極める力を磨き、心を豊かにしていくことがますます必要となりましょう。大正時代に上田で興った学習・文化活動とは、まさにこれと同じ発想のもとにに先輩方が築きあげたものであり、我々はその伝統の上にさらにこれを発展させていきたいと願っております。

そのような中で、身のまわりの様々なものごとが生きた教材となる可能性を持っています。文化財は、私たちを育んだ郷土の文化を学ぶ上で貴重な情報源であり、かけがえのない財産です。一度破壊してしまったら二度と元に戻すことはできないものであるため、現代を担う私たちの責任としてこれを大切に保存して次の世代に引き継いでいかなければなりません。

発掘調査に際して、大学関係者、工事関係者各位ならびに調査に参加された皆様から上田市の文化財保護の理念に対して深い御理解を頂戴しました。おかげさまで、調査は順調に進捗し、弥生時代後期に比定される良好な集落遺跡の一部が確認されました。心から御礼申し上げ、序といたします。

平成15年3月

上田市教育委員会教育長　　森　大和

例　言

1　本書は、長野県上田市常田三丁目１５番１号信州大学繊維学部構内における、信州大学（常田）総合研究棟新営工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、信州大学の委託に基づき、上田市（上田市教育委員会事務局生涯学習課）が実施した。

3　現地での調査は、平成１４年４月２５日から７月１８日まで実施し、整理作業・報告書作成作業は、平成１５年３月まで実施した。

4　遺構の実測は、井沢光子、大井敬子、山本万里が行った他、空中写真測量、図化を株式会社協同測量に委託して行った。また、遺構実測の基準となる国家座標によるグリッドの杭打ち、基準点、水準点の設置も同社に委託して実施した。

5　現地でのバックホーによる作業は、和濃興に依頼した。

6　遺物の整理及び報告書の作成作業は、久保田敦子、市村みつ子、井沢光子、大井敬子、山本万里、丸田由紀子、田村雄二が行った。また、遺物の実測の一部は、小川忠博に写真撮影を委託して、原寸大に焼き付けたものを基礎に図化、トレースした。

7　遺構の写真は、中沢徳士が撮影した。航空写真は、株式会社協同測量に委託して撮影した。

8　遺物の写真の一部は、小川忠博に委託したほか、久保田敦子が撮影した。

9　本調査にかかわる資料は上田市教育委員会が保管している。

10　石材の鑑定は甲田三男先生が行った。

11　本調査にあたり、中本信忠先生、中沢賢先生、地元自治会、（財）長野県埋蔵文化財センター、長野県教育委員会の皆様をはじめとする多くの方々の御指導をいただいた。感謝の意を表したい。

凡　例

遺　構

1　遺構は、次のように略号で表した。また、番号は1996年の調査からの連番とした。

竪穴住居址（ＳＢ－　）　ピット（Ｐ－　）　竪穴住居址内の柱穴（Ｐ　）土坑（ＳＫ－　）

2　遺構の実測図については、次のとおりである。

（1）　国家座標の北を頁の上とした。例外の場合は、方位を示した。

（2）　原図１／20、縮小１／３を原則とした。詳細な図が必要な場合は、原図１／10、縮小１／３とした。

（3）　縮尺は、図版に図で表している。

（4）　標高の単位はｍである。

（5）　網点は焼土を、・は土器を表す。

3　遺構の記述については次のとおりである。

（1）　長さの単位は、ｍである。

（2）　主軸方位は国家座標による北と住居址の軸線との角度で示した。

（1）　竪穴住居址の壁高、土坑、ピットの深さは、検出面からの深さを示した。ただし、住居址内の周溝およびピットの深さは住居址の床面からに深さを示した。

4　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 1990）を用いた。

5　遺構の写真の縮尺は任意である。

遺　物

1　遺物実測図については、次のとおりである。

（1）　原図１／１、縮小１／３である。

（2）　網点は、赤色塗彩を施した範囲、または陶磁器断面を示す。

2　遺物観察表については、次のとおりである。

（1）　法量の単位はcm、ｇである。

（2）　「胎」を胎土、「焼」を焼成、「色」を色調とした。

（3）　（　）内の数値は、土器については推定値、石器については残存値を示す。

（4）　土器の色調は上記の『新版標準土色帖』を用いた。

3　遺物の写真の縮尺は任意である。

目　次

序
例言
凡例
目次
第一章　調査の経緯
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の体制……1
　第3節　調査日誌……2
　第4節　調査の方法……2
　　1　遺跡名……2
　　2　遺跡略号……3
　　3　座標とグリッドの設定……3
　　4　調査方法……3
　　5　遺跡測量……3
　　6　第２次調査地区との位置関係について（座標とグリッドの設定に関する訂正）……3
第二章　遺跡の環境
　第1節　自然的環境……4
　第2節　歴史的環境……8
　第3節　遺跡の層序……13
第三章　調査の結果
　第1節　調査の概要……15
　第2節　遺構……15
　　1　竪穴住居址……15
　　2　土坑……20
　　3　溝跡……23
　　4　配石遺構……24
　　5　ピット……24
　第3節　遺物……25
　　1　土器……25
　　（1）遺構出土の土器
　　（2）遺構外出土の土器
　　2　石器……32
　　（1）遺構出土の石器類
　　（2）遺構外出土の石器類
　　3　その他の遺物……33
　　（1）遺構出土のその他の遺物
　　（2）遺構外出土のその他の遺物
写真図版

挿図目次

第1図　地形区分図…… 5
第2図　遺跡周辺の地形図…… 5
第3図　周辺遺跡分布図…… 10
第4図　基本層序…… 14
第5図　調査地位置図…… 16
第6図　遺構配置図…… 17
第7図　調査関連図1～4…… 35
第8図　調査地区周辺地形図…… 37
第9図　SB－75実測図…… 38
第10図 SB－76実測図…… 39
第11図 SB－77実測図…… 40
第12図 SB－78実測図…… 41
第13図 SB－79実測図…… 42
第14図 SB－80実測図…… 43
第15図 SB－81実測図…… 44
第16図 SB－82実測図…… 45
第17図 SB－83実測図…… 47
第18図 SD－01・02・03・04実測図…… 48
第19図 SD-05(第1号配石遺構)実測図…… 49
第20図 SK・ピット実測図…… 50
第21図 SB－75土器実測図…… 66
第22図 SB－76土器実測図…… 66
第23図 SB－77土器実測図…… 68
第24図 SB－78土器実測図…… 70
第25図 SB－79土器実測図…… 71
第26図 SB－80土器実測図…… 72
第27図 SB－81土器実測図…… 72
第28図 SB－82土器実測図…… 73
第29図 SB－83土器実測図…… 78
第30図 SK土器実測図…… 79
第31図 SD－01土器実測図…… 80
第32図 SD－02土器実測図…… 80
第33図 SD－03土器実測図…… 82
第34図 ピット土器実測図…… 82
第35図 遺構外出土土器実測図…… 83
第36図 石器実測図…… 84
第37図 紡錘車・土製円盤・その他実測図…… 86

挿表目次

第1表　上田地域の地層区分表…… 6
第2表　周辺遺跡一覧表…… 11
第3表　竪穴住居跡観察表(1)…… 59
第4表　竪穴住居跡観察表(2)…… 60
第5表　竪穴住居跡観察表(3)…… 61
第6表　土坑観察表(1)…… 61
第7表　土坑観察表(2)…… 62
第8表　ピット観察表(1)…… 63
第9表　ピット観察表(2)…… 64
第10表 ピット観察表(3)…… 65
第11表 土器観察表(1)…… 87
第12表 土器観察表(2)…… 88
第13表 土器観察表(3)…… 89
第14表 土器観察表(4)…… 90
第15表 土器観察表(5)…… 91
第16表 土器観察表(6)…… 92
第17表 土器観察表(7)…… 93
第18表 土器観察表(8)…… 94
第19表 土器観察表(9)…… 95

第20表　土器観察表(10)…… 96
第21表　石器観察表…… 97
第22表　紡錘車・土製円盤・その他観察表…… 98

写真図版目次

写真図版1　調査地区全景
写真図版2　遺構　SB−82出土土器
写真図版3　遺構　SB−75 ～ SB−77
写真図版4　遺構　SB−78 ～ SB−81
写真図版5　遺構　SB−82 ・ SB−83 ・ SK ・ SD−01
写真図版6　遺構　SD−02 ～ 05
写真図版7　遺物(土器)　SB−75 ・ SB−76
写真図版8　遺物(土器)　SB−76 ・ SB−77
写真図版9　遺物(土器)　SB−77
写真図版10　遺物(土器)　SB−77 ・ SB−78
写真図版11　遺物(土器)　SB−79 ～ SB−81
写真図版12　遺物(土器)　SB−81 ・ SB−82
写真図版13　遺物(土器)　SB−82
写真図版14　遺物(土器)　SB−82
写真図版15　遺物(土器)　SB−82 ・ SK
写真図版16　遺物(土器)　SK ・ SD
写真図版17　遺物(土器)　SD ・ 遺構外
写真図版18　遺物(土器) ・ 遺物(石器)
写真図版19　遺物(石器) ・ 遺物(その他)

第一章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

平成14年3月20日、信州大学施設部企画課(以後、「企画課」という。)から上田市教育委員会事務局生涯学習課文化財係(以後「事務局」という。)に、平成13年度の繰越予算で、上田市常田に所在する信州大学繊維学部構内に「信州大学(常田)総合研究棟新営工事」を施工するのに伴う、周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について、協議があった。

工事の内容は、平成8年に建設した総合研究棟に連結する形で建面積(施工に係る土地の面積)946.6平米、7階建てのL字型の建物を建てるというものであった。

施工箇所には、「常入遺跡群下町田遺跡」が所在し、濃密な密度で弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡が存在することは、平成8年度以来、3次にわたる同遺跡の発掘調査によって明らかであり、施工前に発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図らなければならないことは明白であった。

企画課と事務局ではその後、調査の予算対応や調査の工程、調査現場の安全管理、フェンス・樹木・U字溝・ライフライン等既存施設の取り扱いについて協議や施工範囲の現地確認等を重ね、最終的に次の内容で調査を実施することとなり、平成14年4月25日、現地調査に着手した。

発掘調査地	上田市常田　信州大学繊維学部構内
遺跡名	常入遺跡群下町田遺跡
遺跡の状況	地目(宅地)　破壊状況(一部破壊)
発掘調査の目的及び概要	信州大学総合研究棟建設に伴い、下町田遺跡を発掘調査し、記録保存を図る。現地における発掘作業は、平成14年4月から6月まで実施し、その後、出土遺物の整理、調査図面の整理等を行い、平成14年度中に調査報告書を刊行するものとする。
調査の作業日数	発掘作業　のべ63日　　整理作業　のべ270日
調査に要する費用	11,821,950円
調査報告書作成部数	300部
発掘調査の主体者及び委託先	上田市
その他	特に重要な遺構・遺物が出土した場合は、その保護措置について、別途協議する。
備考	調査区内に所在するフェンス・樹木・U字溝の撤去、調査後の埋め戻しは信大で行う。

第2節　調査の体制

常田遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査に係る体制は、以下のとおりである。調査事務は上田市教育委員会事務局生涯学習課が行った。

教育長　我妻忠夫(平成14年12月20日退任)
　　森　大　和(平成14年12月21日着任)
教育次長　内藤正則
文化課長　塩野崎　利英(平成14年5月19日退任)
　　宮下省二(平成14年5月20日着任)
文化財係長　細川　修(平成14年5月19日退任)

小 林　　浩（平成14年5月20日着任）
主　　査　中 沢 徳 士
尾 見 智 志
塩 崎　幸 夫
久保田　敦子

調査作業員（順不同、敬称略）

池田一郎、甲田五男、佐野和男、満木重雄、村田宣子、横沢生枝、横沢昇、和田和英、井沢光子、市村みつ子、大井敬子、丸田由紀子、山本万里、田村雄二、饗場奈那江、石合好江、田村まり子

第3節　調査日誌（抄）

4月27日　調査地区設定。表土剥着手。

5月13日　調査作業員が作業を行う。（株）共同測量社が基準点測量等の作業を開始する。

5月22日　表土剥終了する。引き続き遺構検出作業を行う。

5月27日　農業用のごみ穴跡などの撹乱が激しく、遺構検出の確認に手間取る。

6月5日　SD－01・02の掘り上げ作業に着手する。遺構実測始める。

6月10日　信州大学中本教授、市誌編纂室の先生方、新聞記者来訪。

6月11日　甲田三男先生来訪。地質について御教示下さる。

6月12日　紡錘車出土する。

7月11日　測量用航空撮影を行う。

7月12日　遺構掘り上げ終了。午後より機材を撤収して現地での調査を終了する。

この後、上田市天神二丁目の埋蔵文化財整理室で遺物の洗浄、注記、接合、図化及び現地調査で得た各種資料の整理並びに報告書の作成作業を行い、平成15年3月に報告書を刊行して調査を終了した。

第4節　調査の方法

1　遺跡名

遺跡名は、1977年に刊行された上田市教育委員会『上田市の原始・古代文化』に記載されている「下町田」

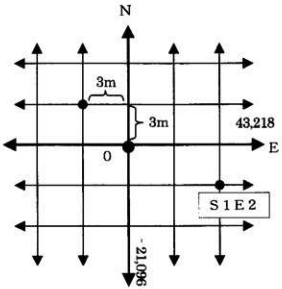
とした。なお、『上田市の原始・古代文化』に記載されている堀之内、上町田、西町田、下町田、中村、手筒山、東町田、藤ノ森遺跡は、1977 年の長野県教育委員会『長野県市町村遺跡分布地図』及び 1979 年の上田市教育委員会『上田市文化財分布地図』において、一括して「常入遺跡群」としている。なお、これら以前に「信州大学繊維学部敷地遺跡」として報告・研究が行われているため、この名称でも広く認識されている。

2　遺跡略号

遺跡略号として、Ｓｈｉｍｏ－ｍａｃｈｉ－ｄａの「ＳＭＤ」を付し、第４次調査を示すローマ数字「Ⅳ」を組み合わせて「SMD-Ⅳ」とした。各種の記号や遺物の注記等にこの略号を用いた。

3　座標とグリッドの設定

下町田遺跡第１次発掘調査で用いたものと連続したグリッドを設定し、遺物の取り上げと測量等に用いた。これは、国家座標に従い、３×３ｍの方眼をはり、方眼の交点に記号を与えたものである。記号は、任意の地点を原点０とし、そこから方向を示すために東・西・南・北にＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎを、距離を示すために３ｍを１単位とした１・２・３・４…の数字を与え、この両者の組み合わせによって表した。例えば、原点０から南に３ｍ、東に６ｍの地点のグリッドはＳ１Ｅ２となる。原点０の地点は、国家座標第Ⅷ系のＸ＝43,218.000、Ｙ＝－21,096.000 である。



4　調査方法

調査範囲は、試掘調査の結果に基づき、建物の範囲とした。また、調査に際しては、表土の排除はバックホーを用い、その後の遺構検出、遺構掘り上げはすべて人手によった。

5　遺構測量

遺構の平面実測は、上のグリッドを基準に簡易遣り方を用いて行った。更に測量用の空中写真の撮影と図化作業を委託して実施した。

6　第２次調査地区との位置関係について（座標とグリッドの設定に関する訂正）

座標とグリッドの設定に関して、平成 12 年刊行の『常入遺跡群下町田遺跡Ⅱ』の記述に誤りがある。同書で記した値より、Ｘは 17.48m、Ｙは 7.19mの移動があることがわかった。同書の「第三章　第１節」の第５図に標記したＳ60 グリッドのＸ座標値 43,038 は、43,055.48 が正しく、Ｅ54 グリッドのＹ座標値－20,934 は、－20,926.81 が正しい。従って、同書の「第一章　第４節　調査の方法」において、グリッドの原点０の座標値をＸ＝43,218.000、Ｙ＝－21,096.000 としたが、そこであらわしたグリッドの原点０はＸ＝43,235.48、Ｙ＝－21,088.81 となる。さらに、「第一章　第４節　調査の方法」では、「第１次調査で用いたものと連続したグリッドを設定し」たと記したが、これも正しくは、第２次調査のグリッドは第１次調査及び本調査のものの延長線上にのらない。本書に訂正して御詫び申し上げたい。

第二章　遺跡の環境

第１節　自然的環境

太郎山や小牧山・城山・独鈷山・殿城山などの山々に囲まれた上田盆地には、千曲川や依田川・産川・浦野川などが流れ、河岸段丘も発達している。河岸段丘のほかに断層活動による段丘状の崖地形もみられ、また盆地を囲む山々の谷口や崖地形が発達しているところでは扇状地が広がっている。上田盆地の南では塩田平と呼ばれる平坦な地形が広がっていて、川筋などに湖成層が露出しているところもある。盆地内の地層や地形は、第四紀に湖や川・火山・断層・火砕流・火山泥流などによって形成されたものである。下町田遺跡はこのような環境の中に存在するのであるが、その概要について平成14年に上田市が刊行した「上田市誌自然編（1）上田の地質と土壌」の第1章を参考に以下に述べたいと思う。

(1) 上田盆地の湖に堆積してできた湖成層

第四紀に上田盆地には大きな湖が3回ほどできたと考えられる。これらに堆積した地層は古い順に古期上小湖成層・新期上小湖成層・上田原湖成層と呼ばれ、時代が古いものほど湖は大きい。古期上小湖成層は標高の高い盆地の周辺に分布しているのに対して、新期上小湖成層はそれより低い場所に分布している。上田原湖成層は千曲川に沿って細長く分布していて、染屋面の断丘下にできた小規模な湖であったといえる。千曲川の両岸に分布する染屋面の一部が活断層で大きく沈みそこに湖ができたためと考えられる。

古期上小湖成層はおよそ90万年前に湖に堆積した地層であることがわかっている。新期上小湖成層は、東築地、八木沢及び室賀から採集された泥岩層や泥炭層に含まれている炭化木により、39,000年、51,000年、61,000年という結果が出ている。上田原湖成層も炭化木の年代測定から28,000年前と報告されている。新期上小湖成層からは、ナウマンゾウやエゾシカ・ウマなどの化石が出ることから、この湖ができたころにはたくさんの動物がこの周辺にすんでいたことが分かっている。

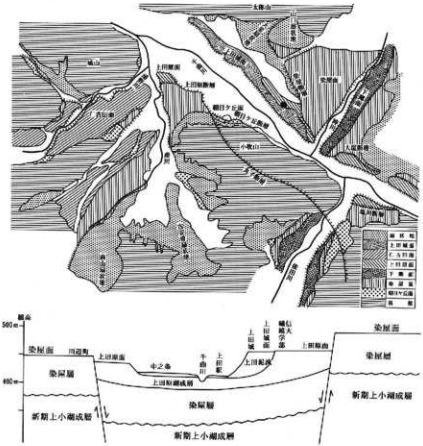
また、上田泥流が盆地に流れ込み、太郎山系の河川をせき止めたためにできた、上田湿地性堆積物と呼ばれる湖泥性の堆積物が市街地の部分に分布している。

(2) 上田盆地を覆った火砕流

殿城山の南の鷲場火山から火砕流が発生し、上田盆地全体を火山灰で覆いつくしたことが分かっている。鷲場火山は60万年前から3万年前ごろまで活動した火山で、特に6万年前から4万年前にかけて活動し、新期上小湖成層が堆積した湖に軽石流を出して平井寺軽石層として残っている。また、それとは別に新期上小湖成層が形成された以後にも活動しており、染屋層や新期上小湖成層の上に鷲場火砕流が堆積している。少なくとも二度にわたって火砕流が発生しており、下位を第1鷲場火山灰流、上位を第2鷲場火山灰流と呼んでいる。

(3) 台地をつくる河岸段丘と段丘崖地形

染屋面　礫岩層を主とする染屋層は千曲川上流や神川・依田川上流になる岩石が川によって運ばれて堆積してできた地層である。この染屋層の堆積物からできている平坦な地形を染屋面という。染屋面は盆地の北東側の大部分を占めて広がっている。染屋層は千曲川左岸地域にも広く分布していて、平坦な地形を形成している。


上田盆地
上田城跡
千曲川
中之条
染屋面
染屋層
新期上小湖成層
上田盆地成層
上田城
上田駅
上田原面
上田原段丘
上田原段丘面
上田原段丘層
上田原段丘面
上田原段丘層
上田原段丘面
上田原段丘層

年代区分					地層区分	主な火成活動	大型動物化石
	新生代	第四紀	完新世	古代 弥生 縄文	扇状地、崖錐堆積物		
					上田湿地性堆積物	上田記念	
1碑前			更新世	旧石器時代	上田原湖成層	鷲場火山灰流	ナウマンゾウ（下本郷、青木村当郷）
13碑前					新期上小湖成層		アジアノロバ（上室賀）、エゾシカ（神畑）、ヤベオオツノシカ（青木村当郷）
70碑前					古期上小湖成層	烏帽子岳輝石安山岩 神科虚空山輝石安山岩	アケボノゾウ（丸子町塩川）
170碑前		第三紀	鮮新世		大杭層	茂沢溶結凝灰岩	
520碑前			中新世		小川層	半過岩鼻角閃石英ひん岩 太郎山天狗岩流紋岩	
1100碑前					青木層	弘法山石英安山岩	
1400碑前					別所層	小泉凝灰岩	シナノイルカ（小泉）、クジラ（小泉、伊勢山）
1500碑前					内村層	独鈷山玄武岩質安山岩 緑色凝灰岩	ホオジロザメ（丸子町和子）
1700碑前			漸新世				
			始新世				
6500碑前			暁新世				

湖沼の堆積物

海の堆積物

第１表　上田地域の地層区分表

上田原面　上田原湖成層からできている平坦な地形面を上田原面と呼ぶ。この面は染屋面より低く、上田城面より高い。千曲川右岸では国分の国露津穂神社から始まり、国分付近では染屋面の崖下を取り囲むように分布し、向きを変えて、信州大学繊維学部・科野大宮社・日輪寺方面に広がっている。千曲川左岸では、上田原、丸子町の狐塚の地形面が上田原面である。

上田城面　上田城面は、千曲川上流から上田盆地に流れ込んだ泥流の堆積物からできている。千曲川左岸は浸食されてしまったので現在は見ることはできない。右岸地域では塩尻の国道18号線と上田バイパスが分離する付近から始まり、上田城・信濃国分寺など千曲川に沿って見られる。千曲川との比高は15～17mもあり、右岸地域はかなり隆起していることを示している。

下郷面　下郷面は、隆起する染屋面を神川が浸食した結果できた段丘で、上田盆地では数少ない浸食面である。この面の上には鷲場第２火山灰流が堆積している。

塩田平の段丘　産川沿いの左岸下流では比高 5mの段丘崖が上田交通別所線大学駅西方から神畑駅西方にかけて連なっている。しかし、追開沢川や尻無川などの川沿いには、歴史時代からの開墾やほ場整備事業などにより段丘崖が壊され、段丘地形が見られない。しかし調査により、ため池や産川の川底からは鷲場火山灰流が観察された。この地域は段丘上にあり、下小島方面に半球状に伸びている。

産川のように大きな川が段丘上を流れている例は他にほとんどない。本郷面上を産川が流れるようになったのは、新町から鈴子にかけて走る断層が活動した結果により塩田平側が大きく沈んだためと考えられている。それに加えて神戸川の押し出しにより上本郷の染屋面との段差が無くなり、染屋面下の尻無川に流れていた産川が段丘上を流れるようになったと考えられる。深い谷を染屋面上に形成していないことから、沖積

時代にこのようになったものと考えられる。

朝日ヶ丘・国分・大屋等の断層崖　朝日ヶ丘西方には染屋面・上田原面が形成されているのに対して、朝日ヶ丘付近には新期上小湖成層があるだけである。これはこの地域に東西に延びる断層が活動して北側が落ち込んだからである。ここの西から西北に延びる崖は断層崖と考えられる。

染屋面より下に位置する国分や上田東高等学校、大屋などの平坦な面は染屋面が落ち込んで、その上に上田原湖成層が堆積してできたものと考えられている。染屋台地を取り囲む崖は断層崖と考えられ、このほか川辺町の北側の段丘崖も同様な理由から断層崖と考えられている。

仁古田面　浦野川によって形成された段丘面が仁古田面で、仁古田層からできている。この層は、新期上小湖成層の上に堆積している。この層の上には粘土層が重なっているが、鷲場火山灰層に含まれる鉱物が入っていない。このことから、仁古田面は鷲場火山灰流が堆積した後に形成された段丘面といえる。

(4) 上田をおそった火山泥流

上田泥流は、上田地域に最も厚く広く分布していることからそう呼ばれている。この泥流は千曲川に沿って帯状に分布し、低い段丘を造っている。噴火で火口湖が壊されて泥流となって流れたものと考えられ、含まれている岩石や爆裂口の大きさ等から三方ヶ峰と高峰の間にある馬蹄形をした窪地の深沢爆裂火口が泥流の発生した場所と推測されている。泥流には軽石と赤岩が取り込まれている。軽石流は、小諸懐古園付近にある浅間軽石流といわれるもので、この上部は約 11,000 年前の噴出物と地質年代が測定されていることから、上田泥流はそれ以後に発生したことになる。また、赤岩は三方ヶ峰の監視小屋付近にも多く転がっており、噴火したときに飛ばされた岩石である。このことから、水ノ登の南側が火山活動を始めて赤岩を噴出し、大爆発により深沢爆裂口ができ、池の平火口湖跡の水が一気に流れ出て、深沢川を流れ下り浅間軽石流を泥流の中に取り込んで、千曲川の流れに沿って上田方面へ流れたものと考えられる。そして、泥流が流れ込んだ千曲川沿いの場所は周囲の土地より標高が高くなり、太郎山系の川が南へ向かって千曲川に流れ込むことができなくなり、風呂川へ注ぐようになったと考えられる。

(5) 上田ロームのふるさと

上田盆地に分布するローム層は、北アルプスにある古い地質時代に活動した火山や今も活動している御嶽山の噴火によって、火山灰や軽石が地上に降ってできている。これらのローム層は古い方から古期下部ローム層、伊勢山ローム層、曙ローム層、古期上部ローム層、中期ローム層、新期ローム層と区分され、このうち上田市で観察できるのは伊勢山ローム層、古期上部ローム層、中期ローム層、新期ローム層である。

伊勢山ローム層　上田市では伊勢山で見られる。大変硬いローム層で、岩質は流紋岩質であるといえる。降った当時は軽石層があったと考えられる。古期上小湖成層に不整合に重なっている。この火山灰を降らせた火山は約 90 万年前に北アルプスにあった火山で、現在は浸食されて無い。

古期上部ローム層　黄褐色のローム層に黒雲母軽石層が 3 層はさまれてできている。南安曇郡三郷村・松本市・長野市・北佐久郡等からさらに関東地方まで分布が広がっていて、上田では古安曽、穴平、長入で見られる。関東地方では多摩ローム層の中にはさまっている。30 万年から 60 万年前に噴火した火山のローム層であることが分かっている。

中期ローム層　別所温泉から野倉へ通じる道路で見られる。黒褐色をしたやや粘り気のある火山灰層である。

新期ローム層　最下位から立山軽石層、御岳第 1 軽石層、姶良火山灰層等が積み重なってできている。

立山軽石層：立山カルデラが造られたときの噴火によって上田まで飛んできたものである。軽石と火山砂

からできている。地質年代は、約12万年前とされている。

御岳第1軽石層：御嶽山が7万年前に大噴火し、伊那谷を中心に甲府盆地関東平野の南部まで降らせている。分布範囲の北限に当たるのが上田市で、保福寺峠、別所温泉、独鈷山、室賀等に見られる。

姶良火山灰層：鹿児島湾にかつてあった姶良カルデラから約2.2万年前に飛んできた火山灰で、東北地方まで分布している。上田市では小泉にみられ、白色の火山灰でガラス片がたくさん入っている。

第2節　歴史的環境

「**常入遺跡群**」は、上田市の千曲川右岸地域の南東部に位置している。周辺を含めたこの地域の地形は、平坦面である上田城面、上田原面、染屋面のほか、大星及び山口扇状地、千曲川及び神川によって形成された複数の段丘面等によって構成され、複雑な様相を呈している。その中で、この地域にはこの他にも上田・小県地方屈指の大遺跡と呼ばれる幾つかの遺跡が存在する。これらの遺跡は、当地が奈良時代から平安時代にかけて信濃の中心的な役割を果たす地域に発展した基盤として大きく係わっていたものと考えられる。

本遺跡群は上田城面と上田原面にまたがって展開し、その南東に**国分遺跡群**がある。国分遺跡群の南に隣接して**国分寺周辺遺跡群**がある。これは千曲川の形成した沖積地に立地し、上田城面より一つ及び二つ下位の平坦面に所在している。**国分遺跡群**と**国分寺周辺遺跡群**の範囲にまたがって、国指定史跡の**信濃国分寺跡**がある。僧寺と尼寺は、上田城面より下位の千曲川形成の沖積地に立地しているが、史跡範囲は、南西側は同じ面の段丘崖上まで、北側は上位上田城面の現国分寺の所在地まで、東は上田城面にある国分八幡神社までとされている。

その他、「**常入遺跡群**」の北東、一つ高位の染屋面には、**染屋台条里水田跡遺跡**がある。その北方の山口扇状地の端部には**大星西遺跡**、**雁堀遺跡**、**西丘遺跡**、**金井裏遺跡**等が存在する。大星扇状地には**八幡裏遺跡**群がある。第3図及び第2表に本遺跡群とその周辺遺跡を簡単にまとめて示した。

〈縄文時代〉

八幡裏遺跡群の**思川遺跡**は、上田地方を代表する縄文時代の遺跡の一つとして上げられる。昭和27年に病棟の改築に伴って五十嵐幹雄氏によって発掘調査が行われた。調査では明確な遺構は確認されなかったものの、中期から後期にかけての土器や石器とともに、ニホンジカやイノシシを中心とする相当量の動物遺存体が出土した。その後平成6年に国立長野病院の建設工事に伴い約8,000㎡が調査された八幡裏遺跡第2次発掘調査では、柄鏡形敷石住居址を含む住居址7軒と土壙、集石遺構などが検出された。中でも土壙から検出された屈葬人骨は、遺存状態もよく、貴重な調査例となった。出土した遺物は、中期の加曽利E式、後期の称名寺式、堀之内式、加曽利B式などの土器のほか、石器類、土偶、大珠、獣骨などがある。その後、平成8年度に行われた国立長野病院看護婦宿舎建設に伴う同遺跡の第3次発掘調査でも、中期後葉から後期前葉の土器を伴う3軒の敷石住居址が確認されている。そのほか、同年に市道緑ケ丘1－3・1－4号線道路改良工事に伴って行われた第4次調査でも中期から後期の遺物が僅かに出土した。

大星西遺跡は、中期の加曽利E式土器が表採されている。その他、山口扇状地と染屋面の間に位置する住吉の**熱塞寺遺跡**では、長島の矢出沢川右岸の畑地から縄文時代の石錐が採集されている。

また、**国分寺周辺遺跡群**の**浦沖遺跡**は、昭和24年に発掘調査が行われ、中後期に属すると思われる住居址が検出されている。平成12年度にしなの鉄道国分寺新駅駅前整備事業に伴って行われた発掘調査では、中期から後期に属する遺物と、中期中葉から後葉の竪穴住居址等を検出している。また、それより段下の**西沖遺**

跡は、(財) 長野県埋蔵文化財センターによって平成6年度・7年度に市道踏入大屋線及び北陸新幹線建設に伴って発掘調査が行われ、前期から後期の土器片が多く出土した。

〈弥生時代〉

弥生時代の遺跡としては、上田盆地では前・中期の遺跡は僅かしか確認されていない。**八幡裏遺跡**は数少ない該期遺跡のひとつで、大正14年に上田温泉電軌北東線の敷設工事が行われた際に、中期栗林Ⅱ式期の壷形土器2点と大型蛤刃石斧が出土している。このように表採や工事中の出土例はあるものの、遺構を伴った例としては確認されていない。また後期では、上田地籍の北小学校の東方、黄金沢扇状地の扇央に位置する**雁堀遺跡**から箱清水式土器が表採されている。

昭和60年に国道18号バイパス改築工事に伴って発掘調査された**金井裏遺跡**からは、箱清水式期の住居址1軒とその直後に属すると見られる土師器の出土する住居址1軒が検出された。平成8年に住宅展示場建設に伴ないその北側が調査され、箱清水式土器及びS字口縁台付き甕が出土する竪穴住居址2軒が確認された。

国分寺周辺遺跡群の**西沖遺跡**は、平成6年度と7年度に (財) 長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査され、後期箱清水式期から古墳時代前期の集落と溝が確認された。平成9年、染屋台に立地する**上沖（大沢）遺跡**が国分産業団地造成工事に伴って発掘調査され、箱清水式土器が多く出土している。

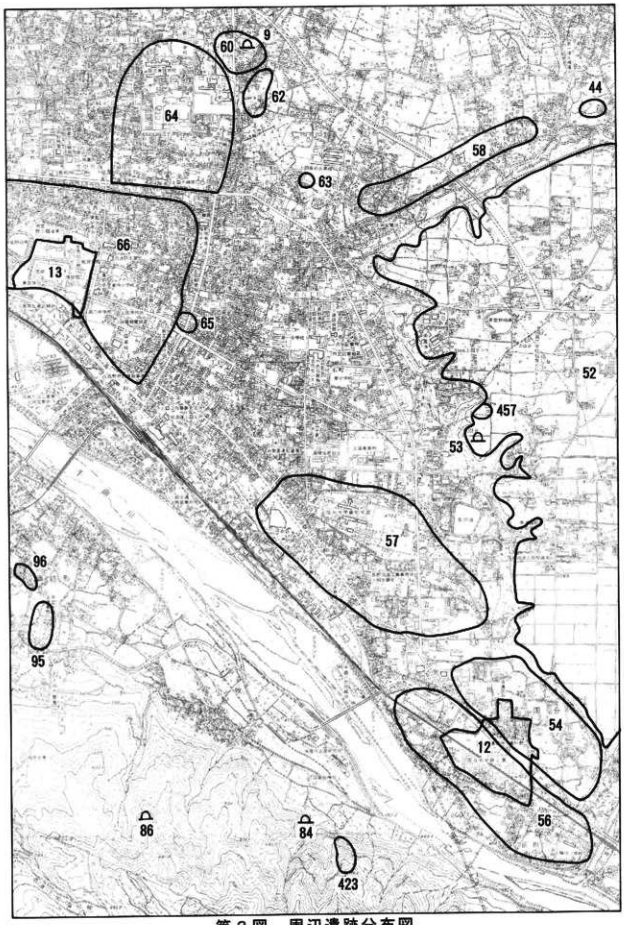
今回調査した「**常入遺跡群**」は、古くから豊富な土器を出土することが知られていた。大正時代から昭和初期には、小山真夫や上小教育会によって弥生土器が採集、記録され、『上田市史』、『信濃史料』及び五十嵐幹雄による「信州大学繊維学部保存の彌生式土器」(『信濃』2－12　1950 年) に採集された土器が掲載されるなど、上田・小県地方の弥生研究に重要な役割を果たしてきた。平成8年度の信州大学繊維学部構内における研究棟の建設に伴い、**下町田遺跡**において1,000㎡の発掘調査が行われ、10軒の竪穴住居址が確認されている。さらに平成11年には信州大学遺伝子実験施設の建設に伴って発掘調査が行われ、弥生時代後期と古墳時代前期の竪穴住居址25軒が検出された。平成12年度に信州大学繊維学部構内において産学官連携支援施設の建設に伴ない発掘調査が実施され、30軒近くの弥生時代後期の竪穴住居址等が検出された。これらの調査により、上田盆地における千曲川流域最大規模の弥生時代後期から古墳時代前期の集落がここに存在していることが裏付けられた。

〈古墳時代〉

古墳時代になると、太郎山麓に前方後円墳の二子塚古墳、方墳の**大蔵京古墳**が築造されている。**二子塚古墳**（上田市指定文化財）は、定型化した前方後円墳としては東信地方で唯一の古墳である。墳丘は後世の改変が激しいが、現在の規模は中軸の全長約51m、前方部の長さ約26m、最大幅約25m、高さ約5m、後円部の長さ約25m、最大幅約39m、高さ約6mを測る。古墳の北側には周濠の一部とみられる窪みがあり、墳丘から表採された円筒埴輪片により6世紀前半の築造と推定されている。本古墳の周囲にはかつて4～5基の円墳が存在していたと伝えられるが、現存するのは北西部の円墳1基のみである。これらの古墳は、二子塚古墳の陪塚と言われていたが、時期的に異なるため現在では否定されている。

大蔵京古墳（上田市指定文化財）は、一辺が32～35mの方墳で、高さは5～8mを測る。墳丘上から表採された土師器により、4世紀末から5世紀前半の築造と推定されており、現在確認されている県内最古の方墳で、上小地区では最古の古墳である。

風呂川古墳は、墳丘は失われていたが、平成4年に (財) 長野県埋蔵文化財センターによって北側周濠の一部が調査された。周濠の幅は4.0～5.5m、調査面からの深さは約1.5mを測る。北東辺の北隅寄りには、



第３図　周辺遺跡分布図

埋蔵文化財一覧表				
番号	遺跡名	所在地	時代	備　考
44	熱泰寺遺跡	住吉字熱泰寺	縄文	
52	染屋台条理遺跡	上野・住吉・古里・国分	平安	1985年から数回にわたる調査
53	向田古墳	古里字向田	古墳	半壊
54	国分遺跡群	国分字古城・堂浦・屋敷	弥生～平安	1997・1999年上田市調査
56	国分寺周辺遺跡群	国分字仁王堂・明神前他	縄文～平安	1994年から県埋文センター調査・2000年上田市調査
57	常入遺跡群	常入字堀之内	縄文～平安	下町田遺跡ほか7遺跡
58	金井裏遺跡	上田字金井裏・鑿原	縄文～平安	1985・1996年上田市調査
60	二子塚古墳	上田市秋葉裏	古墳	
62	雁堀遺跡	上田字雁堀	弥生・平安	
63	西丘遺跡	上田字西丘	平安	
64	八幡裏遺跡群	緑ケ丘字思川・大星前他	縄文～平安	1994・1996年上田市調査
65	海野遺跡	中央・大手	弥生・平安	
66	上田城跡	中央・中央西・大手・北大手	近世	
84	六句古墳	小牧字六句	近世	
86	初太郎古墳	小牧字花水	近世	
95	渋取田遺跡	諏訪形字渋取田・中堰	縄文	
96	中沢遺跡	諏訪形字中沢	平安	
423	小牧遺跡	小牧字城山	近世	
457	染屋城遺跡	古里字英	近世	
国指定文化財（史跡）				
No	名称	種別	所有者	備考
12	信濃国分寺跡	史跡	上田市・私所有	昭和5年指定・1963～1971年上田市調査
13	上田城跡	史跡	上田市・私所有	昭和9年指定
市指定文化財（史跡）				
No	名称	種別	所有者	備考
9	二子塚古墳	史跡	二子神社	昭和43年市指定

第２表　周辺遺跡一覧表

掘り残しが一箇所設けられ、その西側から石組みとともに多数の土師器が出土した。古墳の規模は、一辺が25～30mの方墳と推定され、築造年代は、一括出土した土師器により5世紀第2四半期と推定されている。

後期古墳についても、この山麓に6基ほど散見できるが、いわゆる群集墳的な古墳群は確認されていない。しかし、1987年の下水道工事中に発見された豊原古墳のように、墳丘ごと太郎山から押し出した土砂によって埋もれているケースもあり、地表では確認できない古墳の存在も想定できる。

また、神科地区には、染屋面の段丘端に向田古墳がある。これは、半壊しているが、墳丘の径7.5m、高さ1.6mの円墳と思われる。

集落遺跡はとしては、太郎山麓に多く分布しているが、発掘調査が実施された例は少なく、その様相は明確ではない。平成8年度に発掘調査された**八幡裏遺跡**群の第4次調査では、該期の住居址が7軒検出されたほか、国立長野病院の敷地の北側にある段丘の上面を調査した平成6年度の第1次調査でも古墳時代後期の住居址が1軒確認されている。

平成6・7年度に（財）長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された**国分寺周辺遺跡**群の**西沖遺跡**からは130軒の中・後期の住居址が検出された。特に5世紀後半から6世紀代の遺構密度は非常に高く、集落分布は短期で変容していることが確認された。平成12年度に調査が行われた**浦沖遺跡**及び**仁王堂遺跡**からは、古墳時代後期から奈良時代初めにかけての集落が検出された。

また、**国分遺跡**群の幾つかの遺跡からもこの期の土器が表採されている。

染屋台条里水田跡遺跡の範囲内に立地する**西之手遺跡**が平成8年・9年にやおふく新店舗建設に伴なって発掘調査され、古墳時代中期と後期の掘立柱建物址38棟と溝址9条等が確認された。同年、この東側に隣接した地域において、市道西野竹14号線代替地取得事業に伴い同遺跡の発掘調査を実施した。掘立柱建物群と溝址等が確認され、遺跡の東側縁辺部が確認された。平成9年**上沖（大沢）遺跡**の発掘調査において、古墳時代中期の竪穴住居址等が確認された。

また、今回調査した**「常入遺跡群」**には、この期の大きな集落があることが知られている。昭和41年に上田小県誌刊行事業推進のため、信州大学繊維学部の桑園の一部が発掘調査された。昭和45年の『信大繊維学部敷地内遺跡調査概報』（小林幹男・川上元『長野県考古学会誌』第9号）によると、古墳時代中期・後期に属する竪穴住居址2軒と未確認遺構が検出され、遺物は、18点もの完形品が出土するなど保存状態は良好であった。この地方の標識的土器として今日に至っている。

〈奈良・平安〉

信濃国分寺跡は周知のとおりであるが、国府の所在地は明らかになっていない。信濃国の国府が、松本平に移る以前は、国分寺の所在する上田地域であったろうことは推論されてきたが、未だに結論を得られない状況である。本調査地周辺の信州大学繊維学部構内は、染屋台や塩田平と並び有力な候補地として注目を集めており、これまでに奈良、平安の各時代に属する遺物が多く採集されている。しかし過去4回にわたって行われた**下町田遺跡**における発掘調査では、国府関係の資料は出土しなかった。また、令制東山道も上田盆地を通過し、そのルートについて地名からの研究は深まっているが、考古学的な確証は得られていない。

この時代の集落遺跡については、当地域に広く分布している。これまでの調査結果からはきわめて密度の薄い遺跡しか確認されていなかったが、近年の発掘調査により次第に明瞭となってきた。

染屋台条里水田跡遺跡は、条里水田跡として一括に括られた範囲の中にいくつかの集落址が存在していることがこれまでの発掘調査で確認されている。しかし、それらの範囲等については未だ明確ではない。昭和60年国道18号上田バイパス改築工事に伴って、染屋台グラウンド（旧県営上田野球場）の北東において発

掘調査が行われたが、遺構及び遺物は検出されなかった。平成8年、上田市立第一中学校建設に伴ない**古城遺跡**が発掘調査され、平安時代の竪穴住居址7軒と土坑及びピット群が確認され、黒色土器の坏や長胴甕が検出された。包含層からは、九葉単弁蓮華文軒丸瓦の一部が出土している。これは、『信濃国分寺一本編一』に所収されている現国分寺本堂東南隅から出土したものと同笵と考えられている。平成9年**上沖（大沢）遺跡**の発掘調査で平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物址及び土坑墓等が確認された。また、**染屋台条里水田跡遺跡**が所在する染屋台は、国府跡推定地でもある。昭和57年度から61年度までに創置の信濃国府跡推定地確認調査が古里地区の**西之手・東之手**地籍を中心とした各所において行われた。しかし、残念ながら明確な手がかりは得られなかった。

八幡裏遺跡群からは、平成6年と8年に実施された調査で15軒の住居址を検出した。また、平成8年に住宅展示場建設に伴なって**金井裏遺跡**が調査され、奈良時代の遺物が僅かに出土している。

平成9年及び11年に市道川辺町国分線建設工事に伴い**国分遺跡群**の発掘調査が行われ、現信濃国分寺の北方3ヶ所から道路条遺構、掘立柱建物跡、溝跡等の遺構と奈良時代から平安時代を主体とする土器、瓦、錫杖鋳型等が検出された。（財）長野県埋蔵文化財センターによって平成6・7年度に発掘調査された**国分寺周辺遺跡群**の**西沖遺跡**からは、奈良時代の住居址が35軒、平安時代の住居址が27軒検出された。

<中世以降>

現在の市街地の常田付近にあったと推定されている常田荘の名が史料に初めて見えるのは、『山科家古文書』安元二年（1176）の「八乗院領目録」の中であり、文治二年（1186）『吾妻鏡』三月の条「乃具未済の庄々注文」にもその名がみられる。「常入遺跡群」の**堀之内遺跡**は、創置の信濃国府のほか、中世居館址の推定地となっている。また、嘉暦四年（1329）の『諏訪大社神社文書』の「諏訪上社造宮目録案」に記された上田庄の中心は、矢出沢川上流部の長島とその周辺と推定されている。しかし、残念なことにこれらに関する考古学的資料は今のところ極めて少なく、中心は千曲川左岸の塩田北条氏の仏教文化に移った感がある。

昭和60年に発掘調査された**金井裏遺跡**からは内耳土器、青磁、近世陶器等が出土しているが、これらは遺構との関連がつかない資料である。平成7年、パチンコ・パゴパゴ店舗建設に伴ない染屋台に立地する**大畑遺跡**が調査され、竪穴住居址1軒、掘立柱建物址1棟、溝址7条と青磁蓮弁文碗の破片と宋銭「嘉祐通宝」等が検出された。平成9年**上沖（大沢）遺跡**の発掘調査では、平安時代終末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物とこれに伴う土坑等が確認され、土坑及びその周辺から12世紀代を中心にした陶磁器等が出土している。

戦国時代になって真田氏の**上田城**築城と**城下町**形成により再び上田盆地の中心地となり、近世から近代にかけては、「蚕都」として栄え、今回調査を行った信州大学繊維学部はその象徴なのである。

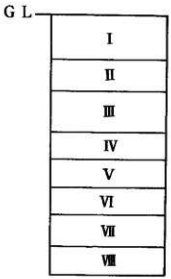
第3節 遺跡の層序

標準土層は、次のとおりである。調査地は、以前に校庭、キャンパス、及び校庭とキャンパスとの境界線を成す生垣等のあった場所に当たる。図の①採集地は、校庭である。Ⅰ層からⅣ層は客土である。ⅤからⅦ層は上田湿地性堆積物、Ⅷ層は上田泥流である。②の採集地はキャンパス側である。Ⅳ層が湿地性堆積物で、Ⅴ層が上田泥流である。

本調査で検出された遺構は上田湿地性堆積物を切っているが、場所によっては、遺構の落ち込みが視覚によって明確にとらえることが可能な上田泥流まで削除して検出したところもある。

①

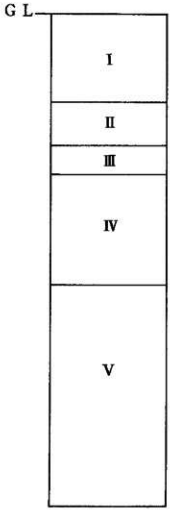
470.50



I層	10YR5/6 黄褐色砂質土層
II層	小石
III層	砕石
IV層	10YR6/6 明黄褐色砂質土小石混じり層
V層	7.5YR4/4 褐色シルト層
VI層	7.5YR3/4 暗褐色砂質層
VII層	7.5YR4/2 灰褐色シルト層
VIII層	10YR4/4 褐色砂質土層

②

470.20



I層	10YR3/4 褐色砂質土層
II層	10YR3/3 暗褐色砂質土にブロック状の褐色土を含む層
III層	10YR2/1 黒色石灰岩砂質土層
IV層	7.5YR3/2 黒褐色シルト層
V層	10YR4/4 褐色砂質土層

第4図　基本層序

第三章　調査の結果

第１節　調査の概要

本調査で検出された遺構は、第６図の遺構配置図に示したとおり、竪穴住居址が９軒、土坑が23基、溝跡が４条、配石遺構が１件であった。このほか、ピットが127基検出され、このうち２件が柱穴列をなしている。これら遺構の個々の詳細については、第２節に報告する。なお、土坑及びピットの名称は、墓壙、井戸跡などといった機能に基づいた呼称として用いていない。また、大学建設以降に造られたとみられる暗渠、排水管、フェンスの基礎、生垣、及び耕作による掘り込みや撹乱等が多く確認されたが、これら近代に属する遺構の説明は本書では省く。

出土した遺物は、土器及び陶磁器、石器、金属製品、紡錘車や土製円盤の土製品であった。これらのうち、実測可能な遺物を中心に、遺構の覆土に含まれて出土したものから床面或いは底面に付着した状態で出土したもの等を遺構出土の遺物として、包含層中から出土したもの及び準備段階等で表採されたもの等を遺構外出土の遺物として第３節に報告する。

第２節　遺構

１　竪穴住居址

第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉（第９図・第３表）

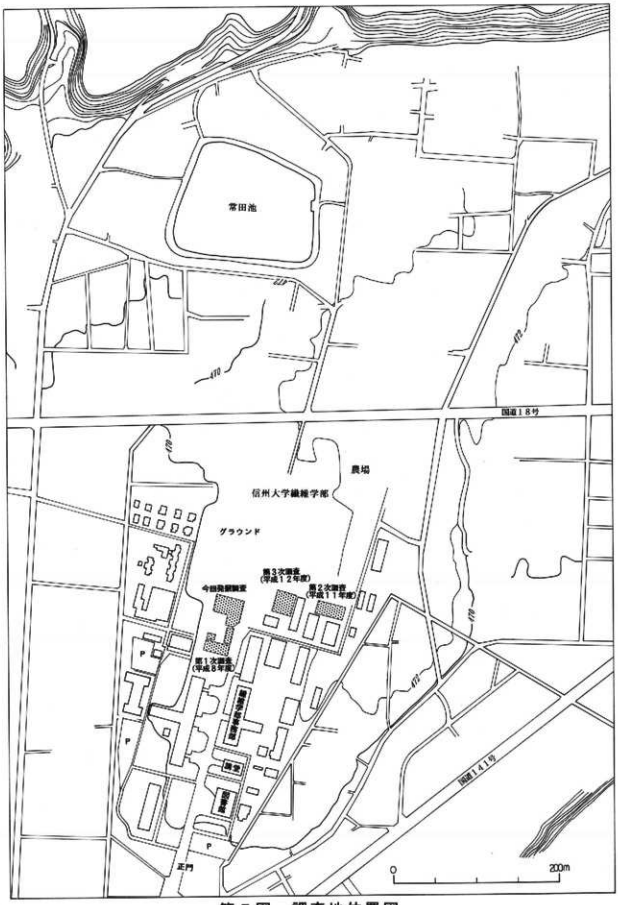
調査地区の中央S11E54、S11E55、S11E56、S12E54、S12E55、S12E56グリッドに位置する。排水管埋設工事の際に壁から床面にかけて破壊され、東西に分断されている。また、生垣の跡と思われる掘り込みによって南東の壁が三ヶ所にわたって撹乱を受けている。北西部は調査地区の外にかかり、この部分は未調査である。第76号竪穴住居址〈ＳＢ－７６〉、第77号竪穴住居址〈ＳＢ－７７〉、第83号竪穴住居址〈ＳＢ－８３〉と重複し、これらを切る。平面形プランは隅丸長方形である。長辺と短辺は直線的で、南壁は4.4m、東壁は6.4mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ46.0cmを測る。主軸方向はN－20°－Eを指す。床面積は、推定で2.26㎡である。覆土の大半を占める第２層は小石を多く含み、南西壁近くの床面上には炭化物を多く含む土が分布していた。

床面は堅緻である。ピットはＰ１、Ｐ２及びＰ５が主柱穴と考えられる。これらの平面形は楕円形を呈している。南西壁側には、Ｐ４とＰ３があり、入口施設の柱穴と考えられる。

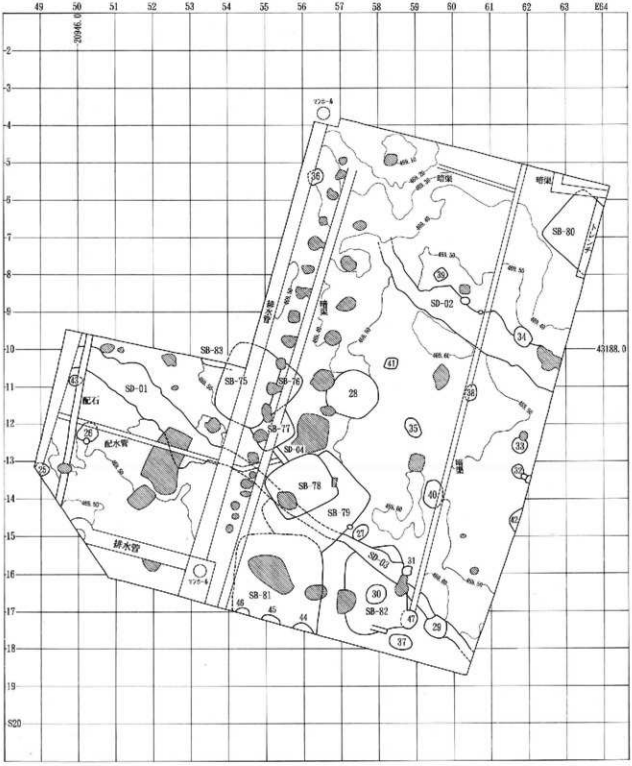
遺物は覆土中から出土した。弥生時代後期箱清水式期の壺、深鉢、鉢、甑、蓋、甕、紡錘車等が出土した。また、磨石と金属製品が出土した。

第76号竪穴住居址〈ＳＢ－７６〉（第10図・第３表）

調査地区の中央S11E56、S12E56グリッドに位置する。生垣の跡と思われる掘り込みと暗渠排水路によって、覆土と壁が部分的にが破壊されている。第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉に床面下まで破壊され、第77号竪穴住居址〈ＳＢ－７７〉を切っている。平面形は、残存している北東と南東の壁の一部から推測して隅丸長方形を呈していたものと考えられる。規模は不明である。検出面から床面までの高さは、およそ17.0cmを測る。主軸方向は、南東壁を基準として推測すると、N－35°－Eを指す。


常田池
国道18号
農場
信州大学繊維学部
グラウンド
第3次増築
(平成12年度)
第2次増築
(平成11年度)
今回発掘調査
第1次増築
(平成8年度)
P
P
P
国道141号
正門
0
200m

第５図　調査地位置図



数字のみは土坑
は模式

第６図　遺構配置図

床は、壁付近を除いて堅緻である。ピットは確認されなかった。床に直径約54.0㎝の浅い掘り込みが確認された。その底面は熱を受けて橙色化し、鉢の破片が付着している。この掘り込みの中の土は炭化粒を含んでいる。また、これの西側に床面の一部が熱を受けて橙色化しているのが確認される。掘り込まれていない。

遺物は、覆土中及び床面から深鉢、高坏、鉢及び甕等が出土した。図示したように、特に南東壁側の床面近くに拳から人の頭くらいの大きさの角礫と共にまとまって検出された。いずれも弥生時代後期箱清水式期のものと考えられる。また、覆土中から砥石と磨石が出土した。

第77号竪穴住居址〈ＳＢ－７７〉（第11図・第3表）

調査地区の中央S12E55、S12E56、S13E55、S13E56グリッドに位置する。フェンスの基礎の跡と思われる掘り込みによって覆土が壊され、暗渠によって壁から床面にかけて一部が破壊されている。第76号竪穴住居址〈ＳＢ－７６〉に切られて北東壁の北部を失い、第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉には北西部分の床面下から壁まで破壊される。平面形は、残存している部分から推測して隅丸長方形を呈していたと考えられる。南東壁は3.2mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ22.0㎝を測る。主軸方向はN－38°－Wを指す。覆土は一層で、細かい炭化物を含んでいる。床近くの高さからは拳ほどの大きさの角礫が土器と共に多く出土した。Ｐ１からＰ３は主柱穴と考えられる。Ｐ２とＰ３は楕円形を呈し、Ｐ１は円形を呈する。

遺物は、覆土中及び床面から出土した。図示したように、特に南東コーナーの床面にまとまって検出された。弥生時代後期箱清水式期の壺、高坏、鉢、甑、蓋、甕等が出土した。

第78号竪穴住居址〈ＳＢ－７８〉（第12図・第3表）

調査地区の中央S13E56、S13E57、S14E55、S14E56、S14E57、S15E56、S15E57グリッドに位置する。ポプラ並木の根に撹乱を受けて覆土と床の一部を失っている。北東壁の一部も撹乱を受けている。第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉を切る。平面形は隅丸長方形を呈している。北西壁は丸みをもって張っている。その他の壁は直線的である。南西壁は4.3m、南東壁は5.0mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ22.0㎝を測る。主軸方向はN－42°－Eを指す。床面積は、18.5㎡である。

床面は堅緻である。ピットは4つ検出され、そのうちＰ２からＰ４は主柱穴と考えられる。炉は北東壁側の奥の主柱穴間に存在する。直径約36.0㎝の円形で浅く掘りこまれている。炉の覆土には炭化物及び焼土粒が含まれている。底面は部分的に焼けて橙色に変色している。土器片が底面に付着して出土した。

遺物は覆土中に含まれて出土したものと、床に付着して出土したものがある。弥生時代後期箱清水式期の壺、甕、紡錘車等が出土した。

第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉（第13図・第4表）

調査地区の南側S13E57、S14E56、S14E57、S14E58、S15E56、S15E57、S15E58、S16E56、S16E57グリッドに位置する。第78号竪穴住居址〈ＳＢ－７８〉に切られ、床と北西壁が破壊される。また、第81号竪穴住居址〈ＳＢ－８１〉と削平により床と南西壁が破壊される。このほか、第3号溝跡〈ＳＤ－０３〉、Ｐ－48、Ｐ－50、Ｐ－51及びＰ－163に切られる。平面形態は、残存する北東壁と南東壁から推定して隅丸長方形である。北東壁は5.85m、南東壁は7.90mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ18.0㎝を測る。主軸方向はN－44°－Eを指す。床面積は、推定45.2㎡である。

床面の南西部は、削平を受けたりポプラの根に破壊されたりして床の表面が失われているが、その部分以外は堅緻である。ピットは4つ検出され、これらは主柱穴と考えられる。Ｐ４とＰ３は、第78号竪穴住居址

に上部を破壊されている。炉は確認されず、第78号竪穴住居址〈ＳＢ－７８〉に破壊された可能性がある。

遺物は住居及びピット内の覆土中から僅かに出土した。弥生時代後期箱清水式期の壺、高坏、鉢、甕等が出土した。また凹石、鉄滓が出土した。

第80号竪穴住居址〈ＳＢ－８０〉（第14図・第4表）

調査地区の北東隅Ｓ６Ｅ64、Ｓ７Ｅ63、Ｓ７Ｅ64、Ｓ８Ｅ63、Ｓ８Ｅ64グリッドに位置する。北側は暗渠排水路によって北東壁と床面を破壊される。南東部が調査区の外にあり、この部分は未調査である。平面形態は、残存する北西と南西の壁から推定して、隅丸長方形を呈する。北西壁は推定5.20mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ32.0㎝を測る。主軸方向は、南西壁を基準として推測するとＮ－42°－Ｅを指す。覆土には指頭大の小石が含まれていた。

床は堅緻である。北西壁の北部と北東壁及び南西壁の際に周溝が掘られている。また、間仕切り状の溝の掘り込みも見られる。ピットはＰ１とＰ２が検出されたが、これらは主柱穴であると思われる。炉はこれらのピット間に検出された。直径約55.0㎝の円形を呈し、浅く、底面は良く焼けて橙色に変色している。

遺物は、弥生時代後期及び古墳時代前半に属するとみられる土器が床面と覆土から出土した。

第81号竪穴住居址〈ＳＢ－８１〉（第15図・第4表）

調査地区の南側Ｓ15Ｅ55、Ｓ15Ｅ56、Ｓ15Ｅ57、Ｓ16Ｅ55、Ｓ16Ｅ56、Ｓ16Ｅ57、Ｓ17Ｅ55、Ｓ17Ｅ56、Ｓ17Ｅ57、Ｓ18Ｅ55、Ｓ18Ｅ56、Ｓ18Ｅ57グリッドに位置する。南部は調査区の外にあり、この部分は未調査である。ポプラ並木の根に撹乱を受け、床の一部が破壊されている。Ｐ－99に切られる。第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉と重複して切る。平面形態は、残存する北と東の壁の一部から隅丸長方形であったと推定される。規模は不明である。主軸方位は、東壁を基準に推測するとＮ－７°－Ｅを指す。

床面は削平を受けたり、ポプラの根に破壊されたりして、表面の大部分が失われている。東壁付近の一部と南側は床が残存しており、その部分は堅緻である。ピットはＰ１とＰ２が確認された。このうちＰ２は主柱穴をなすものと考えられる。これと対になる奥壁側のもう一つの柱穴は、ポプラの根による撹乱により破壊されたものと思われる。炉はＰ２の西隣に検出された。南側をポプラの撹乱により失っているが、平面形は約64.0×30.0㎝の楕円形を呈していたものと推測される。浅く掘り窪められ、内部に壺の頸部が正位に埋置されていた。また、この炉より3.8m南側の床面に熱を受けて橙色に変色している部分が確認された。範囲は約90.0×60.0㎝で、床を掘り窪めた跡はない。

遺物は覆土中と炉から僅かに出土した。弥生時代後期箱清水式期の壺、甕、高坏等が出土した。

第82号竪穴住居址〈ＳＢ－８２〉（第16図・第4表）

調査地区の南側Ｓ16Ｅ58、Ｓ16Ｅ59、Ｓ17Ｅ58、Ｓ17Ｅ59、Ｓ18Ｅ58、Ｓ18Ｅ59グリッドに位置する。５ヶ所にわたって撹乱を受け、そのうちの２ヶ所にわたって西壁を破壊される。暗渠水路に東壁の一部を破壊される。第3号溝跡〈ＳＤ－０３〉と第31号土坑〈ＳＫ－３１〉に切られ、北壁と東壁を破壊される。第30号土坑〈ＳＫ－３０〉に切られる。そのほか、Ｐ－55、Ｐ－56、Ｐ－71、Ｐ－100、Ｐ－164に切られる。平面形態は、長方形プランを呈す。北壁は6.74m、西壁は4.94mを測る。検出面から床面までの高さは、およそ28.0㎝を測る。主軸方向はＮ－３°－Ｗを指す。床面積は約28.6㎡である。

床面は堅緻である。住居の覆土の第２層に炭化物と焼土粒が多く含まれていた。また、Ｐ１～Ｐ３の覆土の第１層にも炭化物が含まれていた。住居内で木材等が焼かれ、床にそれらが分布していたものと考えられ

る。ピットは5つ検出され、そのうちＰ１からＰ４は主柱穴であると考えられる。細く浅い溝がＰ１に連結してＬ字状に検出された。住居内の空間を仕切る何らかの跡である可能性がある。炉は奥壁側のＰ１とＰ４の間に２つ並んで確認された。西側の炉は直径約 40.0 ㎝で浅く掘り窪められている。東側はそれより小さく直径約 17.0 ㎝で、すり鉢状に深く掘り窪められ土器の底部が正位に置かれている。これらの炉床は熱を受けて橙色に変色している。また、これらの炉より南側の床面に熱を受けて橙色に変色している部分が確認された。床を掘り窪めた跡はない。

遺物は覆土中と床上と炉から出土し、特に第 16 図(2)のとおり北西コーナーからまとまって出土した。弥生時代後期箱清水式期の壺、甑、蓋、鉢、甕、高坏等が出土した。また、縄文土器、陶器も僅かに覆土に含まれていた。覆土から鉄滓が２点出土した。また、砥石、敲石、凹石２点と作業台が出土した。

第 83 号竪穴住居址（ＳＢ－８３）（第 17 図・第５表）

調査区の西側Ｓ11Ｅ54、Ｓ11Ｅ55 グリッドに位置する。大部分は調査地区外に存在し、第 75 号竪穴住居址に切られているため詳細は不明である。壁際にピットが２基検出された。

遺物は、弥生時代後期等に属するとみられる土器が僅かに覆土から出土した。

２　土坑

第 25 号土坑（ＳＫ－２５）（第 20－１図・第６表）

調査地区の西側Ｓ14Ｅ49、Ｓ14Ｅ50 グリッドに位置する。西と南西は調査地区の外にありその部分は未調査であるが、平面形態は、径約 90.0 ㎝の円形を呈していると推測される。深さは約 18.0 ㎝で、断面形はたらい状を呈する。本遺構の性格は不明である。

第 26 号土坑（ＳＫ－２６）（第 20－１図・第６表）

調査地区の西側Ｓ13Ｅ51 グリッドに位置し、北は旧上水道管溝に切られ、破壊されている。Ｐ－37 に切られる。平面形は不整円形を呈すると思われる。長径は約 165.0 ㎝で、深さは 64.0 ㎝である。断面形は不定形を呈する。本遺構の性格は不明である。

第 27 号土坑（ＳＫ－２７）（第 20－６図・第６表）

調査地区の東側Ｓ15Ｅ58、Ｓ16Ｅ58 グリッドに位置する。不整楕円形で浅く、長径は約 136.0 ㎝、深さは 21.0 ㎝を測る。覆土に礫を多く含む。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が出土した。

第 28 号土坑（ＳＫ－２８）（第 20－５図・第６表）

調査地区の東側Ｓ11Ｅ57、Ｓ11Ｅ58、Ｓ12Ｅ57、Ｓ12Ｅ58 グリッドに位置する。ポプラ並木の攪乱を受け、一部が破壊されている。平面形は円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。長径は約 435.0 ㎝、深さは 120.0 ㎝を測る。覆土は８層に分かれ、第２層と第４層の間に礫が挟まっている。当初井戸跡と想定されたが、結果的に本遺構の性格は判明されなかった。

遺物は覆土より、弥生時代後期の壺、甕等の土器類が出土したが、どれも小破片であり著しく磨耗している。また、磁器の椀と安山岩の凹石が出土した。

第29号土坑〈SK－29〉（第20－9図・第6表）

調査地区の東側S18E60グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形はたらい状を呈する。長径約183.0㎝で、深さは38.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等及び縄文土器の破片が出土した。

第30号土坑〈SK－30〉（第20－6図・第6表）

調査地区の南側S17E58、S17E59グリッドに位置する。平面形は円形で浅い。長径は約172.0㎝、深さは20.0㎝を測る。覆土に礫を多く含む。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が出土した。

第31号土坑〈SK－31〉（第20－6図・第6表）

調査地区の東側S16E59、S17E59グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、断面形はたらい状を呈すると思われる。長径は約80.0㎝、深さは20.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が出土した。

第32号土坑〈SK－32〉（第20－8図・第6表）

調査地区の東側S14E62グリッドに位置する。P－63によって南東部を破壊されている。平面形は楕円形を呈すると思われる。長径は約120.0㎝で、深さは53.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

第33号土坑〈SK－33〉（第20－8図・第6表）

調査地区の東側S13E62グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、断面形は不定形を呈する。長径は約120.0㎝で、深さは33.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

第34号土坑〈SK－34〉（第20－8図・第7表）

調査地区の東側S10E62、S10E63グリッドに位置する。断面は浅く、平面形態は不整楕円形を呈する。長径は約175.0㎝で、深さは30.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

第35号土坑〈SK－35〉（第20－5図・第7表）

調査地区の東側S12E59、S12E60、S13E59、S13E60グリッドに位置する。断面は浅く、平面形態は楕円形を呈する。長径は約163.0㎝で、深さは10.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が出土した。

第36号土坑〈SK－36〉（第20－4図・第7表）

調査地区の北側S6E57グリッドに位置する。西は排水管溝に切られて破壊されている。平面形は方形を呈していると推測される。断面形は不整形を呈する。長径は約1.00m、深さは54.0㎝である。本遺構の性格は不明である。

第37号土坑〈SK－37〉（第20－6図・第7表）

調査地区の南側S18E59グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。底面に更に一段低い掘り込み

を持つ。長径は約184.0㎝、深さは25.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

第38号土坑（ＳＫ－３８）（第20－8図・第7表）

調査地区の東側S11E61、S12E61グリッドに位置する。暗渠によって西側を破壊されているが、平面形態は不整円形を呈すると推測される。長径は約147.0㎝で、深さは15.0㎝を測る。断面形はたらい状を呈する。本遺構の性格は不明である。

第39号土坑（ＳＫ－３９）（第20－7図・第7表）

調査地区の北側S8E60、S9E60グリッドに位置する。長方形を呈し、浅い。長径は約106.0㎝で、深さは8.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

第40号土坑（ＳＫ－４０）（第20－9図・第7表）

調査地区の東側S14E60、S15E60グリッドに位置する。暗渠排水路に東側を破壊されている。平面形態は楕円形を呈し、断面形は不定形を呈すると推測される。長径は23.0㎝で、深さは59.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

第41号土坑（ＳＫ－４１）（第20－5図・第7表）

調査地区の西側S11E59グリッドに位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。断面形は凹凸のあるたらい状を呈する。長径は約98.0㎝、深さは24.0㎝を測る。覆土は単層であった。本遺構の性格は不明である。

第42号土坑（ＳＫ－４２）（第20－9図・第7表）

調査地区の東側S15E62、S16E62に位置する。平面形態は楕円形を呈する。断面形は不定形を呈する。長径は約18.3㎝、深さは52.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

第43号土坑（ＳＫ－４３）（第20－1図・第7表）

調査地区の西側S11E50、S11E51グリッドに位置する。水路に切られている。平面形態は不整円形を呈する。断面形は不定形を呈する。長径は約135.0㎝で、深さは68.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

第44号土坑（ＳＫ－４４）（第20－3図・第7表）

調査地区の南側S18E56、S18E57グリッドに位置する。南側は調査地区の外になり、未調査となっている。第81号竪穴住居址（ＳＢ－８１）を切っている。楕円形を呈すると推測される。長径約150.0㎝、深さは40.0㎝であると考えられる。断面形はたらい状を呈する。繊維学部が設立された以降の遺構である可能もあるが、この時点では不明である。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が僅かに出土した。

第45号土坑（ＳＫ－４５）（第20－3図・第7表）

調査地区の南側S18E55、S18E56グリッドに位置する。南側は調査地区の外になり、未調査となっている。第81号竪穴住居址（ＳＢ－８１）を切っている。楕円形を呈すると推測される。長径は約134.0㎝、深さは43.0㎝であると考えられる。断面形はたらい状を呈する。覆土の堆積状態から、掘られた後すぐに短期

間に埋められたものと推測される。繊維学部が設立された以降の遺構である可能もある。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が僅かに出土した。

第46号土坑〈ＳＫ－４６〉（第20－３図・第７表）

調査地区の南側Ｓ17Ｅ55、Ｓ18Ｅ55グリッドに位置する。南側は調査地区の外になり、未調査となっている。第81号竪穴住居址〈ＳＢ－８１〉を切っている。楕円形を呈すると推測される。長径は約115.0㎝、深さは40.0㎝であると考えられる。断面形はたらい状を呈する。覆土の堆積状態から、掘られた後すぐに短期間に埋められたものと推測される。繊維学部が設立された以降の遺構である可能もあるが、この時点では不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が僅かに出土した。

第47号土坑〈ＳＫ－４７〉（第20－６図・第７表）

調査地区の南側Ｓ17Ｅ59、Ｓ18Ｅ59グリッドに位置する。第82号竪穴住居址〈ＳＢ－８２〉を切るが、暗渠に大部分を破壊されている。不整楕円形を呈し、覆土の第３層に礫を多く含む。長径は約160.0㎝で、深さは42.0㎝を測る。本遺構の性格は不明である。

遺物は覆土から、弥生時代後期の箱清水式の壺、甕等の破片が出土した。

３　溝跡

第１号溝跡〈ＳＤ－０１〉（第18図）

調査地区の西側Ｓ11Ｅ50、Ｓ11Ｅ51、Ｓ11Ｅ52、Ｓ12Ｅ52、Ｓ12Ｅ53、Ｓ13Ｅ53、Ｓ13Ｅ54グリッドに位置する。規模は幅約2.5m、長さ14.0m、深さ0.25mを測る。北西から南東にほぼ直線的に伸びている。西端は総合研究棟建設の際の基礎工事によって撹乱を受けて失われているが、調査地区外まで続くと推測される。東端は排水管と上水道管の溝に破壊されている。これより先の東側は確認されなかったが、この区域は撹乱及び削平が著しい場所であることから、失われたものと推測される。第３号溝跡〈ＳＤ－０３〉と連続する遺構の可能性がある。断面形は浅い皿状を呈する。底面は南東から北西に若干傾いている。方向及び形態から自然流路と捉えておくこととする。

覆土から弥生時代後期の壺、、鉢、甕等の土器、金属製品及び黒曜石の打製石鏃が出土した。

第２号溝跡〈ＳＤ－０２〉（第18図）

調査地区の東側Ｓ８Ｅ59、Ｓ９Ｅ59、Ｓ９Ｅ60、Ｓ９Ｅ61、Ｓ10Ｅ60、Ｓ10Ｅ61、Ｓ10Ｅ62、Ｓ11Ｅ62、Ｓ11Ｅ63グリッドに位置する。暗渠、第34号土坑〈ＳＫ－３４〉、Ｐ－83、84、108及び攪乱等に切られて破壊されている。規模は幅約2.3m、長さ17.5m、深さ0.10mを測る。北西から南東にほぼ直線的に伸びている。北西端は消失している。南東端は調査地区外に続いていると推測される。断面は非常に浅い皿状を呈する。底面はＡセクションで標高469.44m、Ｂセクションで標高469.39mで若干傾いている。方向及び形態から自然流路と捉えておくこととする。

覆土から弥生時代後期箱清水式に属する壺、、深鉢、鉢、高坏、甕等及び古墳時代前期に属すると思われる土器も出土した。

第３号溝跡（ＳＤ－０３）（第18図）

調査地区の南側Ｓ15Ｅ57、Ｓ15Ｅ58、Ｓ16Ｅ58、Ｓ16Ｅ59、Ｓ17Ｅ59、Ｓ17Ｅ60、Ｓ18Ｅ60、Ｓ18Ｅ61グリッドに位置する。規模は幅約1.10m、長さ15.50m、深さ0.12mを測る。第３号溝跡（ＳＤ－０３）を切り、暗渠、第29号土坑（ＳＫ－２９）、及び攪乱等に切られて破壊されている。北西から南東にほぼ直線的に伸びている。南東端は調査地区外に続いていると推測される。北西端は消失している。第１号溝跡（ＳＤ－０１）と同一の遺構の可能性がある。断面形は浅い皿状を呈する。底面は南東から北西に若干傾いている。方向及び形態から自然流路と捉えておくこととする。

覆土から、壺、高坏、甕、土製円盤等の土器類が出土した。

第４号溝跡（ＳＤ－０４）（第18図）

調査地区の中央Ｓ13Ｅ56グリッドに位置する。北西から南東を向き、両端はそれぞれ第77号竪穴住居址（ＳＢ－７７）と第78号竪穴住居址（ＳＢ－７８）に切られる。規模は幅約0.45m、長さ1.50m、深さ0.16mを測る。断面形は台形を呈する。明らな部分が小さいため、実態は不明である。

4　配石遺構

第１号配石溝（ＳＤ－０５）（第19図）

調査地区の西側Ｓ10Ｅ51、Ｓ11Ｅ50、Ｓ11Ｅ51、Ｓ12Ｅ50、Ｓ13Ｅ50、Ｓ14Ｅ50グリッドに位置する。南北よりやや東に傾く方向で真直線に伸び、両端は調査地区外まで続くと推定される。第１号溝跡（ＳＤ－０１）を切り、暗渠及び電柱のアンカーの攪乱に切られ破壊されている。規模は幅約0.27m、長さ13.5m、深さ0.44mを測る。断面形は垂直或いは台形に掘られ、底面に河原石が規則的に配置されている。まず、河原石は約20㎝前後の大きさのものが溝の壁に沿って２列に並べられている。さらにこれら石列の上部に、左右を渡すようなかたちで約35㎝前後の扁平の河原石を載せて、組むようにして並べている。その天井或いは蓋というべき扁平の石の上部には土が堆積している。この土は２層に分かれ、下層はにぶい赤褐色の砂質土を基本としその中に暗茶褐色土をブロック状に含んでいることから、一気に埋土された可能性がある。この上には暗褐色の砂質土に炭化物が含まれた層が薄く堆積している。石によって囲まれた内部は、部分的に土が堆積しているが、当初は空洞でトンネル状を呈していたと考えられる。本遺構については信州大学繊維学部の中本信忠先生から、古代から近世における上水道の可能性を示唆するご教示をいただいている。一方、平成３・４年度に室賀地区で実施の岳の鼻遺跡発掘調査で検出されたＡ－号配石遺構と構造が極めて類似しているようにみえる。この岳の鼻遺跡のＡ－１号配石遺構について、五十嵐幹雄先生は平成３年発行の「考古雑録」（128）において、水田の下層につくった導水のための施設であるとしている。本遺構がどのような性格のものであるかについては、調査範囲が限られているため現時点では全貌を確認するに至っておらず、遺物の出土も伴なっていないことから、他の類例の出土を待って検討する必要がある。

5　ピット

本調査地区からは、127基のピットが検出された。単独で存在するものがほとんどで、掘立柱を構成するピット群は確認されなかった。このうち、Ｐ－97とＰ－73～77及びＰ－48、Ｐ－50、Ｐ－55、Ｐ－56、Ｐ－100は柱穴列をなし、柵跡としての機能も想定される。平面図は第20図（1）から第20図(9)に掲載した。

ピット平面図の区割りは、第20図（1）に示した。観察及び所見等は第8～10表に示した。

第3節　遺物

1　土器

（1）　遺構出土の土器

第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉出土の土器（第21図・第11表）

図化して掲載した土器はすべて覆土から出土した。1は壺の頸部の破片で、櫛描直線文によるＴ字文とボタン状貼付け文が施される。胴部には赤彩が施される。2は深鉢の口縁部で、内外両面に赤彩とヘラミガキが施されている。3は台付深鉢或いは高坏の脚部で、脚高は短く直線的に開いている。外面には赤彩とヘラミガキが施される。4は鉢或いは甕で、体部は直線的に開き、口縁部で小さく内弯する。調整は内外面とも、体部にヘラミガキ、口縁部にナデが施されている。6は蓋の裾部と推定され、外面に刷毛調整とナデが施されている。5は甕の底部で、焼成前に一孔が穿たれている。外面にナデ及びケズリが、内面にナデ及びヘラミガキが施されている。7と8は甕である。外面が著しく剥落し、調整等の痕が不鮮明である。7は口縁部及び胴部に櫛描波状文が、頸部に簾状文が施されている。8は櫛描波状文が施される。この他、高坏の接合部、壺及び甕の胴部等の破片が出土した。

第76号竪穴住居址〈ＳＢ－７６〉出土の土器（第22図・第11～12表）

2、4、7は遺構実測図（第10図）に示した位置から検出された。6と8は炉の底面に付着して出土した。それ以外は覆土中から出土した。

1は深鉢の底部から胴部であると推定される。外面は赤彩で、内外両面にヘラミガキが施されている。また、外面の一部に煤が付着している。2から4は高坏である。そのうち、2と3は坏部で、口縁部が外反し、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施され、3は口縁部に山形突起を有する。4は坏部から脚部である。脚部高は高く、三角透かし孔が4孔穿たれている。坏部の内外両面及び脚部外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、脚部内面は刷毛調整及びヘラ削りが認められる。5は鉢の底部で、外面と内面にヘラミガキおよび赤彩が施される。底部外面にヘラ状のもので刻まれた線の痕が見られる。6は鉢或いは甕で、体部は直線的に開く形態を呈している。口縁部は内外両面とも横のナデが施され、体部は外面に刷毛調整とヘラケズリが、内面にヘラミガキが施されている。7の甕は、頸部の括れは緩やかで、口径と胴部最大径の差が小さくて胴部最大径の方が若干大きい。外面には櫛描波状文が上から下へ向かって施文され、内面にはヘラ削り及びヘラミガキが施されている。8は甕の口縁部で、頸部より緩く外反している。外面に櫛描直線文による格子目文が施され、内面は刷毛調整及びヘラ削りの後ヘラミガキが施されている。9は甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が施されている。

第77号竪穴住居址〈ＳＢ－７７〉出土の土器（第23図・第12～13表）

1、2、5、8から10、12から14、16は遺構実測図（第11図）に示した位置から検出された。そのうち、2と13は胴下半を打ち欠いた壺と甕で、正位の状態で置かれていた。それ以外は覆土中から出土した。

1と2は壺である。1は胴部から底部にかけての部分で、胴下半部に緩い稜を有する。調整は、内外両面に縦のヘラミガキが施される。2は頸部から胴部にかけての部分で、調整は、外面は胴部上位に斜位のヘラ

ミガキ、下位は縦のヘラミガキが施され、内面は頸部にヘラミガキ、胴部に刷毛調整が行われている。外面の一部に赤彩が施されていた痕が残る。3は深鉢で、口縁部は短く屈曲して外反する。頸部に櫛描直線文がひかれ、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。4はミニチュアの鉢で、外面は縦のヘラミガキ及び赤彩が施され、内面には横のヘラミガキが施されている。5は高坏の脚で、三角形の透かしを4箇所にもつ。外面及び坏部内面はヘラミガキ及び赤彩が施され、脚部内面はヘラ削り及びナデが施される。6は鉢か甑で、体部は直線的に開き、調整は口縁部にヨコナデが施され、外面は縦のヘラミガキ、内面は横のヘラミガキが施されている。7は鉢か甑で、体部は直線的に開き、調整は内外両面に横のヘラミガキが施されている。8は片口を有するもので、口縁部は小さく内弯する。内外両面に横のヘラミガキを施している。9は甑で、底部に1孔を穿っている。体部は直線的に開き、口縁部の先端は小さく内弯する。10は蓋で、天井部に1孔が穿たれる。内外両面にヘラミガキが施される。11から16は甕である。11は比較的小型で、頸部の括れは小さく胴部の最大径は中位にある。頸部に櫛描直線文による簾状文が施され、口縁部と胴部に波状文が施されている。内面にはヘラ削りとナデが施されている。12は胴部最大径を中位にとり、頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。頸部に櫛描直線文による簾状文が等連止めに施され、口縁部と胴部に波状文が施されている。内面の調整は、ヘラミガキが口縁部に横、頸部に斜め胴部に縦に施されている。13は胴部から口縁部にかけての部分である。頸部に櫛描直線文による簾状文が4連止めで施されている。口縁部と胴部には波状文が下から上に向かって施文されている。内面の調整は、口縁部に横のヘラミガキを施し、胴部には刷毛調整が施されている。14は口縁部で、頸部に櫛描直線文による3連止めの簾状文が施され、それを切るようにして口縁部と胴部に波状文が下から上へ向かって施される。内面の調整は、ヘラ削り及びヘラミガキが施される。15は台付き甕で、甕形の体部外面には波状文が、内面にはヘラミガキが施されている。短く外反した脚部の内面には、ナデが施されている。16は甕の胴部から底部にかけての部分で、内外両面にヘラ削りが施されている。胴部に櫛描波状文が施されている。

第78号竪穴住居址〈ＳＢ－７８〉出土の土器（第24図・第13表）

掲載した土器はすべて覆土から出土した。遺構実測（第12図）に示したとおり、炉から2個体以上の壺の胴部が出土したが、破片が小さいため図化復元しなかった。1、2は壺である。1は口縁部で、内外両面にヘラミガキが施され、外面には刷毛及びヘラ削りの痕跡も見られる。2は頸部で、内外両面にヘラ削りの後にヘラミガキが施される。3は甑形の壺或いは鉢の口縁部と考えられ、内外両面とも刷毛調整及びヘラ削りが、端部には横ナデが施されている。4は鉢或いは高坏の口縁部と考えられ、緩く内弯している。内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。5から9は甕である。5は頸部から口縁部のかけての部分で、頸部には櫛描直線文による2連止めの簾状文が施され、それを切って口縁部に波状文が下から上へ施されている。内面の調整は、横のヘラミガキが施されている。6は緩く外反する口縁部で、頸部に櫛描直線文による簾状文を施した後口縁部に下から上へ波状文が施されている。内面には横のヘラミガキが施されている。7は口縁部で、外面には櫛描波状文が施されている。頸部に5本1組で2連止めの簾状文が施されている。8は底部から胴部である。胴上位部の外面には、櫛描波状文が施されていたと思われる。胴部の下の方には刷毛調整及びヘラミガキが施されている。内面にはヘラ削り及びヘラミガキが施されている。9は頸部から胴部にかけての部分である。外面は櫛描直線文による格子目文が施され、内面には刷毛調整が施されている。

第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉出土の土器（第25図・第13～14表）

1と8及び3がＰ2の覆土から出土し、5はＰ3の覆土から出土した。それ以外は住居の覆土から出土し

た。また、Ｐ２からはこれ以外にも赤彩が施されていない壺の破片が２個体出土し、Ｐ１及び住居の覆土中からも僅かに壺や甕等の破片が出土しているが、本書には掲載しなかった。

１は壺の胴上半部から下半部にかかる部分で、外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面に刷毛調整が施されている。２は高坏の坏部で、口縁部は外反する。内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。３と４は鉢である。３は口縁部で、直線的に開く。内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。４は底部で、内外面ともヘラミガキ及び赤彩が施される。５、６、９は甕である。５は頸部から胴上位部にかかる部分で、頸部に櫛描直線文による簾状文が２連止めで施されている。内面には頸部付近はヘラミガキが横方向に、胴部は斜め方向に施されている。口縁部と胴部には波状文が施されている。６は胴部で、外面にはヘラ削り及び刷毛調整が施された後、胴上位部には櫛描波状文が施される。内面にはヘラ削り及び刷毛調整が施される。９は甕の胴部で５本１組の櫛描波状文が下から上へ施される。７と８は甕或いは壺の底部から胴部で、外面にヘラミガキ、内面に刷毛調整が施される。

第80号竪穴住居址（ＳＢ－８０）出土の土器（第26図・第14表）

１と２が遺構実測図（第14図）に示した位置から検出され、３は覆土から出土した。この他、櫛描波状文を施した甕及び赤彩の壺の破片等が覆土から出土した。

１は壺の底部から胴部にかけての部分で、内外両面に刷毛調整が施されている。２は高坏の坏部で、接合部から直線的に開いて口縁端部で鍔状を呈するものと思われるが、先端部は欠損している。表面は磨耗していて、調整痕はほとんど残っていないが、内外面両面にヘラミガキ及び赤彩を施しているものと思われる。３は古墳時代前期から中期の高坏脚部と考えられ、円形の透かし孔を穿っている。内面に刷毛調整が施されている。

第81号竪穴住居址（ＳＢ－８１）出土の土器（第27図・第14表）

１と５が遺構実測図（第15図）に示した位置から検出され、それ以外は覆土から出土した。１は壺の頸部で炉の内部より正位の状態で出土した。頸部には３段の櫛描直線文が施され、胴部には縦のヘラミガキが施されている。内面の調整は、表面の磨耗が著しく明らかでない。２は甕の口縁部で、緩く外反している。口縁部と胴部に櫛描波状文が上から下へ向かって施された後、頸部に櫛描直線文による簾状文が３連止めで施されている。内面はヘラミガキが施されている。３は甕の口縁部で、櫛描波状文が上から下へ向かって施されている。内面の調整は、表面の磨耗が著しく明らかでない。４は甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が施され、内面に刷毛調整及びヘラミガキが施される。５の甕は、遺構実測図に示した位置のＰ１及びＰ２から出土したものの外に、覆土から出土した破片とも接合された。胴部外面には櫛描波状文が上から下へ向かって施文され、内面にはヘラ削り、ヘラミガキ及びナデなどで調整されている。６はＰ２の覆土から出土し、台付甕の脚部とみられる。内外両面にヘラ削り及びナデ等の調整が施される。このほか、壺、高坏等の破片が出土している。

第82号竪穴住居址（ＳＢ－８２）出土の土器（第28図・第14～16表）

出土した土器のうち１から11は壺で、12と13は高坏、14から19は鉢、20は甑、21は蓋、22から25は甕である。そのうち、１から９、11、12、15から17、20から22は遺構実測図（第16図）に示した位置から検出され、その他は覆土から出土した。

１は口縁部の一部と底部を欠いたほか、ほぼ完形である。器高は50cmを超える大型の壺で、胴部に張りが

あり胴下半部に括れがない。頸部に櫛描直線文による２条１組み４単位のＴ字文を施している。外面の調整は口縁部、胴上半部及び下半部に縦のヘラミガキが施されている。内面は全体に表面が剥落していて明らかではない。２は口縁部から頸部にかけての部分で、頸部に櫛描直線文によるＴ字文が施されている。内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。３は頸部から胴部にかけての部分で、頸部には櫛描直線文によるＴ字文が施される。外面の口縁部と胴部及び内面の口縁部にはヘラミガキ及び赤彩が施され、内面の胴部には一ヘラ削りが施されている。４の形態は、肩部がやや張り出し頸部の括れが比較的明瞭で、胴下位部は稜を有して屈折する。頸部には櫛描直線文による２条１組み４単位のＴ字文が施される。外面の調整は、口縁部、胴上位部及び下位部に縦のヘラミガキ及び赤彩が施され、内面は口縁部にヘラミガキ及びで赤彩が施され、胴部は全体的に表面が剥落して明らかではない。５は口縁部が欠損しているが、肩部の形態は４のように張らずにすんなりとしいるため頸部の括れはあまり明確ではないものと推定される。胴下半部は稜を有して屈折している。頸部には櫛描直線文による２条１組み４単位のＴ字文が施される。調整は外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面にはヘラ削り及びナデが施されている。６は、器高は小さく、胴部は算盤玉状を呈して強く張り、頸部は胴部より屈曲して口縁部に至る。外面及び内面の口縁部から頸部にかけての部分はヘラミガキ及び赤彩が施され、胴部内面はヘラ削りが施されている。７は、口縁部の先端が欠損している。胴部は、中位よりやや下に最大径を有して丸みを持つ。外面はヘラミガキ及び赤彩が施され、内面は頸部まで赤彩が施されている。８は口縁部から胴部にかけての部分で、口縁部の開き具合は比較的小さい。調整は、口縁部は内外両面にヨコナデが施され、胴部外面は縦のヘラミガキ、内面はヘラ削り及びヘラミガキが施されている。９は残高で40㎝余りあり、器高は50㎝を越えるものと推定される。胴下半に緩い稜を有し、底部からその部分にかけてほんの少し括れている。調整は、外面は刷毛調整の後にヘラミガキを施している。内面の表面は剥落していて、調整は不明である。外面に付着物がみられる。10は壺の頸部で、ヘラ描き羽状文が施される。11は壺或いは赤彩深鉢の底部と見られるものである。東側の炉（Ｆ１）の内部から正位に出土した。外面はヘラミガキが施され、底部まで赤彩が施されている。内面は刷毛調整及びナデが施されている。

12は坏部に対して脚高が長く、坏部の口縁は鍔状を呈する形態のものである。口縁部には４箇所に山形突起を有し、脚部には４箇所に三角透かし孔を有する。外面及び坏部内面はヘラミガキ及び赤彩が施され、脚部内面は刷毛調整が施されている。13の脚部は低く、ラッパ状を呈し、三角透かし孔を４箇所に有する。外面及び坏部内面にヘラミガキ及び赤彩が施され、脚部内面はナデが施されている。また、裾部には内外両面にヨコナデが施されている。

14の体部は直線的に開き、口縁部は内弯する。調整は、口縁部はヨコナデが施され、体部はヘラミガキ及び赤彩が施されている。内面の底部から胴部の下位は、表面の剥落が特に著しい。15の形態は、立ち上がりから口縁部に向かって丸みを有し、開き具合は小さく、口縁部は内弯する。口縁部はヨコナデが施され、体部は粗くヘラ削りがなされた後ヘラミガキが施されている。16の体部は浅く、立ち上がりから口縁部にかけて大きく開く。口縁部にヨコナデが施され、体部にヘラミガキが施されている。17は体部が逆ハの字状に直線的に開く浅い形態のもので、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。口縁部に孔が穿たれている。18は鉢或いは無頸壺の口縁部で、口縁部は内弯する。調整は、刷毛調整の後ヘラミガキが施される。19は鉢或いは甑で、直線的に開く体部で、内外両面にヘラミガキが施されている。両面に付着物がみられる。20の体部は立ち上がりから口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部の先端は小さく内弯する。底部には焼成前に１孔を穿っている。調整は口縁部にヨコナデが施され、体部にヘラミガキが施される。21は蓋で、体部はハの字状に広がる。天井部に焼成前の孔が２つ穿たれている。内外両面にヘラミガキが施されている。

22は、口径が胴部最大径より小さい形態を呈している。外面の口縁部から胴上位部あたりまでには櫛描波

状文が施されている。胴部最大径から下にかけて全体的に表面の剥落が著しく、文様が失われている。内面の調整はヘラ削りの後、ヘラミガキを施しており、口縁部は横方向に胴部は縦方向に磨かれている。23は胴上位部から口縁部にかけての部分で、口径が胴部最大径より小さい形態を呈しているものと思われる。外面に櫛描波状文が施されている。内面はヘラ削り及びヘラミガキが施されている。24は頸部の括れは緩く、口径と胴部最大径の差が小さいが胴部最大径の方が若干大きい形態を呈している。外面には櫛描波状文が施され、内面には刷毛調整、ヘラ削りの後ナデ及びヘラミガキが施されている。25は折り返し口縁の甕で、櫛描波状文が施される。

26と27は縄文時代中期から後期の縄文土器である。28は陶器の皿の口縁部である。透明或いは乳白色の釉及び鉄絵が施されている。これらは覆土に混入したものと考えられる。

第83号竪穴住居址〈ＳＢ－８３〉出土の土器（第29図・第16表）

遺物は、覆土中から僅かに出土した。１は壺の頸部から胴部にかけての部分で、頸部には櫛描直線文によるＴ字文及びボタン状貼付文が施されている。調整は、外面はヘラミガキを施し、内面は刷毛調整とナデが施されている。２及び３は壺の口縁部で、２は大きく開いて外反し、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。４は鉢或いは高坏の口縁部で、体部は直線的に開き、口縁部は短く内弯する。内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。５は甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が下から上へ向かって施文され、内面はヘラミガキが施されている。６は甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が施される。７は台付甕の脚部で、脚高は小さく、外面に刷毛調整が施される。

第27号土坑〈ＳＫ－２７〉出土の土器（第30図・第16表）

覆土から、壺、高坏、甕等の破片が出土したが、破片の小さいものが多かった。その中で比較的残りが良く直径が復元できるものは、１の甕の底部である。内外両面にヘラ削りがなされている。

第28号土坑〈ＳＫ－２８〉出土の土器（第30図・第17表）

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。２は高坏の接合部で、外面及び坏部の内面に赤彩が施されている。３は磁器の椀と思われるものの底部である。底部から高台の内側まで回転ヘラ削りが施され、坏部の内面には施釉されている。

第29号土坑〈ＳＫ－２９〉出土の土器

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。

第30号土坑〈ＳＫ－３０〉出土の土器（第30図・第17表）

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。４は壺の口縁部で、ヘラミガキ及び赤彩が施されている。５は深鉢或いは壺の底部と思われ、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。６は甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が施される。７は甕の底部と推定され、内面に刷毛調整とヘラ削りが施され、外面にヘラ削りが施される。

第31号土坑〈ＳＫ－３１〉出土の土器（第30図・第17表）

覆土から甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。８は甕

の口縁部で、外面に櫛描波状文が施される。

第35号土坑〈SK－35〉出土の土器

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく調整等の痕が不鮮明なものや、種類或いは器種も不明なものが多い。

第44号土坑〈SK－44〉出土の土器

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。

第45号土坑〈SK－45〉出土の土器 (第30図・第17表)

覆土から甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。9は壺の頸部で、T字文及びボタン状貼付文が施されている。調整は、内面は刷毛調整及びヘラミガキが施され、外面には赤彩が施されている。

第46号土坑〈SK－46〉出土の土器

覆土から甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。

第47号土坑〈SK－47〉出土の土器 (第30図・第17表)

覆土から壺、甕等と思われる破片が僅かに出土したが、磨耗が著しく種類や器種も不明なものが多い。10は甕の底部と推定され、外面にヘラ削りとヘラミガキが施され、内面に付着物がみられる。

第1号溝跡〈SD－01〉出土の土器 (第31図・第17～18表)

覆土から壺、鉢、甕等の土器片が出土したが、破片の小さいものが多かった。その中から比較的残りが良く、直径が復元できるものや特徴的なものを図化して掲載した。1から4は壺である。1は口縁部で、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。2は頸部で内外両面に赤彩が施されている。3も頸部で、文様帯に櫛描直線文が施されている。4は頸部で櫛描直線文によるT字文が施され、横の直線文は下から上へ施文されている。5、6は鉢である。5は底部で、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。内面に付着物がみとめられる。6は鉢の口縁部で、外面に付着物がみとめられる。7から9は甕である。7は胴部で、胴部に櫛描波状文が施されている。8と9は甕或いは壺の底部で、内外両面にヘラ削り等の調整が施され、9の内面に付着物がみとめられる。

第2号溝跡〈SD－02〉出土の土器 (第32図・第18～19表)

覆土から出土した土器のうち、残りが良く直径が復元できるものや特徴的なものを図化して掲載した。

1から7は壺の一部と思われるものである。1は口縁部で、表面が磨耗しているため不鮮明であるが内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。2は底部から胴下半に位置する部分で、外面はヘラミガキ及び赤彩が施され、内面にヘラミガキが施されている。3は頸部で、ボタン状貼付文と櫛描直線文が見られる。4から7は壺或いは甕の底部で、内面に刷毛調整、ヘラ削り、外面にヘラミガキ、ヘラ削り等の調整が施されている。6の内面に付着物がみとめられる。7は外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面はヘラミガキが施されている。底部外面はヘラ削りが行われている。8は深鉢の口縁部で、内外両面にヘラミガキおよび

赤彩が施されている。9と10は高坏の接合部で、外面と坏部内面にヘラミガキ及び赤彩が施される。9の脚部内面には刷毛調整及びナデが施され、10の脚部内面は丁寧に磨かれている。11は片口鉢で、内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。12から16は甕の一部と思われるものである。12は口縁部で、櫛描波状文が施される。13は折り返し口縁の甕で、破片が小さいので不明確であるが、櫛描文が施されている。14から16は甕或いは壺等の底部である。外面にヘラ削り、ヘラミガキ等の調整がみとめられる。17は台付甕の脚部と推定され、接合部から裾部に向かって外反して開いる。胴部内面はナデが施され、脚部内面にはナデ及びヘラ削りが施される。18は台付甕の脚部で、裾の端部が内側に折り返されている。外面に刷毛調整がみられる。S字口縁台付甕の脚部である可能性がある。

第3号溝跡（SD－03）出土の土器（第33図・第19表）

覆土から壺、甕等の土器片が出土したが、破片の小さいものが多かった。その中から比較的残りが良く、径が復元できるものや特徴的なものを図化して掲載した。

1と2は壺の一部と推定されるものである。1は底部で、外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面に刷毛調整が施されている。2は口縁部で内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施される。3から8は甕の一部と推定されるものである。そのうち3から6は口縁部で、3は外面に櫛描波状文が施され、内面はヘラ削り及びヘラミガキが施されている。4は外面の口縁部に櫛描波状文が、頸部に簾状文が施されている。5の外面には櫛描波状文が施されている。6は外面に櫛描波状文が、内面にヘラミガキが施されている。7、8は底部で、7の外面にはヘラ削りが、内面にはヘラミガキが施されている。8は外面にヘラ削りとヘラミガキが施され、内面の調整は不明である。9と10は台付甕であると推定される。9は脚部で、内外両面に刷毛調整及びナデが施されている。10は接合部で、表面の磨耗が著しく調整痕が認められない。

ピット出土の土器（第34図・第19表）

検出されたピットのうちいくつかのピットの覆土から土器等の遺物が出土した。破片が小さく、また磨耗が著しいため種類及び器種等が不明なものもあるが、ほとんどは弥生時代後期及び古墳時代前期の中に属するものであるとみられる。

本書に図化して掲載したものは第34図の2点である。1はP－79から出土した甕の頸部から口縁部にかかる部分である。外面には櫛描波状文が上から下へ向かって施文され、内面にはヘラ削り及びヘラミガキが施されている。口唇部には連続して刻み目が加えられている。2はP－144から出土した壺の頸部で、外面に櫛描直線文によるT字文が施されている。調整は、外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面は刷毛調整が行われている。このほかの土器は以下のとおりである。P－35から甕と推定される破片が1点出土している。P－43からは壺或いは甕の破片が1点出土している。P－48からは内外両面にヘラミガキ及び赤彩を施した土器片が5点出土した。P－55からは甕の破片が8点出土した。P－56からは外面に赤彩が施された土器片が3点出土した。P－57からは甕及び壺と推定される破片が4点出土した。P－69からは甕の破片が1点出土した。P－79からは甕或いは壺と推定される土器片が3点出土した。P－82からは甕或いは壺の破片が1点出土した。P－98からは種類及び器種不明の土器片が1点出土した。P－99からは甕或いは壺の破片が2点出土した。P－100からは甕等の破片3点が出土した。P－122からは種類及び器種不明の土器片が1点出土した。P－124からは壺及び甕の破片が2点出土した。P－157からは種類及び器種不明の土器片が1点出土した。P－164からは甕及び高坏の破片が2点出土した。

（2） 遺構外出土の土器（第35図・第20表）

包含層等の遺構以外から出土した遺物は点箱1ケース程であり、ほとんどが弥生時代後期箱清水式に属するものであると考えられる。これらは出土地のグリッド番号を付けて採集してある。このうち、比較的残りが良く径が復元できるものや特徴的なものを図化して掲載した。

1から3は壺である。1は口縁部から頸部にかけての部分で、内外両面にヘラミガキが施されている。2は頸部から胴部にかかる部分で、櫛描直線文による1条1組みのT字文及びボタン状貼付文が施されている。調整は、胴部外面にヘラミガキ及び赤彩が施され、内面は刷毛調整とヘラミガキが施されている。3は頸部で、外面に9本1組の櫛描直線文によるT字文が施されている。

4は高坏の接合部で、外面及び坏部内面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。脚部の内面は刷毛調整及びヘラ削りが施されている。

5は鉢或いは高坏で、体部の形態はやや丸みを有して直線的に開いている。表面は磨耗しているが内外両面にヘラミガキ及び赤彩が施されていた痕跡が見られる。

6は壺で、天井部に1孔が穿たれている。外面はヘラミガキ、内面刷毛調整が施されている。

7から12は甕である。7は口縁部で、外面に櫛描波状文、内面に刷毛調整及びヘラミガキが施されている。8は頸部から胴部にかかる部分である。外面には、頸部に簾状文、口縁部と胴部に櫛描斜状文が施されていると思われる。9も口縁部で、外面に櫛描格子目文、内面にヘラ削り及びナデが施されている。10は小破片で詳細は分からないが、口縁部であると思われる。口縁部の先端は外側に折り返されている。内外両面に刷毛調整が見られる。11は胴部から底部にかかる部分で、胴部は丸みを有する形態である。外面に刷毛調整及びヘラミガキ、内面にヘラ削り及びヘラミガキが施されている。12は底部で、小さい底部と丸みのある胴部を有する。内外両面にはヘラ削り及びナデが施されている。

弥生時代以外に属すると考えられるものも僅かに出土している。13は縄文時代中期の土器の口縁部である。14はS4E58から出土した須恵器の坏の口縁部と思われ、内外両面にナデが施されている。15はS5E63から出土した内耳土器で、口縁部付近の内側に橋状の把手を有する。このほか、破片が小さいため図化しなかったが、青磁椀と思われるものが表採された。

2 石器

石材は、甲田三男先生に鑑定をお願いした。出土した石器類のほとんどは遺跡周辺によくみられる石材で、特に染屋台を形成する層に多く含まれているものであるが、角閃石安山岩はこの地域には存在せず、最も近い産出地は東部町の湯の丸であるというご教示をいただいた。

（1） 遺構出土の石器類

第75号竪穴住居址（SB－75）出土の石器（第36図・第21表）

図の2の磨石は覆土より出土した。縦8.3cm、横7.3cmの楕円形で、断面形は径7.4cmの円形を呈する。安山岩の河原石で、熱を受けた跡がみられる。

第76号竪穴住居址（SB－76）出土の石器（第36図・第21表）

覆土より砥石と磨石が出土した。

図の9の砥石は河原石の転石である。縦12.3cm、幅3.5cmの方形の玄武岩で、断面形は台形を呈する。二

面に研がれた痕がみられる。両先端には打撃を受けた痕がみられる。3の磨石は、安山岩の河原石で縦10.0cm、横8.0cmの楕円形で断面形は扁平である。擦痕のほか、片面にたたかれてできたツブレ痕もみられる。

第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉出土の石器（第36図・第21表）

図の4の凹石は覆土より出土した。縦14.1cm、幅9.5cmの三角形で、断面形は扁平を呈する。安山岩の河原石である。凹部は浅く、側片近くまで擦りが及んでいる。

第82号竪穴住居址〈ＳＢ－８２〉出土の石器（第36図・第21表）

覆土より5、6、8、10が出土し、床面に貼りつくようにしてが12出土した。

凹石は2点出土した。図の5は縦8.6cm、横7.7cmの楕円形で、断面形は扁平を呈する。両面に凹部が見られるが、片面の凹みは広く浅く、もう片面の方は狭く深い。6は角閃石安山岩で、欠損している。長さ9.5cm、幅10.3cmであるが、元の長さはこれより長く、楕円形を呈していたと思われる。断面形は扁平を呈しており、両面に浅く広い凹みが見られる。8の敲石は、玄武岩の転石で、長さ13.5cm、幅4.9cmの柱状を呈する。長軸両端に使用部分が見られ、剥離とツブレ痕が認められる。10の砥石は砂岩で、長さ13.7cm、幅6.0cmの板状を呈する。欠損しているので、元はこれより長かったものと思われる。片面と両側縁に砥面がみられる。12は作業台とみられ、表面は擦れてなめらかになっている。安山岩の河原石で、重さは2040kgである。

第28号土坑〈ＳＫ－２８〉出土の石器（第36図・第21表）

7は重さ2,410g、長さ18.6cm、幅11.8cmの安山岩で、円形の広く深い凹みが一ヶ所つくられている。凹みの断面は緩いＶ字型を呈しており、擦りによってつくられている。

第1号溝跡〈ＳＤ－０１〉出土の石器（第36図・第21表）

図の1は、覆土から出土した黒曜石の打製石鏃で、一部欠損しているが無茎鏃で基部は凹型を呈している。

（2） 遺構外出土の石器

遺構外のＳ９Ｅ６０グリッドから、11の砥石が出土した。楕円形の平たい安山岩の河原石で、長さ4.5cm、幅4.6cmを測るが、欠損しているので元はこれより長いものと思われる。両面に砥面がみられる。このほか、廃土から石斧の可能性があるものが発見されたが、風化が著しく原形もとどめていないのでここでは図示しなかった。

3　その他の遺物

（1） 遺構出土のその他の遺物（第37図・第22表）

紡錘車

第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉の覆土から紡錘車が出土した。図の1は径6.4cmの円形で、厚さは1.5cmの扁平形を呈し、重量は64.8gである。また、2も紡錘車で、第78号竪穴住居址〈ＳＢ－７８〉の第12図に示した位置から出土した。径6.9cmで、重量は74.6gである。

土製円盤

第３号溝跡〈ＳＤ－０３〉の覆土から土製円盤が出土した。３は直径およそ4.6㎝、厚さ0.7㎝で、断面に緩い曲線を持つ。一方の面にヘラミガキ及び赤彩、もう一方の面にハケ調整痕がみられることから壺の破片を加工転用したものと考えられる。４は直径およそ3.0㎝、厚さ0.8㎝で、２と同じく断面に緩い曲線を持つ。一方の面にヘラミガキ及び赤彩がみられ、やはり壺等の破片を加工転用したものと考えられる。

金属製品・鉄滓

第75号竪穴住居址〈ＳＢ－７５〉の覆土中から金属製品が出土し(図の５)、第１号溝跡〈ＳＤ－０１〉の覆土中から金属製品が出土した(図の６)。鉄製品と思われ、どちらも腐蝕が著しく原形は不明で、完形の姿を復元できない。

第79号竪穴住居址〈ＳＢ－７９〉((図の９)、第82号竪穴住居址〈ＳＢ－８２〉の覆土から鉄滓が出土した(図の10・11)。

（２） 遺構外出土その他の遺物 (第37図・第22表)

Ｓ５E63及びＳ５E64から金属製品が出土した(図の７・８)。鉄製品で、どちらも腐蝕が著しく原形は不明である。Ｓ５E64からは銅製の分銅が出土した(図の12)。側面に凹字或いは文様があるが、腐蝕していて判読できない。近世から近代のものと考えられる。

第４節　まとめ

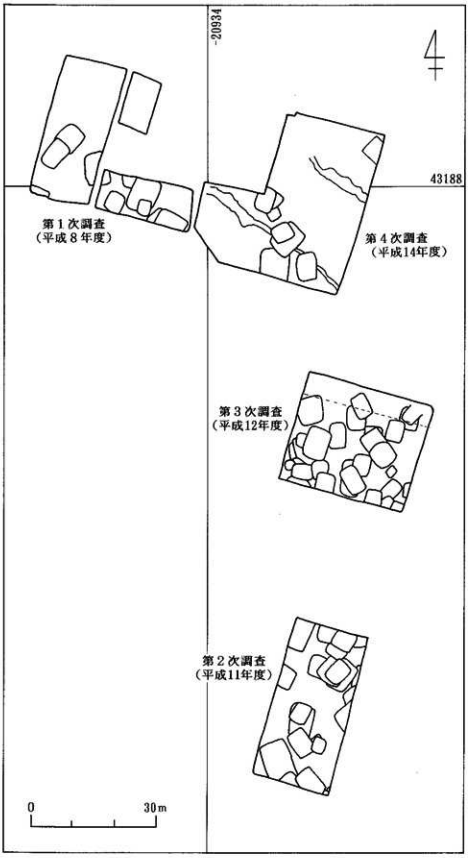
（１）遺構について

本調査で検出された遺構群は、竪穴住居址、土坑、溝跡、配石遺構、ピットであった。

(竪穴住居址群)　調査地区の中央から南（グリッドの東西軸E54からE60、南北軸S11からS19）に多く集中して検出されている。大きく分けて、北東を向くものが４軒、北を向くものが２軒、北西を向くものが２軒である。出土遺物からこれらは弥生時代後期箱清水式期に属するものと考えられる。切り合いによって破壊されたり調査範囲から一部がはずれたりして全体が明らかでないものを除けば、これらの平面形態は隅丸長方形を呈し、床には４ヶ所の主柱の跡と推定される穴が確認されている。

このうち、柱穴の平面形態は円形を呈するものと極めて細長い楕円形を呈しているものがある。また、これら柱穴の断面は底面から床面に向かって直線的に掘りこまれているものと、段を有して掘りこまれているもの、及び底面から住居床に向かって大きく外反した形態を呈しているものがみられる。主柱穴以外のものと思われるピットを有する住居もある。第75号竪穴住居址の南側壁近くには、入口施設に伴う柱の跡の可能性が考えられる２ヶ所のピットが検出された。第78号竪穴住居址、第81号竪穴住居址、及び第82号竪穴住居址には、主柱穴の他に炉と北方の壁との間に楕円形のピットが検出された。また、第80号竪穴住居址、第82号竪穴住居址は周溝や間仕切り状の溝が掘られている。

炉は５軒に確認され、第76号竪穴住居址を除いてみな北方の２本の主柱穴間に位置する。このうち、第82号竪穴住居址は隣接して２基の炉が確認されている。第78号竪穴住居址と第80号竪穴住居址は床を掘り窪めた地床炉である。第81号竪穴住居址には壺の頸部が、第82号竪穴住居址の片方の炉には壺の底部が炉に設置されていた。また、この２つの住居址にはこれらの炉のほかに床面の中央部分に酸化被熱面を有しており、これらには掘り方は認められない。



第７図　調査関連図１～４

《溝跡》　４条のうち、第１号溝跡と第３号溝跡は一連のものである可能性が高い。第１号溝跡及び第３号溝跡と第２号溝跡はともに南東から北西方向に伸び、調査区の北部と南部に平行して検出された。覆土からは多くの弥生時代後期の土器と僅かな土師器を出土している。非常に浅く、推測の根拠となる資料も少ないが、とりあえず自然流路である考えておきたい。時期は、少なくとも第３号溝跡は第79号竪穴住居址及び第82号竪穴住居址を切っていることからこれらより新しいものと考えられる。

《配石遺構》　全貌を確認するに至っておらず遺物の出土も伴なっていないことから、どのような性格のものであるか等については他の類例の出土を待って検討する必要がある。

《土坑及びピット群》　遺構の性格及び時期が分かったものは無かった。この中には柱穴列を構成するものが２件確認されたが、これらについても性格及び時期は判明していない。個々については前説の文章及び表で述べたとおりであるが、土坑とピットをあわせて二十数基から土器等を出土し、それらは土師器等の他、多くが弥生時代後期のものである。また、他の遺構と重複しているものをみると、弥生時代の竪穴住居址または、それを切る第３号溝跡をさらに切っているものも多くみられ、大

雑把な言い方であるがこれら全体の想定される時間幅は大きい。

（2）遺物について

次に、出土した遺物のうち主体を占める箱清水式土器について器種ごとの特徴をみると以下のようになる。

〈甕〉 全形が分かるものは少ないが、大きく分けて平底甕と台付き甕が出土した。このうち、台付き甕は第23図15（第77号竪穴住居址出土）等に僅かにみられ、平底甕が大部分を占める。平底甕は口縁部が長く発達しているもので、ほとんどのものの外面に櫛描波状文が施され、それ以外の文様では櫛描直線文による格子目文が施されているものが第76号竪穴住居址や第78号竪穴住居址から僅かに出土している（第22図の8、第24図の9）。櫛描波状文が施されているものの中には、頸部に簾状文が施されるものと施されないものがみられる。簾状文の静止回数は等連止、2～4連止等のほか直線のものがある。

全体の形態が分かるもののうち、第23図の12（第77号竪穴住居址出土）と第28図の22（第82号竪穴住居址出土）は、口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさで、胴部最大径が中位にある。前者は口径の方が若干大きく、後者は胴部最大径が若干大きい。第23図の11（第77号竪穴住居址出土）は他と比べて小型で、口径が胴部最大径より大きく、胴部最大径は中位にある。また、第22図の7（第76号竪穴住居址出土）は、口径が胴部最大径と比べて口径が若干大きく、胴部最大径が上位にある。

この他、小片ではあるが口縁部の先端が外側に折り返されている甕も第28図の25（第82号竪穴住居址出土）等に僅かにみられる。

〈壺〉 赤彩を施すものが多いが、無彩のものもある。ほぼ完形で出土した第82号竪穴住居址の2点（第28図の1と2）は、口縁部が大きく外反し、肩部は「なで肩」状を呈し、胴部最大径を下位に持ち下膨れ状を成すものである。この2点以外に全形を知り得るものはないが、出土した壺のほとんどがこれに類するものと推測される。第28図の8（第82号竪穴住居址出土）のように口縁部の開きが小さいものもある。このほかの形態を呈するものでは、第28図の5（第82号竪穴住居址出土）は、器高が小さく胴部が算盤玉状を呈している。

大部分を占めると思われる先の類には、胴下半部の形状が第28図の2と3（第82号竪穴住居址出土）にみられるように胴最大径に位置する部分が稜を有して折れるものと、第28図の1と7（第82号竪穴住居址出土）にみられるように屈折せず丸く張るものがある。

頸部の文様帯については、これを施すものが多くみられるが、第23図の2（第77号竪穴住居址出土）、第28図の7と8（第82号竪穴住居址出土）等のように施さないものがある。文様はT字文がほとんどを占めると思われるが、第81号竪穴住居址出土の櫛描直線文（第27図の1）と第82号竪穴住居址出土のヘラ描き羽状文（第28図の10）の破片も僅かにみられる。T字文には2条1組のものと1条1組のものがあり、ボタン状貼付け文が施されているものもある。

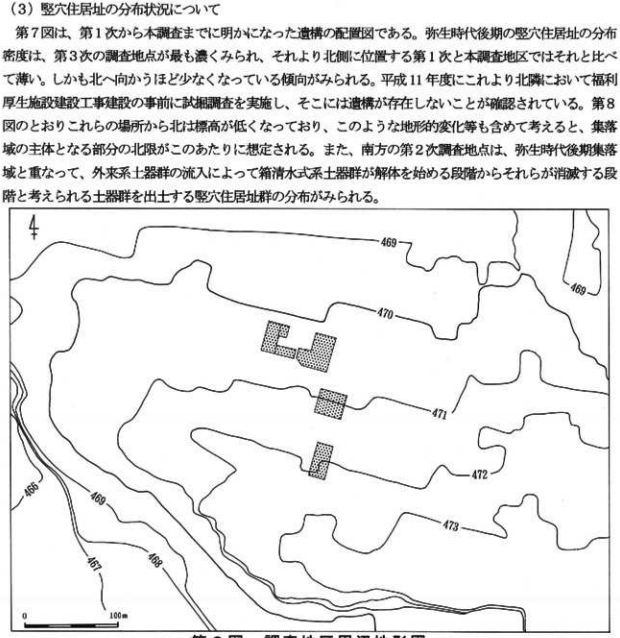
〈高坏〉 全形を知り得るものは、第28図の12（第82号竪穴住居址出土）のみである。これは、坏部が口縁端部で水平に外反し、脚高が坏部高と比べて長い形態を呈する。第22図の2と3（第76号竪穴住居址出土）、第25図の2（第79号竪穴住居址出土）、第26図の2（第80号竪穴住居址出土）は坏部のみが出土したものであるが、これらはこの第28図の12の坏部と同じ類の形態といえる。この中に口縁部に山形突起を持つものと、持たないものがある。このほか、坏部が内弯するもの、或いは坏部に段を有するものは、全形を知り得るものの中には確認されていない。これらは第1次から第3次調査では出土している。なお、口縁部の下からが欠損しているため鉢か高坏かはっきりしないものが幾つか出土しているが、その中に坏部が内弯する形態の高坏が含まれている可能性がある。

また、第22図の4（第76号竪穴住居址出土）、第23図の5（第77号竪穴住居址出土）は脚部のみのもので、大きさ等から推定して先にあげた第28図の12の脚部と同じ脚高が坏部高と比べて長い形態を呈する類のものと考えられる。また、第21図の5（第75号竪穴住居址出土）と第28図の13（第82号竪穴住居址出土）は、欠損部分が大きいため不明な点も多く、高坏に分類されるものではない可能性もあるが、前の3点に比べ脚部高が小さいものである。第28図の12（第82号竪穴住居址出土）、第22図の4（第76号竪穴住居址出土）、及び第23図の5（第77号竪穴住居址出土）は三角透し孔が穿たれている。

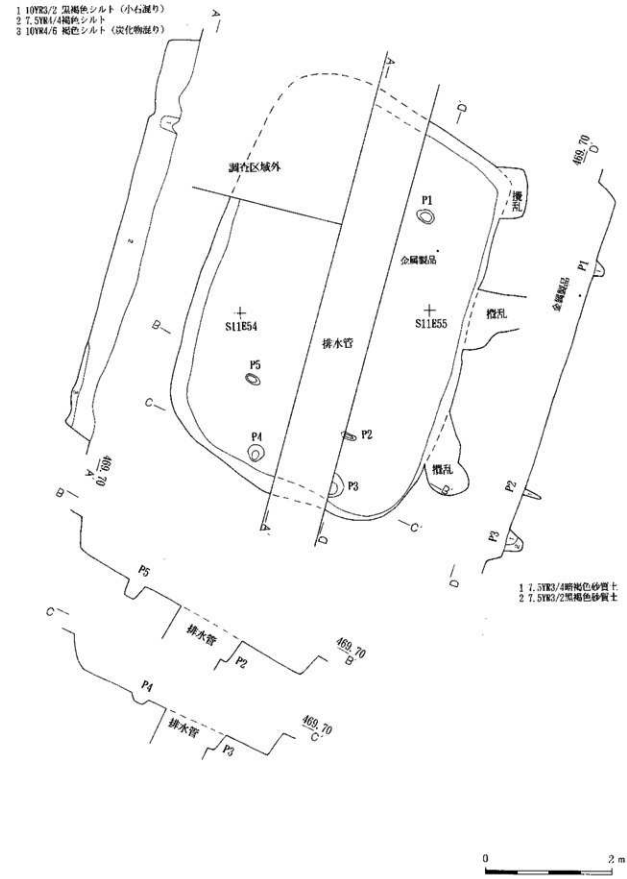
（鉢、深鉢、甑、蓋）　鉢は赤彩を施すものと無彩のものがみられる。形態は逆ハの字状を呈する。口縁部が内弯するものと、直線的なものがある。また、片口をもつもの、口縁部に小孔を穿つものがある。深鉢は、全形を知り得るものは出土しなかった。赤彩で口縁が外反するもの、頸部に簾状文がみられるものもある。甑は全形がわかるものが2点出土した。これらの体部は逆ハの字状で口縁部が内弯し、底部に孔を穿つ形態を呈する。蓋も全形がわかるものは、無彩で体部はハの字状に広がり、天井部に孔を持つ形態のものである。

（3）竪穴住居址の分布状況について

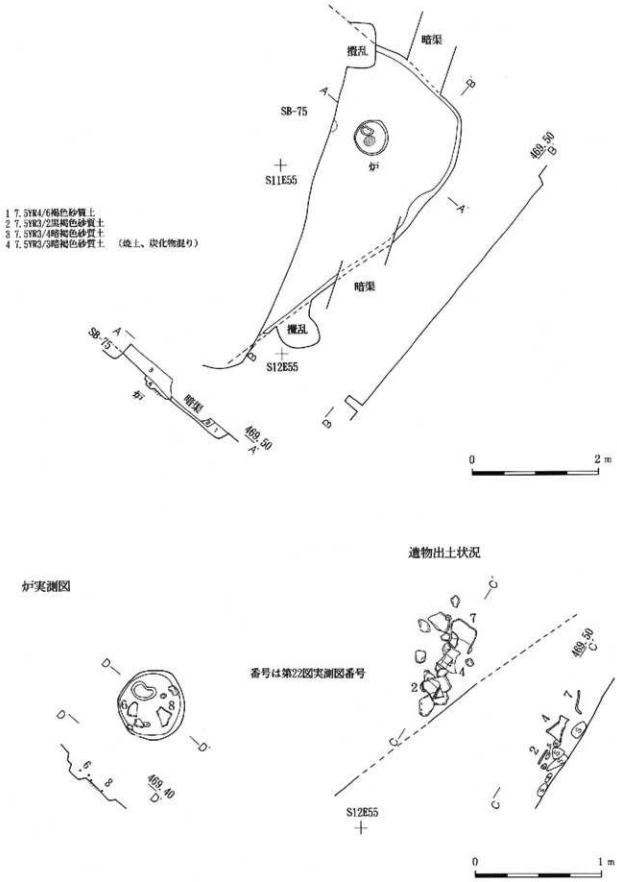
第7図は、第1次から本調査までに明かになった遺構の配置図である。弥生時代後期の竪穴住居址の分布密度は、第3次の調査地点が最も濃くみられ、それより北側に位置する第1次と本調査地区ではそれと比べて薄い。しかも北へ向かうほど少なくなっている傾向がみられる。平成11年度にこれより北隣において福利厚生施設建設工事建設の事前に試掘調査を実施し、そこには遺構が存在しないことが確認されている。第8図のとおりこれらの場所から北は標高が低くなっており、このような地形的変化等も含めて考えると、集落域の主体となる部分の北限がこのあたりに想定される。また、南方の第2次調査地点は、弥生時代後期集落域と重なって、外来系土器群の流入によって縄清水式系土器群が解体を始める段階からそれらが消滅する段階と考えられる土器群を出土する竪穴住居址群の分布がみられる。



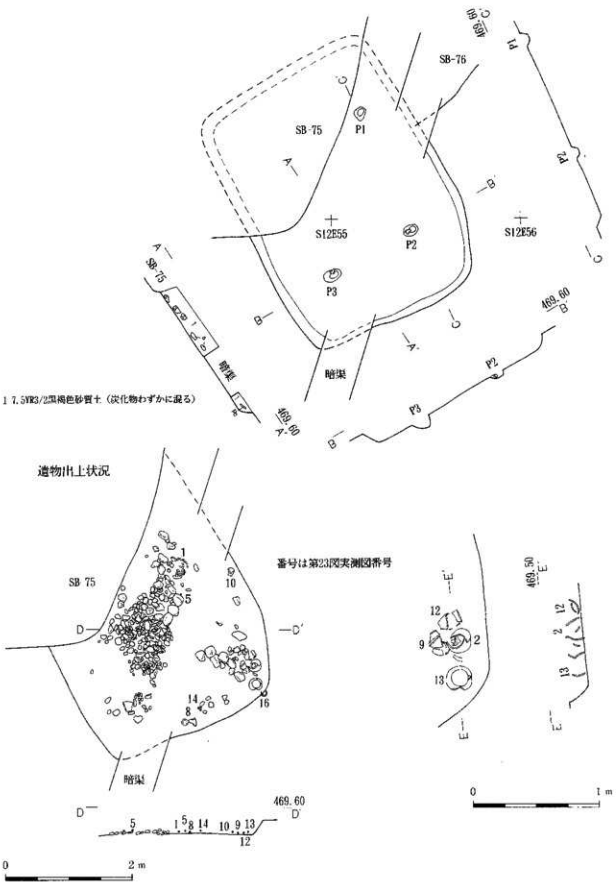
第8図　調査地区周辺地形図


1 10YR3/2 黒褐色シルト（小石混り）
2 7.5YR4/4褐色シルト
3 10YR4/6 褐色シルト（炭化物混り）
調査区域外
S11E54
S11E55
排水管
P1
P2
P3
P4
P5
金属製品
撹乱
469.70
1 7.5YR3/4暗褐色砂質土
2 7.5YR3/2黒褐色砂質土
0
2 m

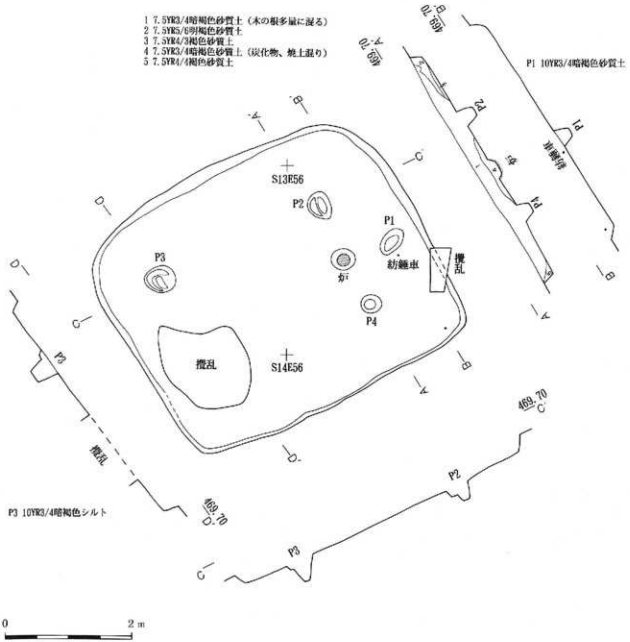
第９図　ＳＢ－７５実測図



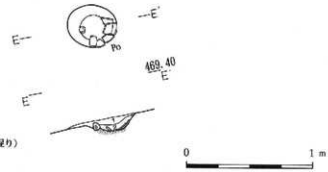
第１０図　ＳＢ－７６実測図



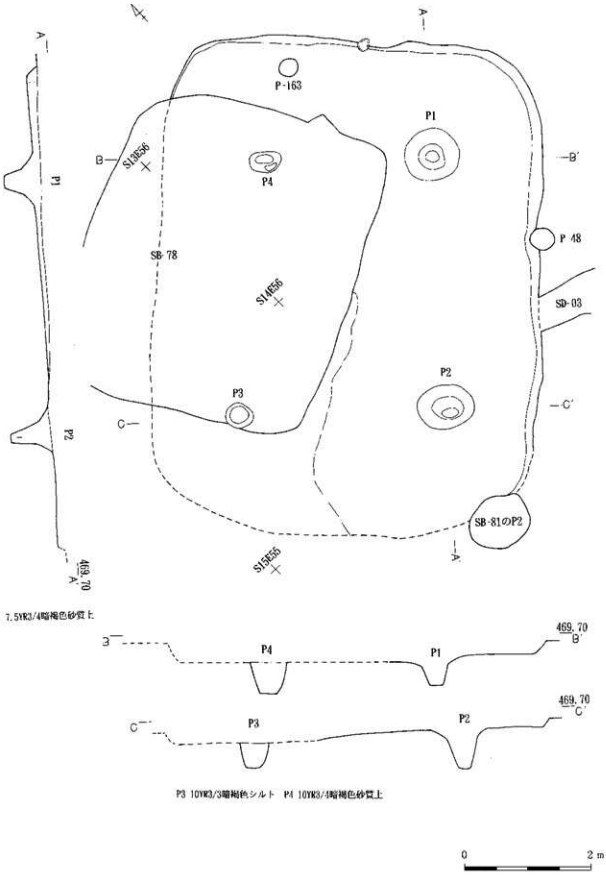
第１１図　ＳＢ－７７実測図



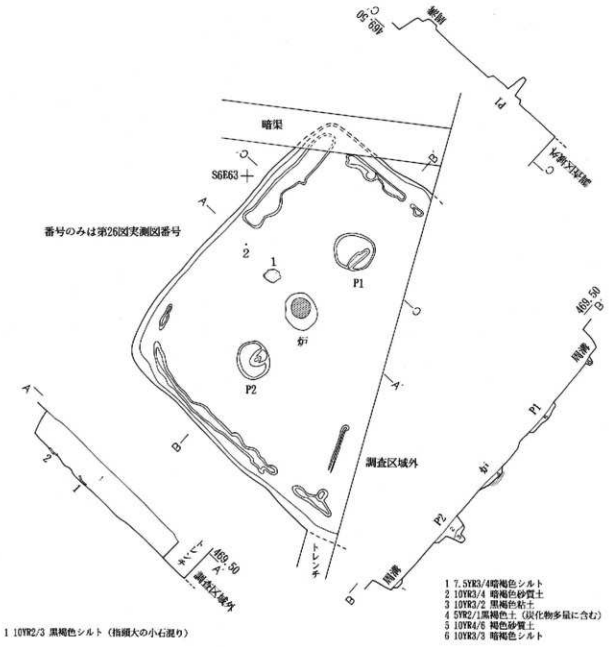
炉実測図



第１２図　ＳＢ－７８実測図

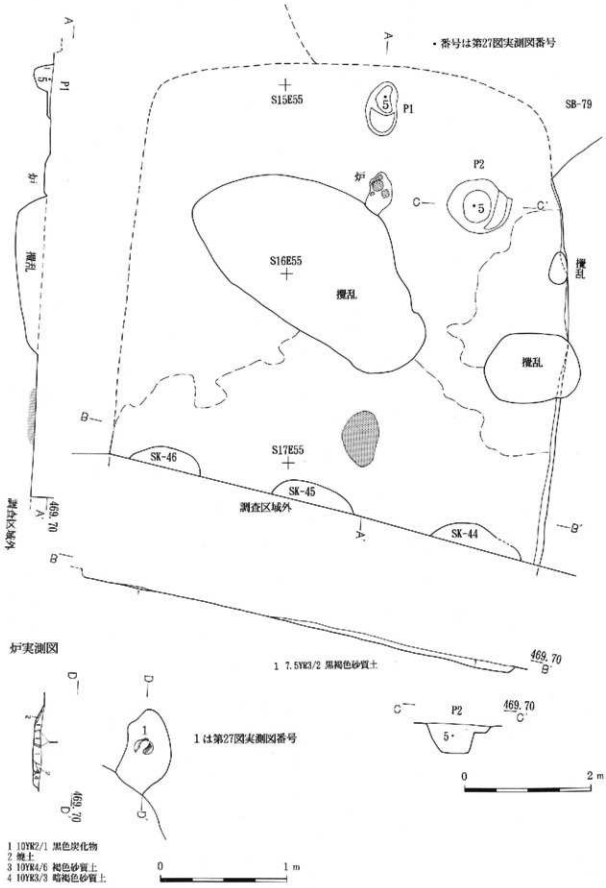


第１３図　ＳＢ－７９実測図

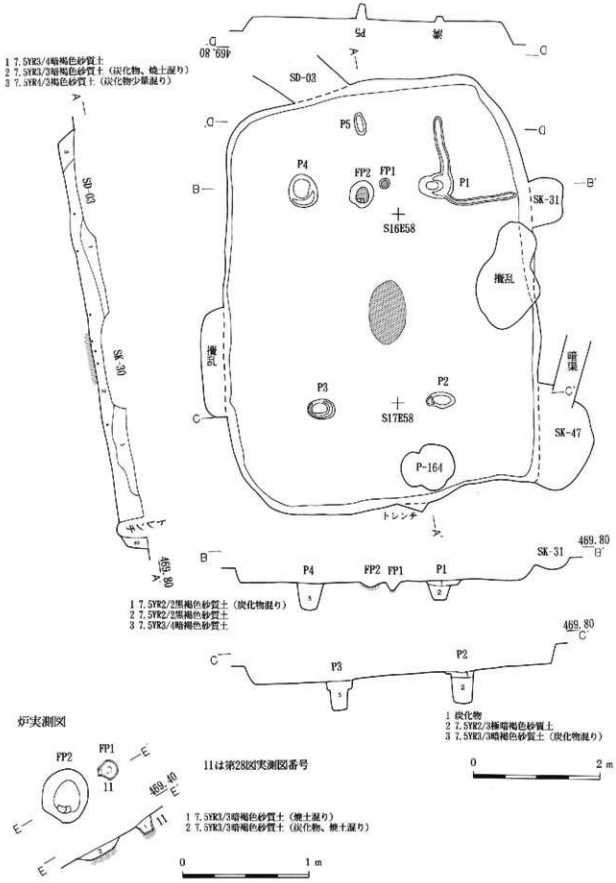


0　　2 m

第１４図　ＳＢ－８０実測図

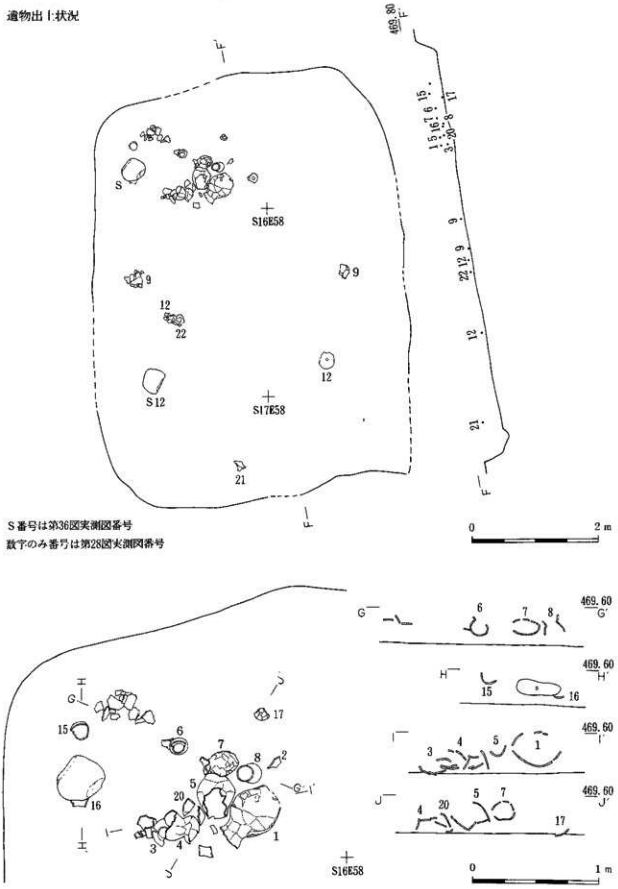


第１５図　ＳＢ－８１実測図

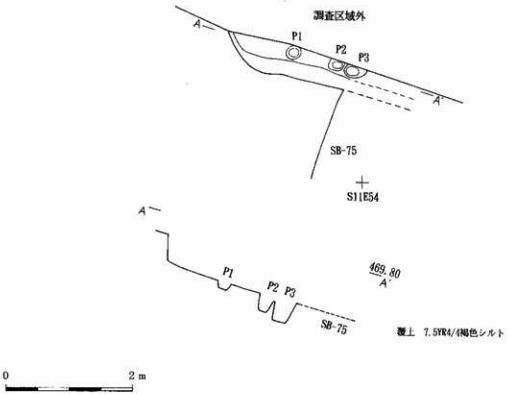


第１６図　ＳＢ－８２実測図（１）

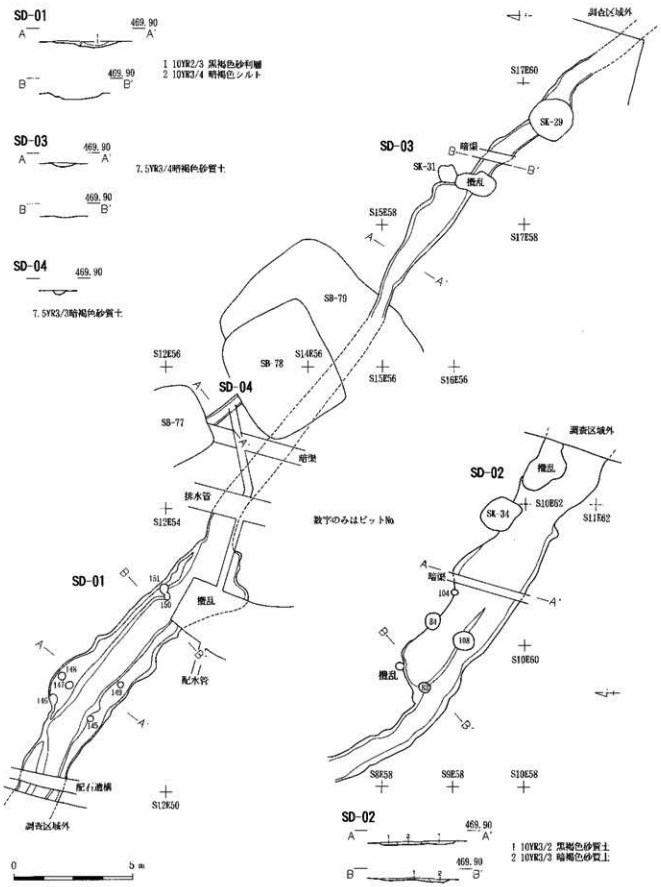
遺物出土状況



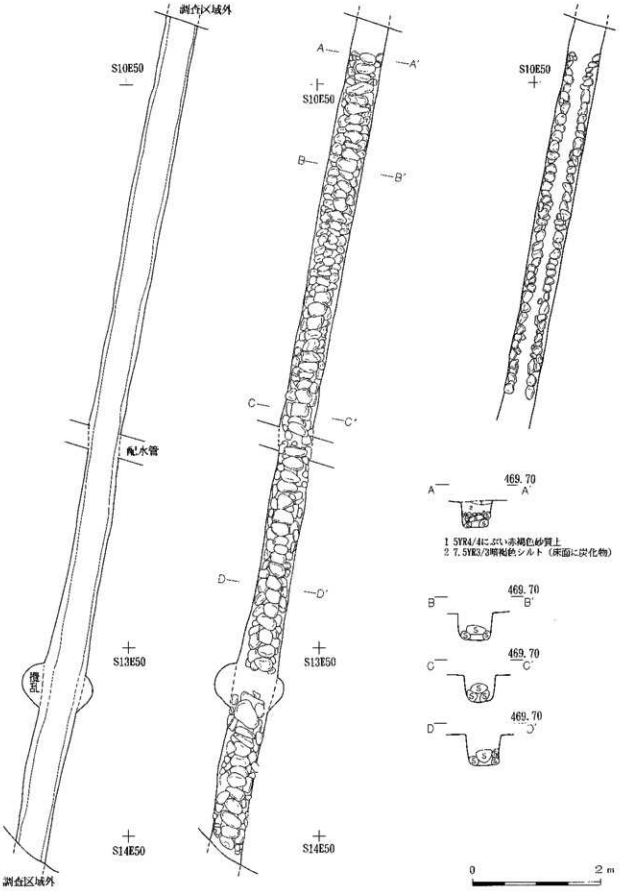
第１６図　ＳＢ－８２実測図（２）



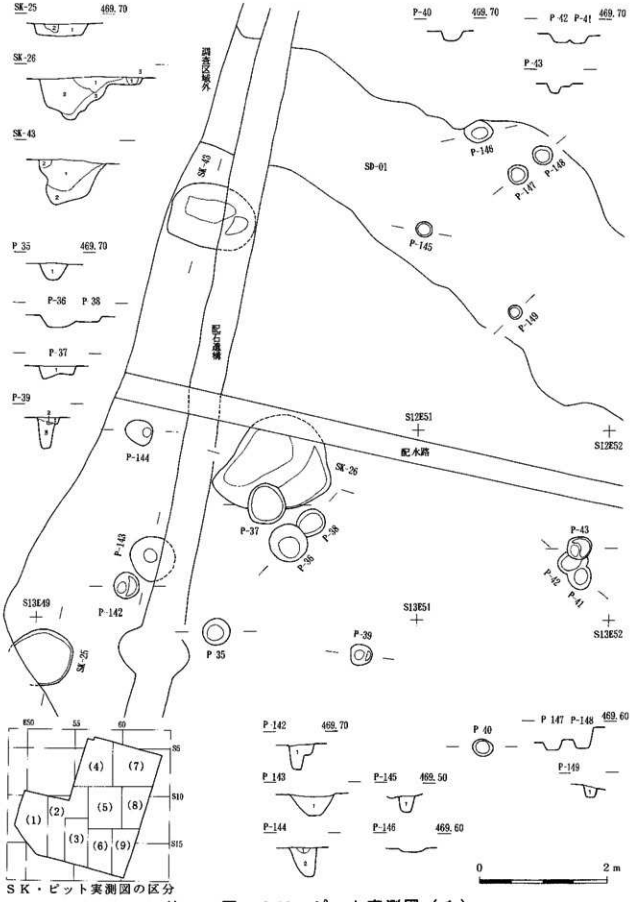
第１７図　ＳＢ－８３実測図



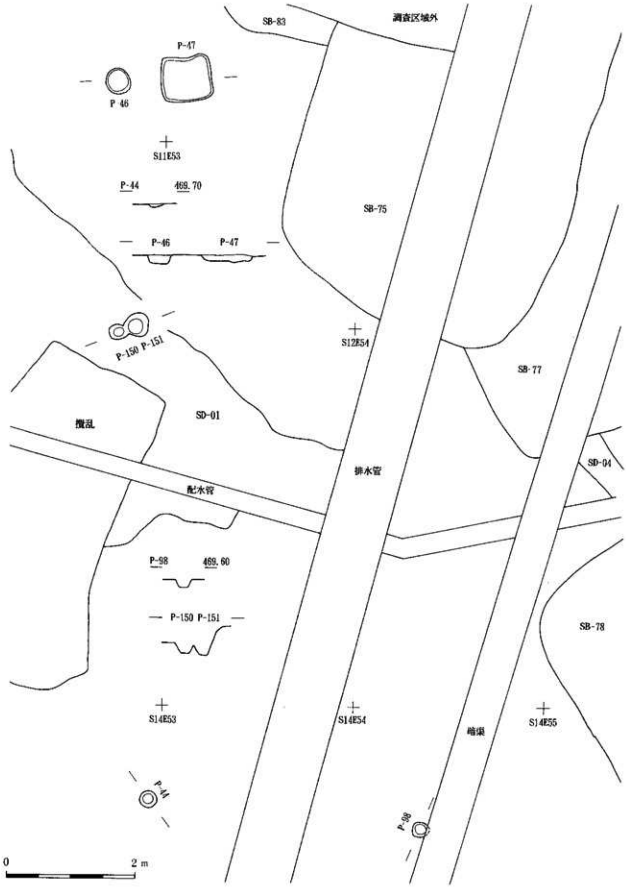
第１８図　ＳＤ－０１・０２・０３・０４実測図



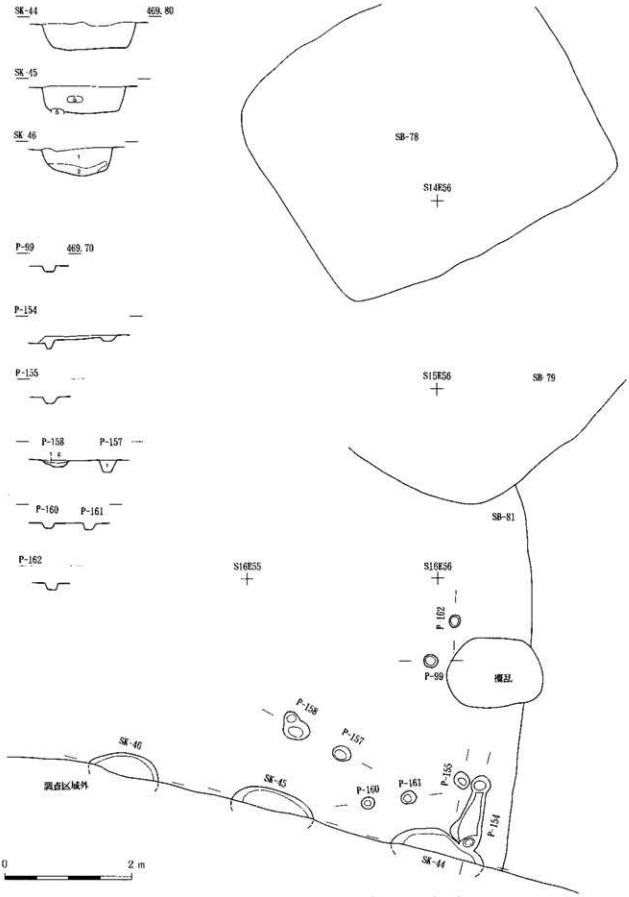
第１９図　ＳＤ－０５（第１号配石遺構）



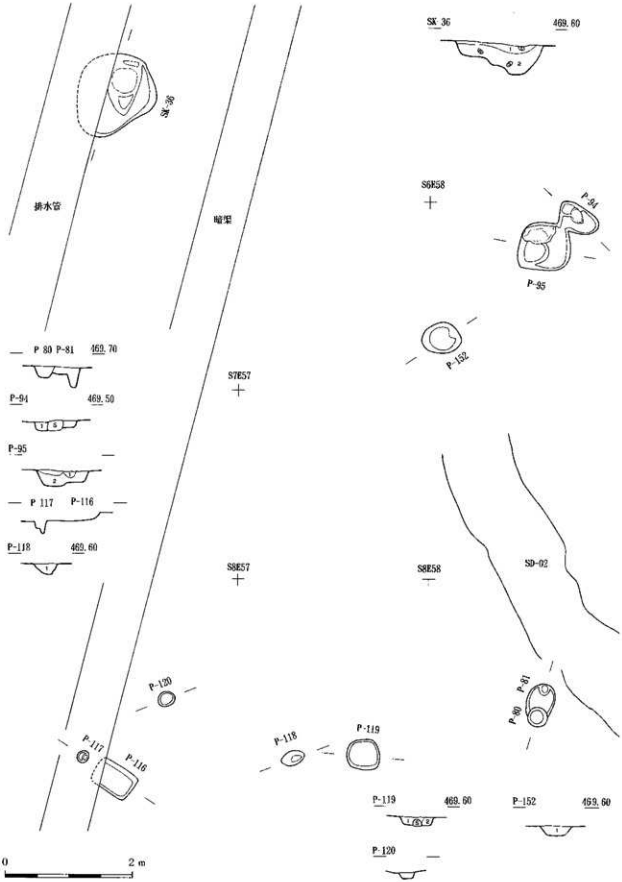
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（１）



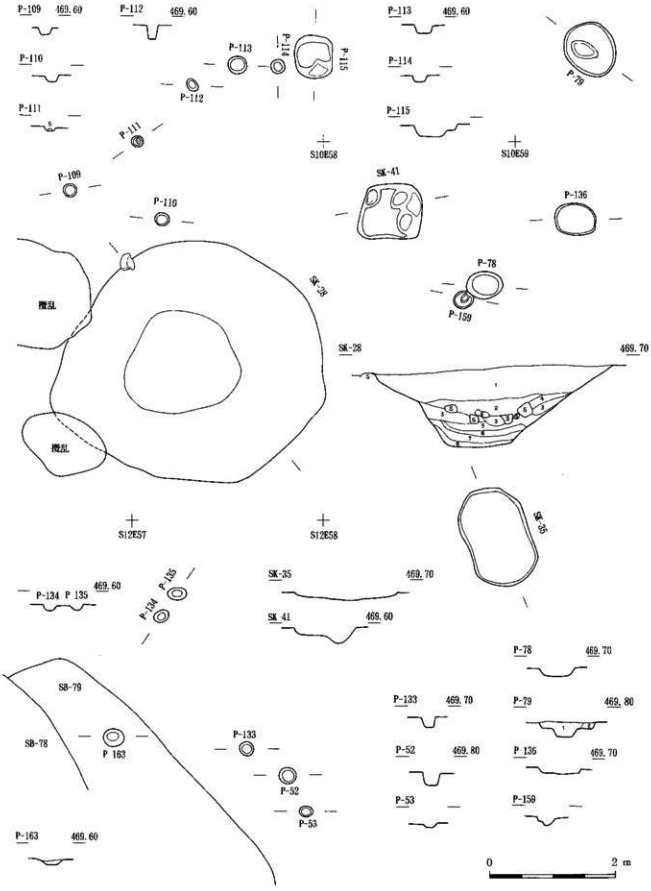
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（２）



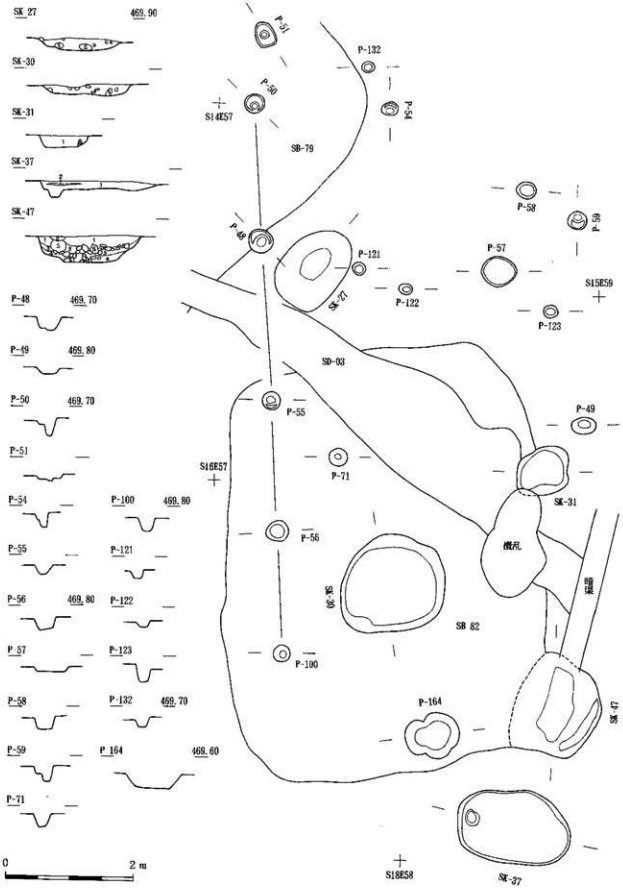
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（３）



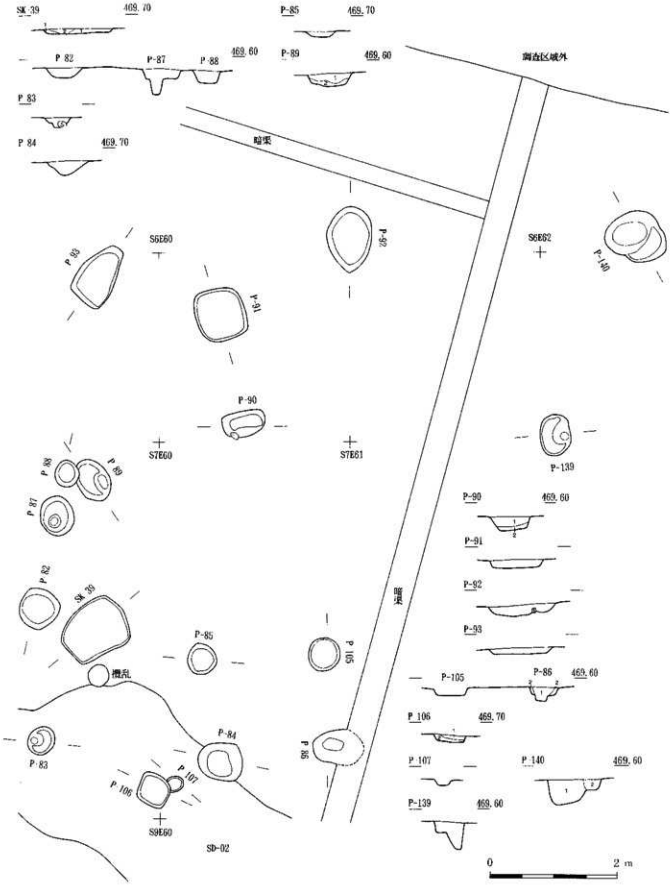
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（４）



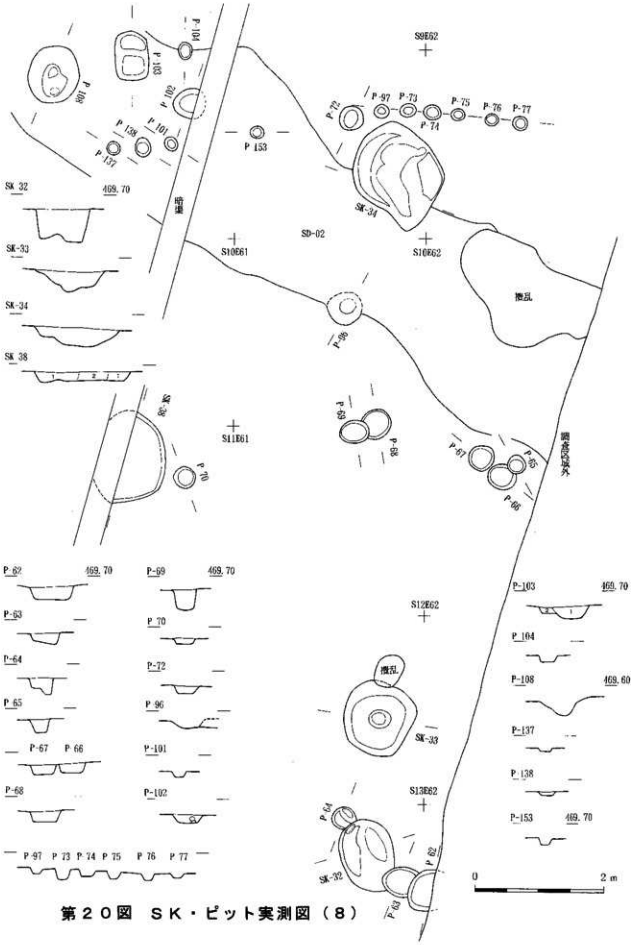
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（５）



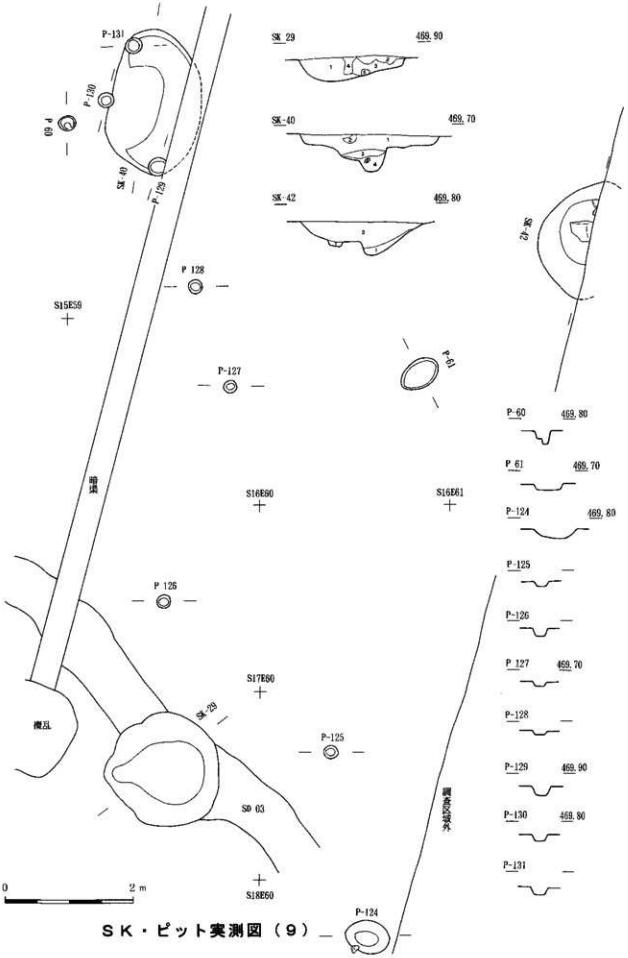
第２０図　ＳＫ・ピット実測図（６）



第２０図　ＳＫ・ピット実測図（７）



第２０図　ＳＫ・ピット実測図（８）


P-131
P-130
P 60
SK 40
P 129
SK 29
469.90
SK-40
469.70
SK-42
469.80
SK-42
P 128
S15E59
P-127
P-61
P-60
469.80
P 61
469.70
P-124
469.80
S16E60
S16E61
P-125
P-126
P 127
469.70
P-128
P-129
469.90
P-130
469.80
P-131
P 126
S17E60
SK-29
P-125
撹乱
SD 03
S18E60
P-124
0
2 m

SK・ピット実測図（9）

第75号住居址　遺構実測図（第9図）　遺物実測図（第21図）　（規模の単位はm）

位置	グリッド	S11E54, S11E55, S11E56, S12E54, S12E55 S12E56			その他	柱穴	P1（0.30×0.20×0.17）P2(?×0.08×0.30) P3（0.40×?×0.28）P4(0.2 8×0.24×0.10) P5（0.26×0.12×0.27）		
	標高	468.98～469.02				炉	位置	不明	規模
規模	規模	6.40×4.40	床面積	2.26（推定）			覆土		
模	壁高	南壁0.50　北壁0.42					備考		
覆土	1 7.5YR4/4褐色シルト 2 10YR3/2 黒褐色シルト（小石混り） 3 10YR4/6 褐色シルト（炭化物混り）					備考	北西隅は調査区域外 排水管に破壊され、壁から床面にかけて東西に分断されている 壺、深鉢、鉢、甕、紡錘車（後期箱清水式期）、磨石、金属製品出土		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N-20°-E					
	その他								

第76号住居址　遺構実測図（第10図）　遺物実測図（第22図）

位置	グリッド	S11E56, S12E56			その他	柱穴			
	標高	469.16～469.20				炉	位置	北西寄り	規模 0.55×0.58×0.08
規模	規模	不明	床面積	不明			覆土	7.5YR3/3暗褐色砂質土（焼土、炭化物混り）	
模	壁高	南東壁0.20　北西壁0.14					備考	浅い掘込み	
覆土	1 7.5YR4/6褐色砂質土 2 7.5YR3/2黒褐色砂質土 3 7.5YR3/4暗褐色砂質土 4 7.5YR3/3暗褐色砂質土（焼土、炭化物混り）					備考	SB-75 に切られる 暗渠等に壁、床面を部分的に壊されている 深鉢、高坏、鉢、甕（後期箱清水式期）、砥石、磨石出土		
形態	平面形態	隅丸長方形?	主軸方位	N-35°-E ?					
	その他								

第77号住居址　遺構実測図（第11図）　遺物実測図（第23図）

位置	グリッド	S12E55, S12E56, S13E55, S13E56			その他	柱穴	P1(0.20×0.18×0.10)　P2(0.22×0.15×0.12) P3(0.30×0.17×0.18)		
	標高	469.12～469.16				炉	位置	不明	規模
規模	規模	3.2×?	床面積	不明			覆土		
模	壁高	西壁0.28　南壁0.14					備考		
覆土	1 7.5YR3/2黒褐色砂質土（炭化物わずかに混じる）					備考	SB-75, SB-76 に切られる 暗渠等に壁、床面を部分的に壊されている 壺、高坏、、鉢、甕（後期箱清水式期）出土		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N-38°-W					
	その他								

第78号住居址　遺構実測図（第12図）　遺物実測図（第24図）

位置	グリッド	S13E56, S13E57, S14E56, S14E57, S14E58 S15E56, S15E57			その他	柱穴	P1(0.46×0.28×0.18)　P2(0.44×0.38×0.20) P3(0.50×0.44×0.34)　P4(0.32×0.30×0.20)	
	標高	469.08～469.12				炉	位置	北東側の主柱穴間
規模	規模	5.00×4.30	床面積	18.5			規模	0.38×0.35×0.10
模	壁高	西南壁0.24　東北壁0.20					覆土	1 10YR4/6 褐色シルト 2 10YR3/3 暗褐色シルト（炭化物、焼土混り）
覆土	1 7.5YR3/4暗褐色砂質土（木根多量に混る） 2 7.5YR5/6明褐色砂質土 3 7.5YR4/3褐色砂質土 4 7.5YR3/4暗褐色砂質土（炭化物、焼土混り） 5 7.5YR4/4褐色砂質土						備考	浅い掘込み　土器片が底部に付着
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N-42°-E		備考	壺、甕、紡錘車（後期箱清水式期）出土	
	その他							

第３表　竪穴住居址観察表（１）

第79号住居址　遺構実測図（第13図）　遺物実測図（第25図）　（規模の単位はｍ）

位置	グリッド	S13E57, S14E56, S14E57, S14E58, S15E56, S15E57, S15E58, S16E56, S16E57				その他	柱穴	P1(0.87×0.84×0.48)　P2(0.90×0.70×0.63) P3(0.44×0.40×0.24)　P4(0.50×0.34×0.34)	
	標高	469.36～469.48					炉	位置	不明　規模
規模	規模	7.90×5.85（推定）	床面積	45.2（推定）				覆土	
	壁高	南東壁0.20　北東壁0.16						備考	
覆土	1 7.5YR3/4暗褐色　砂質土					備考	SB-78, SB-81, SD-03 に切られる 壺、高坏、鉢、甕（後期箱清水式期）、凹石、鉄滓出土		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N-44°-E					
	その他								

第80号住居址　遺構実測図（第14図）　遺物実測図（第26図）

位置	グリッド	S6E64, S7E63, S7E64, S8E63, S8E64				その他	柱穴	P1(0.66×0.62×0.08)　P2(0.60×0.55×0.33)	
	標高	468.96～469.04					炉	位置	P1, P2 の中間　規模　0.57×0.53×0.12
規模	規模	5.20×　床面積　不明						覆土	5YR2/1黒褐色土　炭化物を多量に含む
	壁高	北東壁0.34　南西壁0.30						備考	地床炉　浅い掘込み
覆土	1 10YR2/3 黒褐色シルト（指頭大の小石混り）					備考	南東側は調査区域外、北西側の壁を暗渠に壊される 北西、北東、南西の壁際に周溝あり 壺、高坏（後期箱清水期）、古墳前期の土器出土		
形態	平面形態	隅丸長方形？　主軸方位　N-42°-E?							
	その他								

第81号住居址　遺構実測図（第15図）　遺物実測図（第27図）

位置	グリッド	S15E55, S15E56, S15E57, S16E55, S16E56 S16E57, S17E55, S17E56, S17E57, S18E55 S18E56, S18E57				その他	柱穴	P1(0.86×0.52×0.32)　P2(1.00×0.86×0.44)	
	標高	469.38～469.40					炉	位置	P2の西側　規模　0.64×0.30×0.08
規模	規模	不明　床面積　不明						覆土	1 10YR2/1 黒色土 2 焼土 3 10YR4/6 褐色砂質土 4 10YR3/3 暗褐色砂質土
	壁高	東壁0.11						備考	浅い掘込み　内部に壺の類部を正位に置く
覆土	1 7.5YR3/2黒褐色砂質土					備考	南側は調査区域外　SK-44, 45, 46 に切られる 南側に0.9×0.6mほどの焼土あり 壺、高坏、甕（後期箱清水式期）出土		
形態	平面形態	隅丸長方形？　主軸方位　N-7°-E							
	その他								

第82号住居址　遺構実測図（第16図）　遺物実測図（第28図）

位置	グリッド	S16E58, S16E59, S17E58, S17E59, S18E58, S18E59				その他	柱穴	P1(0.55×0.40×0.32)　P2(0.47×0.22×0.51) P3(0.42×0.32×0.47)　P4(0.51×0.47×0.41) P5(0.38×0.17×0.25)	
	標高	469.26～469.34					炉	位置	FP1, FP2 共に北側柱の間
規模	規模	6.74×4.94　床面積　28.6（推定）						規模	FP1 0.17×0.16×0.12　FP2 0.42×0.36×0.09
	壁高	南壁0.32　西壁0.24						覆土	FP1 7.5YR3/3暗褐色砂質土（焼土混り） FP2 7.5YR3/3暗褐色砂質土（焼土、炭化物混り）
覆土	1 7.5YR3/4暗褐色砂質土 2 7.5YR3/3暗褐色砂質土（炭化物、焼土混り） 3 7.5YR4/3褐色砂質土（炭化物少量混り）							備考	FP1 すり鉢状の掘込みに土器底部を正位に置く　FP2 浅い掘込み
形態	平面形態	隅丸長方形　主軸方位　N-3°-W？				備考	SD-03, SK-30, SK-31 に切られる 壺、高坏、甕（後期箱清水式期）、縄文、鉄滓、砥石 凹石、敲石出土		
	その他								

第４表　竪穴住居址観察表（２）

第83号住居址　遺構実測図（第17図）　遺物実測図（第29図）　（規模の単位はm）

位置	グリッド	S11E55, S11E54				その他	柱穴	P1(0.22×0.21×0.11)　P2(0.60x?×0.38)			
	標高	469.36～469.48					炉	位置		規模	
規模	規模	不明	床面積	不明				覆土			
模	壁高	西壁0.42						形態			
覆土	1 7.5YR4/4褐色シルト										
形態	平面形態	不明	主軸方位	不明		備考	北側は調査区域外 東側はSB-75 に切られる 壺、高坏（後期箱清水期）出土				

第５表　竪穴住居址観察表（３）

遺構No.	位置	長径	短径	深さ	平面形態 断面形態	覆土	遺物	備考
SK-25 20図1	S14E49 S14E50	?	0.90	0.18	楕円形 たらい状	1 7.5YR4/6褐色砂質土 2 7.5YR3/2黒褐色砂質土		南西部は調査区域外
SK-26 20図1	S13E50 S13E51	1.65	?	0.64	不定円形 不整形	1 10YR2/2 黒褐色シルト 2 7.5YR3/3暗褐色シルト 3 7.5YR3/4暗褐色シルト		北側を水道管に切られる
SK-27 20図6	S15E58 S16E58	1.36	0.97	0.21	不整楕円形 浅いすり鉢状	7.5YR3/3暗褐色砂質土 （礫混り）	壺、甕（後期箱清水式期）（第30図-1）	
SK-28 20図5	S11E57 S11E58 S12E57 S12E58	4.35	3.85	1.20	円形 すり鉢状	1 10YR2/2 黒褐色シルト （小石混り） 2 10YR1.7/1 黒粘土 3 7.5YR3/4暗褐色砂質土 4 10YR2/3 黒褐色シルト 5 7.5YR3/3暗褐色砂質土 6 7.5YR2/1黒粘土 7 7.5YR3/2黒褐色シルト （褐色砂混り） 8 7.5YR3/2黒褐色粘質土 2 層と4 層の間に礫が挟まっている	壺、甕等（弥生後期） 椀（磁器） 凹石 （第30図-2.3）	西側一部攪乱を受けている
SK-29 20図9	S18E60	1.83	1.82	0.38	不整円形 たらい状	1 7.5YR3/4暗褐色シルト （砂利混り） 2 7.5YR4/4褐色砂質土 （砂利混り） 3 7.5YR3/2暗褐色砂質土 4 7.5YR4/2灰褐色シルト （炭化物、小石混り）	壺、甕（後期箱清水式期）　縄文土器	
SK-30 20図6	S17E58 S17E59	1.67	1.72	0.20	円形 たらい状	7.5YR3/3暗褐色砂質土 （石混り）	壺、甕（後期箱清水式期）　（第30図-4～7）	
SK-31 19図6	S16E59 S17E59	0.80	0.73	0.20	不整形 たらい状	10YR3/4 暗褐色砂質土 （褐色土ブロック混り）	壺、甕（後期箱清水式期）　（第30図-8）	南側一部攪乱を受けている
SK-32 20図8	S14E62	1.20	0.83	0.53	楕円形 不定形	7.5YR2/3極暗褐色砂質土		P-63に切られる
SK-33 20図8	S13E62	1.20	1.15	0.33	円形 不定形	7.5YR3/3暗褐色シルト （褐色土混り）		

第６表　土坑観察表（１）

遺構No.	位置	長径	短径	深さ	平面形態 断面形態	覆土	遺物	備考
SK-34 20図8	S10E62 S10E63	1.75	1.42	0.30	不整楕円形 不定形	7.5YR3/4暗褐色シルト		
SK-35 20図5	S12E59 S12E60 S13E59 S13E60	1.63	1.00	0.10	楕円形 たらい状	10YR2/2 黒褐色砂質土 （小石混り）	壺、甕（後期箱清水式期）	
SK-36 20図4	S6E57	1.00	?	0.54	隅丸方形 不整形	1 7.5YR3/1黒褐色砂質土 （炭化物混り） 2 7.5YR2/3極暗褐色シルト （褐色ブロック混り）		西側を排水管溝に切られる
SK-37 20図6	S18E59	1.84	1.20	0.25	楕円形 掘込みを持つ	1 7.5YR3/3暗褐色砂質土 2 10YR6/6 明黄褐色砂質土		
SK-38 20図8	S11E61 S12E61	1.47	?	0.15	不整円形 たらい状	1 10YR2/1 黒砂質土 2 10YR3/3 暗褐色砂質土		暗渠に切られる
SK-39 20図7	S8E60 S9E60	1.06	0.86	0.08	長方形 たらい状	1 7.5YR3/4暗褐色シルト 2 7.5YR2/3極暗褐色砂質土		
SK-40 20図9	S14E60 S15E60	2.30	?	0.60	楕円形 不定形	1 7.5YR3/4暗褐色砂質土 2 7.5YR2/2黒褐色砂質土 3 10YR3/3 暗褐色砂質土 （炭化物混り） 4 10YR4/4 褐色砂質土		暗渠に切られる
SK-41 20図5	S11E59	0.98	0.86	0.24	隅丸長方形 たらい状	7.5YR2/3極暗褐色砂質土		
SK-42 20図9	S15E62 S16E62	1.83	?	0.52	楕円形？ 不定形	1 7.5YR4/4褐色砂質土 2 7.5YR3/3暗褐色砂質土		東側調査区域外
SK-43 20図1	S11E50 S11E51	1.35	0.98	0.68	不定円形 不整形	1 7.5YR3/2黒褐色砂質土 2 7.5YR4/3褐色砂質土		東側を水路に切られる
SK-44 20図3	S18E56 S18E57	1.50	?	0.40	楕円形？ たらい状	10YR2/3 黒褐色砂質土 （褐色ブロック混り）	壺、甕（後期箱清水式期）	南側調査区域外
SK-45 20図3	S18E55 S18E56	1.34	?	0.43	楕円形？ たらい状	10YR2/3 黒褐色砂質土 （褐色ブロック混り）	壺、甕（後期箱清水式期）（第30図-9）	南側調査区域外
SK-46 20図3	S17E55 S18E55	1.15	?	0.40	楕円形 たらい状	1 10YR2/3 黒褐色砂質土 （褐色ブロック混り） 2 7.5YR3/2黒褐色砂質土	壺、甕（後期箱清水式期）	南側調査区域外
SK-47 20図6	S17E59 S18E59	1.60	?	0.42	不整楕円形 すり鉢状	1 10YR2/3 黒褐色砂質土 2 10YR3/4 暗褐色砂質土 3 10YR3/3 暗褐色砂質土 （炭化物、礫混り） 4 10YR4/6 褐色砂質土	壺、甕（後期箱清水式期）（第29図-10）	暗渠に切られる

第７表　土坑観察表（２）

通No.	層No.	長軸	短軸	深さ	覆　　土	備　　考
35	20-1	0.42	0.40	0.28	7.5YR2/2黒褐色砂質土	甕破片
36	20-1	0.62	0.59	0.19	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	P-38を切る
37	20-1	0.64	0.62	0.11	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SK-26 を切る
38	20-1	?	0.42	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
39	20-1	0.60	0.58	0.50	1 7.5YR2/2黒褐色砂質土　2 7.5YR4/3褐色砂質土 3 7.5YR3/3暗褐色砂質土	
40	20-1	0.33	0.28	0.16	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
41	20-1	0.38	?	0.12	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
42	20-1	0.50	?	0.14	7.5YR3/4暗褐色砂質土	
43	20-1	0.40	0.38	0.16	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	壺または甕破片　P-42を切る
44	20-2	0.28	0.25	0.06	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
46	20-2	0.40	0.38	0.13	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
47	20-2	0.80	0.70	0.11	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
48	20-6	0.40	0.37	0.22	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	赤彩土器破片　SB-79 を切る
49	20-6	0.36	0.28	0.12	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
50	20-6	0.32	0.30	0.26	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-79 を切る
51	20-6	0.42	0.30	0.08	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-79 を切る
52	20-5	0.28	0.25	0.21	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
53	20-5	0.22	0.19	0.07	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
54	20-6	0.26	0.22	0.22	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
55	20-6	0.28	0.28	0.15	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	甕破片　SB-82 を切る
56	20-6	0.35	0.32	0.19	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	赤彩土器破片　SB-82 を切る
57	20-6	0.55	0.49	0.09	7.5YR3/4暗褐色砂質土	壺、甕破片
58	20-6	0.31	0.28	0.19	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
59	20-6	0.30	0.28	0.25	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
60	20-9	0.27	0.23	0.20	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
61	20-9	0.68	0.43	0.18	7.5YR4/3褐色砂質土（小石混り）	
62	20-8	0.72	?	0.22	10YR2/2 黒褐色砂質土	
63	20-8	?	0.48	0.16	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
64	20-8	?	0.36	0.25	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
65	20-8	0.30	0.28	0.20	7.5YR2/3極暗褐色シルト	P-66を切る
66	20-8	0.46	0.40	0.16	7.5YR3/3暗褐色砂質土	P-65に切られる
67	20-8	0.40	0.40	0.14	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
68	20-8	?	0.46	0.17	7.5YR3/3暗褐色砂質土	P-69に切られる
69	20-8	0.46	0.35	0.31	7.5YR3/3暗褐色シルト	甕破片　P-68を切る
70	20-8	0.36	0.34	0.08	7.5YR3/4暗褐色砂質土	
71	20-6	0.29	0.28	0.20	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
72	20-8	0.40	0.38	0.13	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
73	20-8	0.26	0.22	0.17	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
74	20-8	0.27	0.24	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
75	20-8	0.22	0.20	0.12	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
76	20-8	0.22	0.21	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
77	20-8	0.23	0.22	0.07	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
78	20-5	0.54	0.45	0.14	7.5YR2/2黒褐色砂質土	

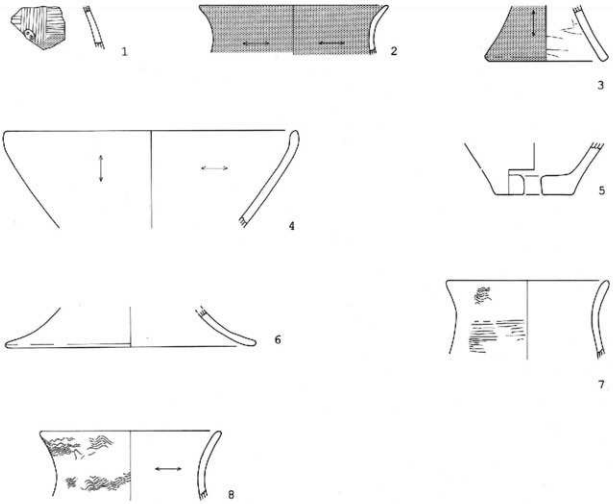
第８表　ピット観察表（１）

遺構No.	層No.	長軸	短軸	深さ	覆　　土	備　　考
79	20-5	0.90	0.78	0.22	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土　2 7.5YR4/3褐色砂質土	壺、甕破片　(第34図-1)
80	20-4	0.31	0.31	0.18	7.5YR3/2黒褐色砂質土（褐色土混り）	P-81に切られる
81	20-4	?	0.45	0.31	7.5YR3/2黒褐色砂質土（褐色土混り）	P-80を切る
82	20-7	0.67	0.65	0.18	10YR2/3 黒褐色砂質土	壺または甕破片
83	20-7	0.44	0.42	0.15	7.5YR3/3暗褐色砂質土	SD-02 を切る
84	20-7	0.70	0.62	0.22	7.5YR3/4暗褐色砂質土	SD-02 を切る
85	20-7	0.50	0.47	0.08	7.5YR3/2黒褐色砂質土	
86	20-7	?	0.58	0.22	1 10YR2/2 黒褐色砂質土　2 7.5YR3/4暗褐色シルト	
87	20-7	0.63	0.54	0.40	1 10YR2/3 黒褐色砂質土　2 10YR1.7/1 黒粘土	
88	20-7	0.42	0.38	0.20	10YR2/3 黒褐色砂質土	P-89を切る
89	20-7	0.71	0.50	0.21	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土　2 7.5YR3/4暗褐色砂質土	P-88に切られる
90	20-7	0.70	0.40	0.21	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土　2 7.5YR4/4暗褐色砂質土	
91	20-7	0.85	0.78	0.12	10YR2/2 黒褐色砂質土	
92	20-7	1.04	0.68	0.18	10YR3/3 暗褐色砂質土	
93	20-7	1.00	0.60	0.10	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
94	20-4	0.71	0.41	0.13	7.5YR3/4暗褐色砂質土	
95	20-4	0.85	0.78	0.27	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土　2 7.5YR3/4暗褐色砂質土	
96	20-8	?	0.52	0.12	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
97	20-8	0.24	0.20	0.11	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
98	20-2	?	0.25	0.13	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	土器片
99	20-6	0.22	0.22	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	壺または甕破片
100	20-6	0.25	0.24	0.23	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	甕破片　SB-82を切る
101	20-8	0.22	0.20	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
102	20-8	?	0.50	0.12	7.5YR3/4暗褐色砂質土（小石混り）	
103	20-8	0.78	0.52	0.20	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土 2 7.5YR4/3褐色砂質土	
104	20-8	0.28	0.22	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
105	20-7	0.52	0.50	0.11	10YR2/3 黒褐色砂質土	
106	20-7	0.50	0.50	0.12	1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土　2 7.5YR4/4暗褐色砂質土	
107	20-7	0.27	0.26	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
108	20-8	0.88	0.80	0.26	7.5YR3/3暗褐色（褐色混り）砂質土	SD-02 を切る
109	20-5	0.22	0.21	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
110	20-5	0.22	0.20	0.08	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
111	20-5	0.18	0.18	0.08	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
112	20-5	0.24	0.17	0.21	1 7.5YR3/3暗褐色砂質土　2 7.5YR4/4褐色砂質土	
113	20-5	0.30	0.25	0.14	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
114	20-5	0.23	0.21	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
115	20-5	0.68	0.60	0.20	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
116	20-4	?	0.44	0.12	7.5YR2/2極暗褐色砂質土	
117	20-4	0.18	0.18	0.20	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
118	20-4	0.38	0.22	0.17	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
119	20-4	0.50	0.48	0.14	1 7.5YR3/3暗褐色砂質土　2 7.5YR2/2黒褐色砂質土	
120	20-4	0.27	0.23	0.10	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
121	20-6	0.21	0.20	0.13	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	

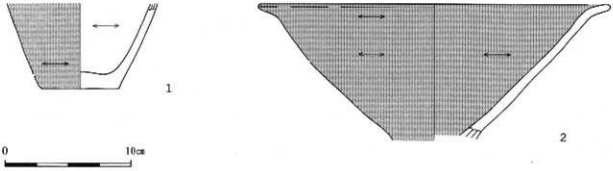
第９表　ピット観察表（２）

遺構No.	層No.	長軸	短軸	深さ	覆　　土	備　　考
122	20-6	0.21	0.18	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	土器片
123	20-6	0.22	0.21	0.29	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
124	20-9	0.71	0.54	0.16	7.5YR3/3暗褐色砂質土	壺、甕破片
125	20-9	0.24	0.23	0.08	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
126	20-9	0.23	0.22	0.12	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
127	20-9	0.20	0.18	0.07	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
128	20-9	0.23	0.22	0.06	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
129	20-9	?	0.29	0.15	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SK-40 を切る
130	20-9	0.24	0.234	0.12	7.5YR3/4暗褐色砂質土（極暗褐色粘土混り）	SK-40 を切る
131	20-9	0.27	0.26	0.13	7.5YR3/4暗褐色砂質土（極暗褐色粘土混り）	SK-40 を切る
132	20-6	0.21	0.19	0.16	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
133	20-5	0.23	0.22	0.16	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
134	20-5	0.24	0.18	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
135	20-5	0.28	0.20	0.08	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
136	20-5	0.64	0.50	0.08	7.5YR4/6褐色砂質土	
137	20-8	0.20	0.20	0.06	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
138	20-8	0.30	0.26	0.06	7.5YR3/4暗褐色砂質土	
139	20-7	0.68	0.44	0.42	7.5YR2/2黒褐色シルト（小石混り）	
140	20-7	0.88	0.87	0.40	1 7.5YR2/2黒褐色シルト　2 7.5YR3/3暗褐色シルト	
142	20-1	0.42	0.39	0.38	7.5YR3/3暗褐色砂質土	
143	20-1	0.72	?	0.30	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
144	20-1	0.42	0.38	0.46	1 7.5YR2/2黒褐色砂質土（焼土混り） 2 7.5YR2/2黒褐色砂質土	壺破片　（第34図-2）
145	20-1	0.26	0.24	0.26	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SD-01 を切る
146	20-1	0.46	0.38	0.06	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SD-01 を切る
147	20-1	0.33	0.32	0.17	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SD-01 を切る
148	20-1	0.33	0.32	0.31	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SD-01 を切る
149	20-1	0.22	0.21	0.20	10YR2/2 黒褐色砂質土	SD-01 を切る
150	20-2	?	0.24	0.16	7.5YR3/3暗褐色砂質土	SD-01 を切る
151	20-2	?	0.38	0.45	7.5YR3/3暗褐色砂質土	SD-01 を切る
152	20-4	0.62	0.50	0.14	7.5YR3/3暗褐色砂質土（褐色土ブロック混り）	
153	20-8	0.22	0.20	0.12	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
154	20-3	1.20	0.48	0.20	7.5YR3/3暗褐色砂質土	SB-81 を切る
155	20-3	0.29	0.23	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	
157	20-3	0.29	0.24	0.19	7.5YR3/3暗褐色砂質土（明褐色土ブロック混り）	土器片　SB-81 を切る
158	20-3	0.50	0.40	0.10	1 7.5YR3/3暗褐色砂質土　2 7.5YR4/3褐色砂質土	SB-81 を切る
159	20-5	0.33	0.31	0.13	7.5YR2/2黒褐色砂質土	
160	20-3	0.19	0.18	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-81 を切る
161	20-3	0.24	0.22	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-81 を切る
162	20-3	0.20	0.17	0.10	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-81 を切る
163	20-5	0.32	0.30	0.09	7.5YR2/3極暗褐色砂質土	SB-79 を切る
164	20-6	0.84	0.73	0.22	10YR3/2 黒褐色砂質土	高坏、甕破片　SB-82 を切る

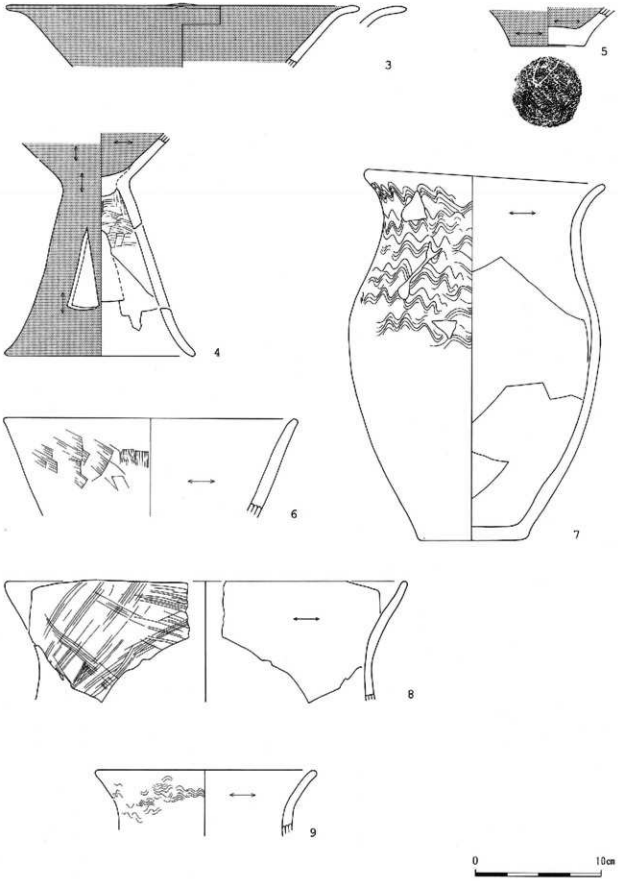
第１０表　ピット観察表（３）



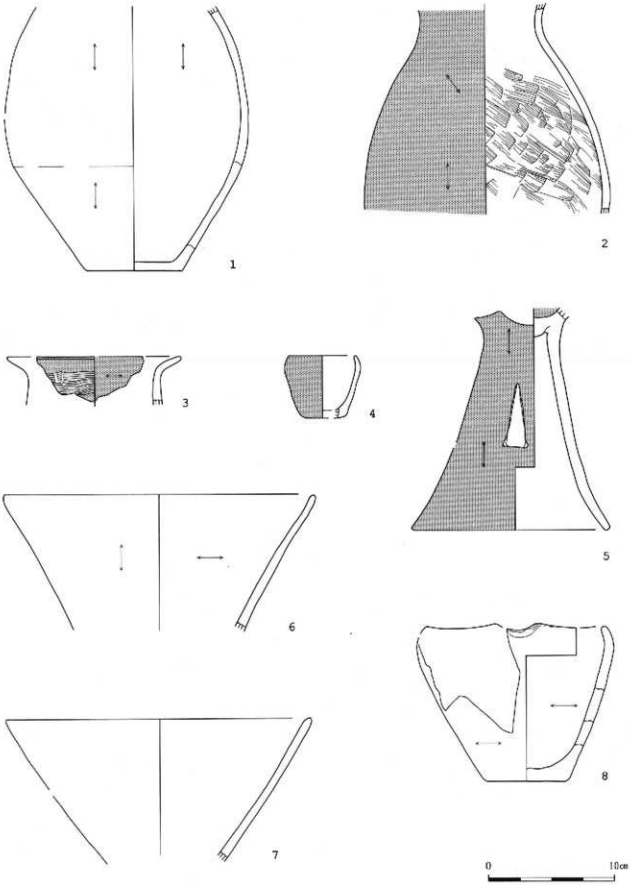
第２１図　ＳＢ－７５土器実測図



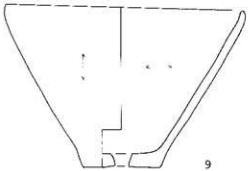
第２２図　ＳＢ－７６土器実測図（１）

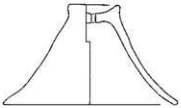


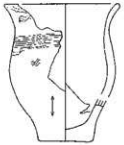
第２２図　ＳＢ－７６土器実測図（２）

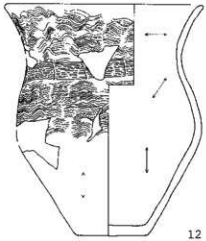


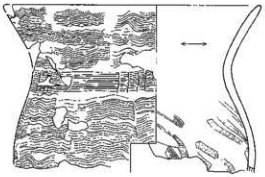
第２３図　ＳＢ－７７土器実測図（１）

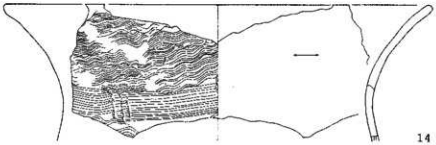


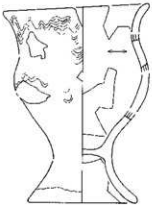




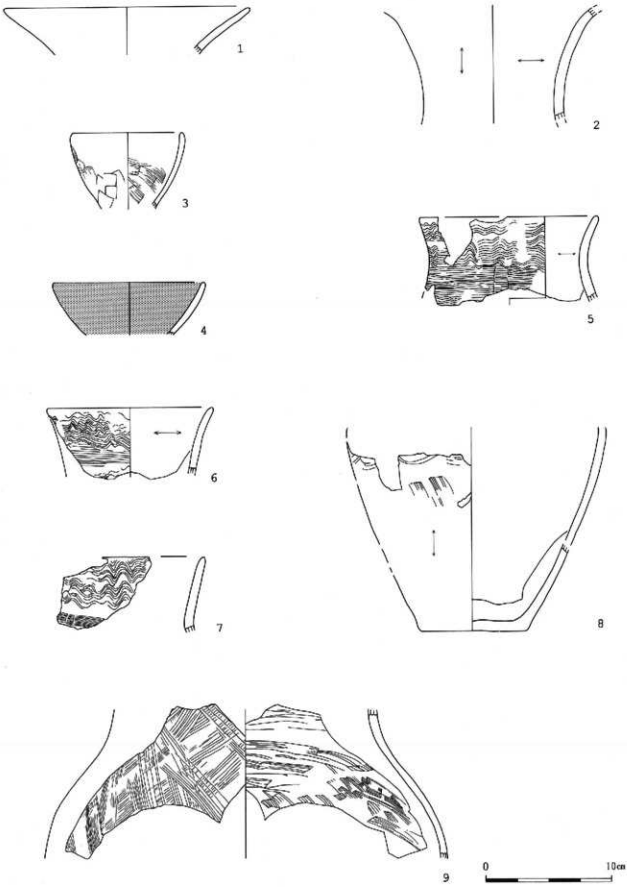




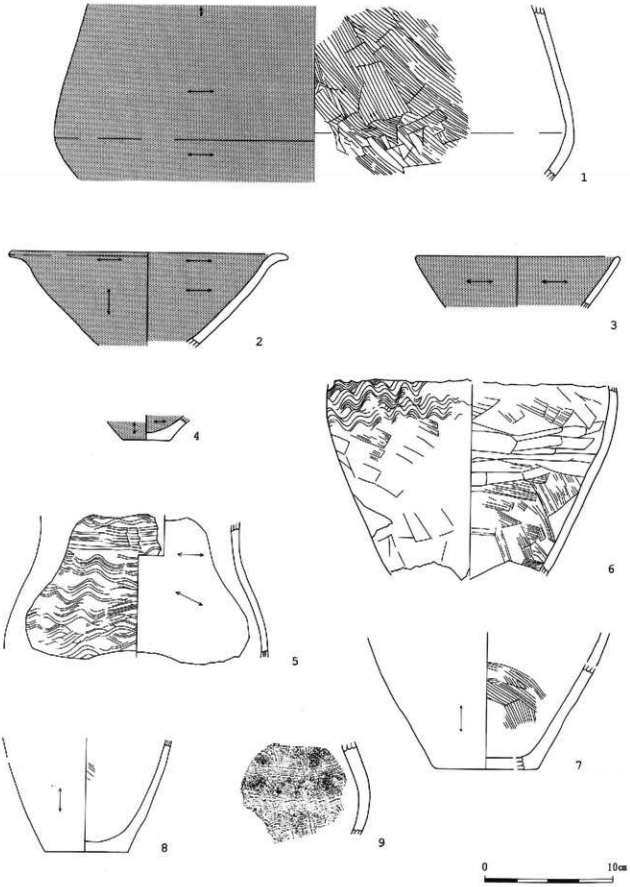




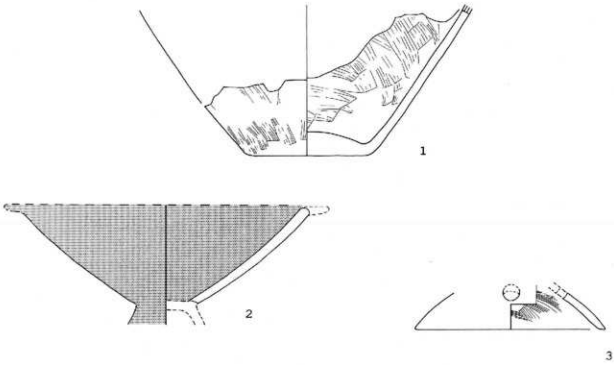
第２３図　ＳＢ－７７土器実測図（２）



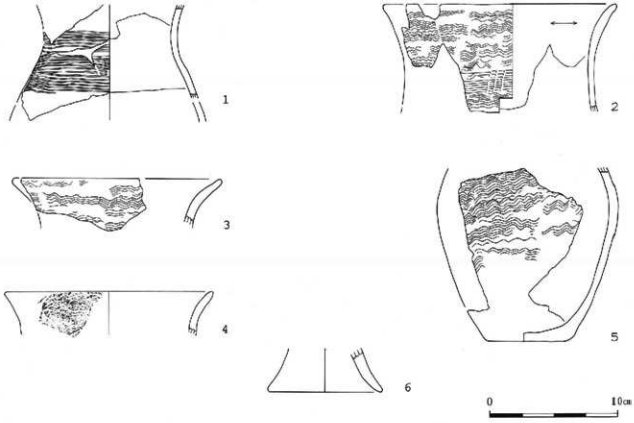
第２４図　ＳＢ－７８土器実測図



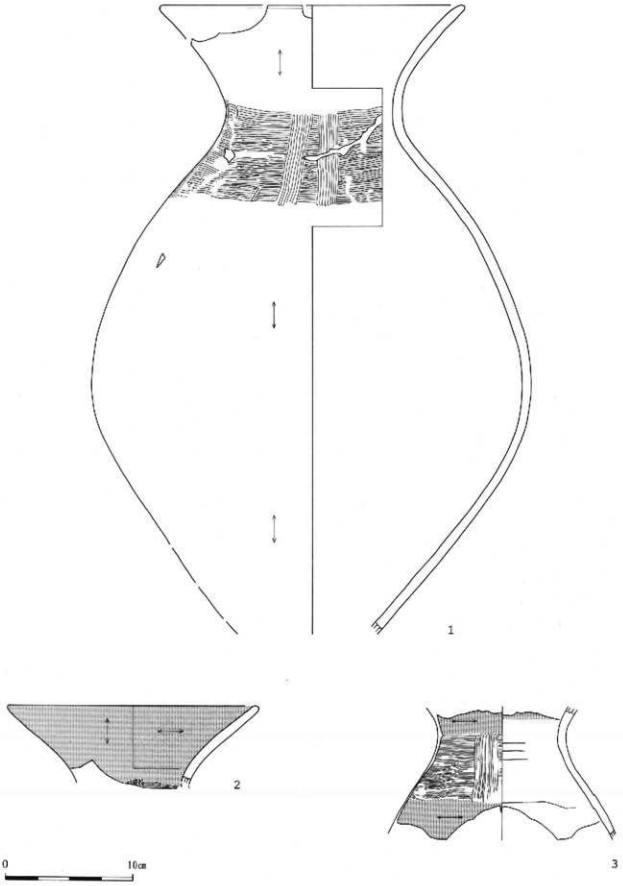
第２５図　ＳＢ－７９土器実測図



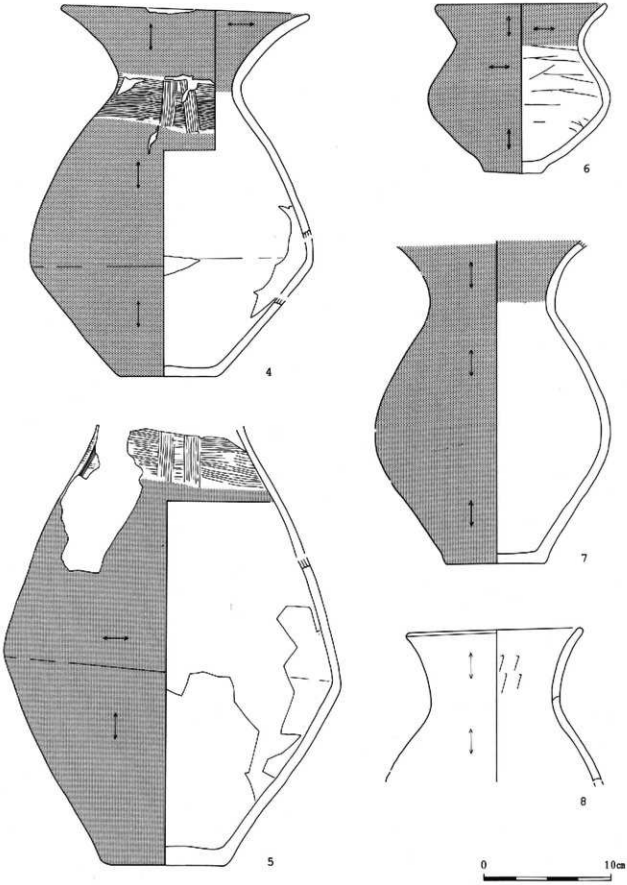
第２６図　ＳＢ－８０土器実測図



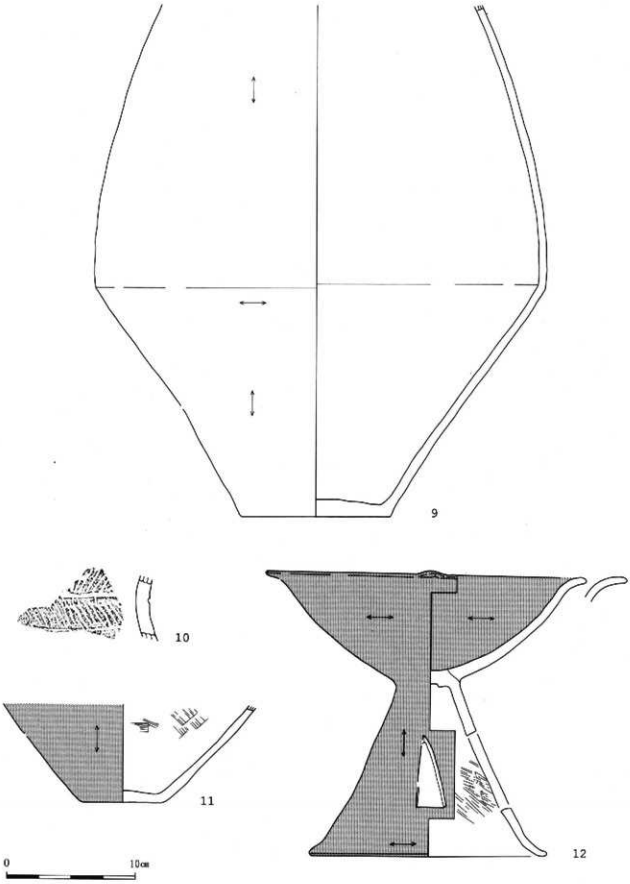
第２７図　ＳＢ－８１土器実測図



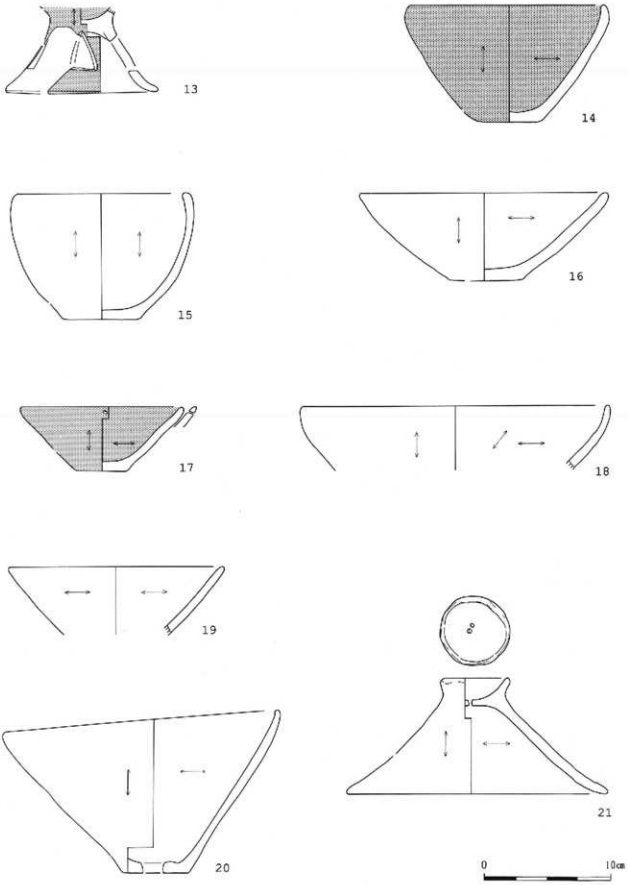
第２８図　ＳＢ－８２土器実測図（１）



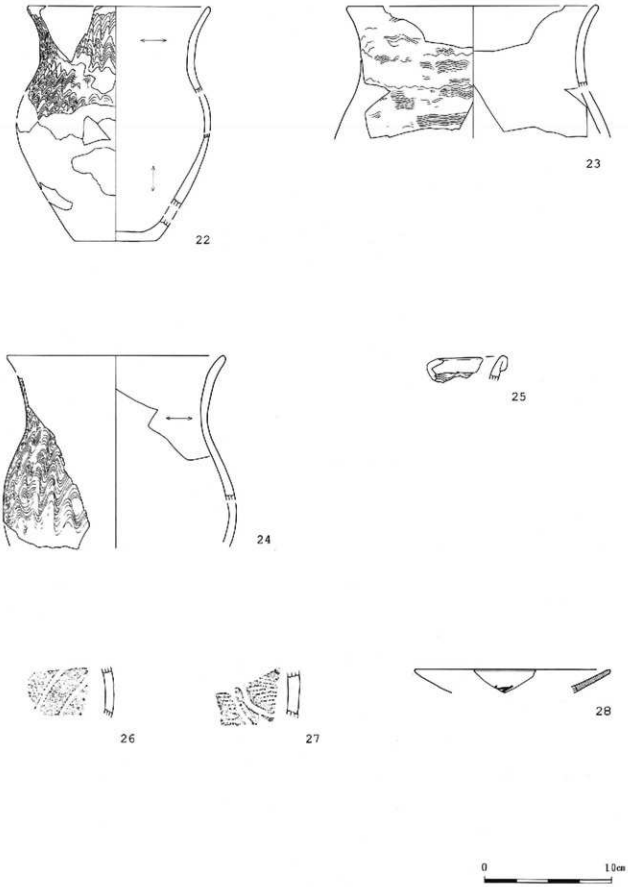
第２８図　ＳＢ－８２土器実測図（２）



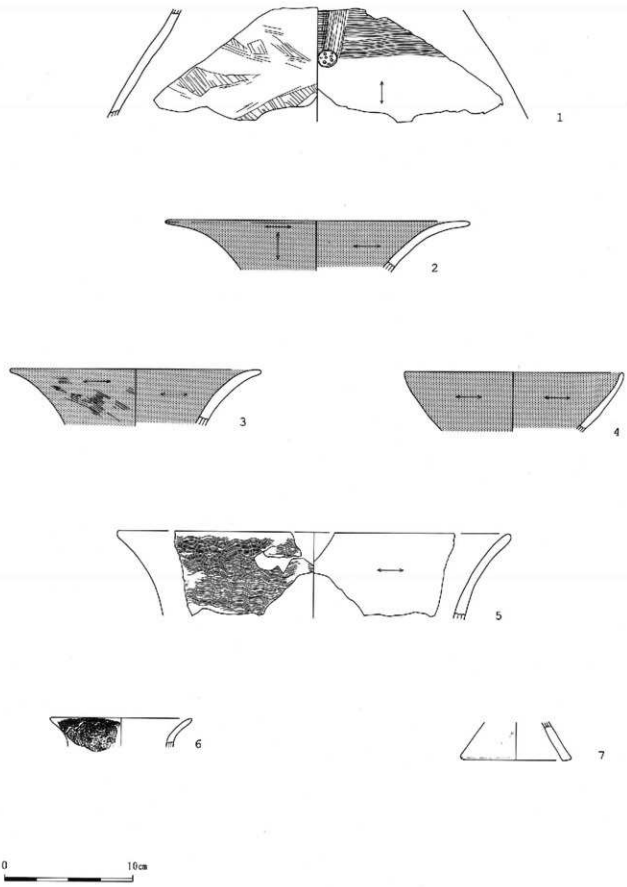
第２８図　ＳＢ－８２土器実測図（３）



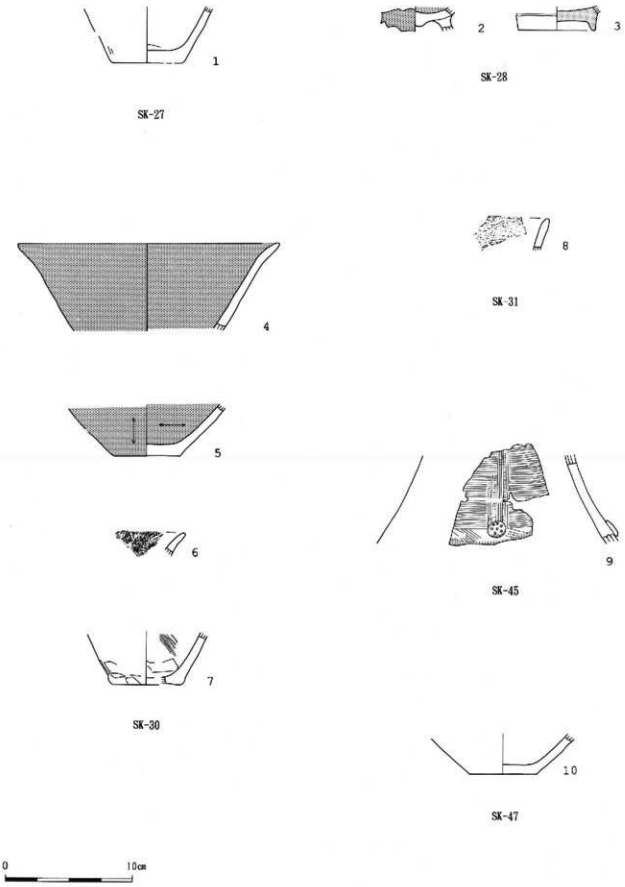
第２８図　ＳＢ－８２土器実測図（４）



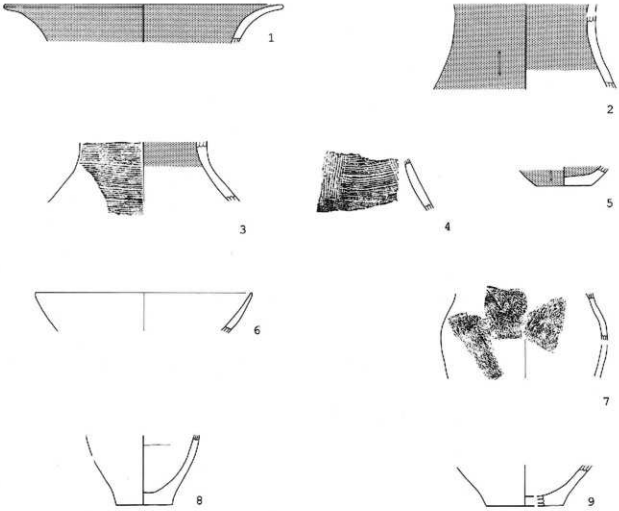
第２８図　ＳＢ－８２土器実測図（５）



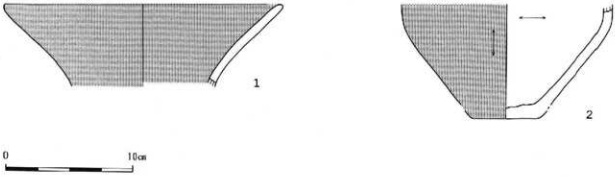
第２９図　ＳＢ－８３土器実測図



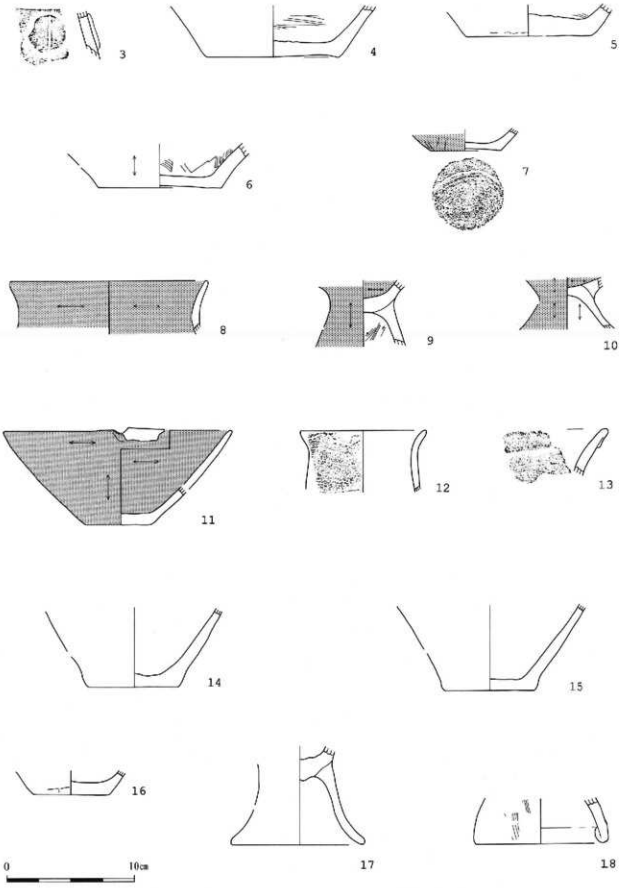
第３０図　ＳＫ土器実測図



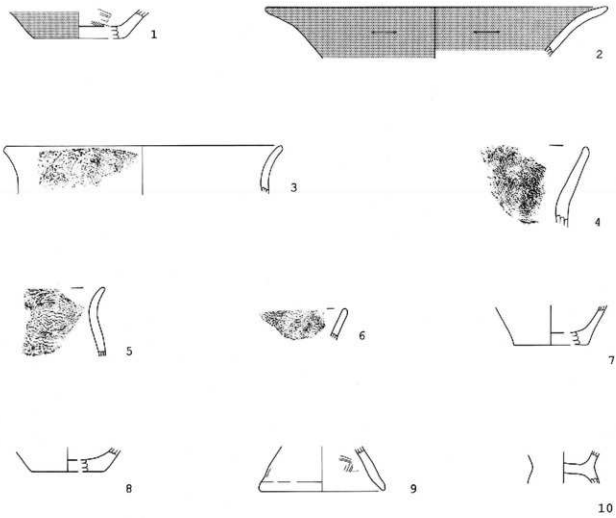
第３１図　ＳＤ－０１土器実測図



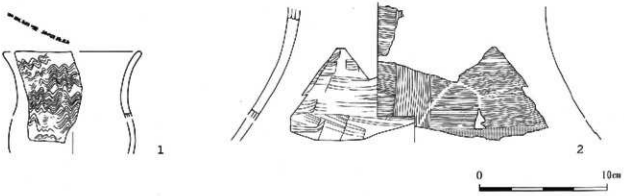
第３２図　ＳＤ－０２土器実測図（１）



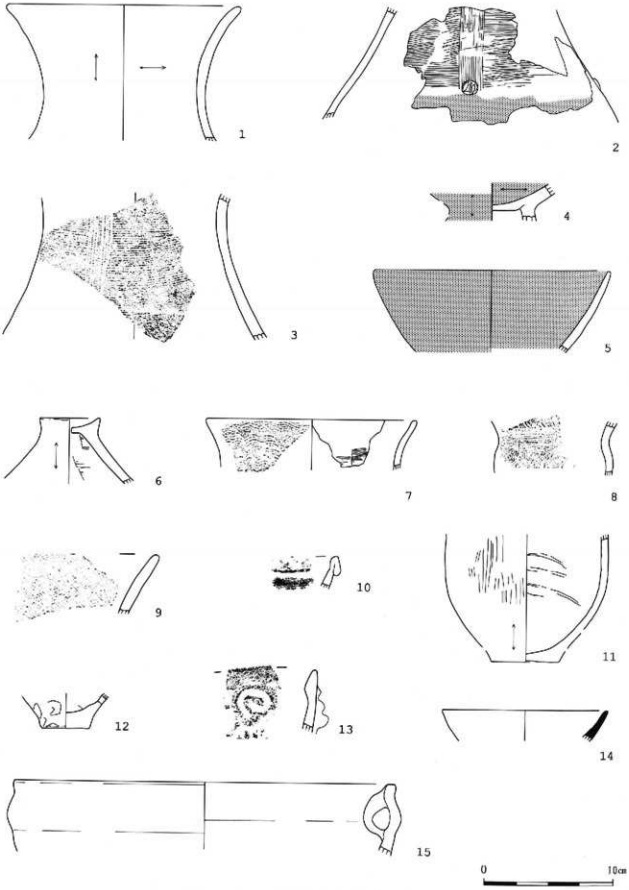
第３２図　ＳＤ－０２土器実測図（２）



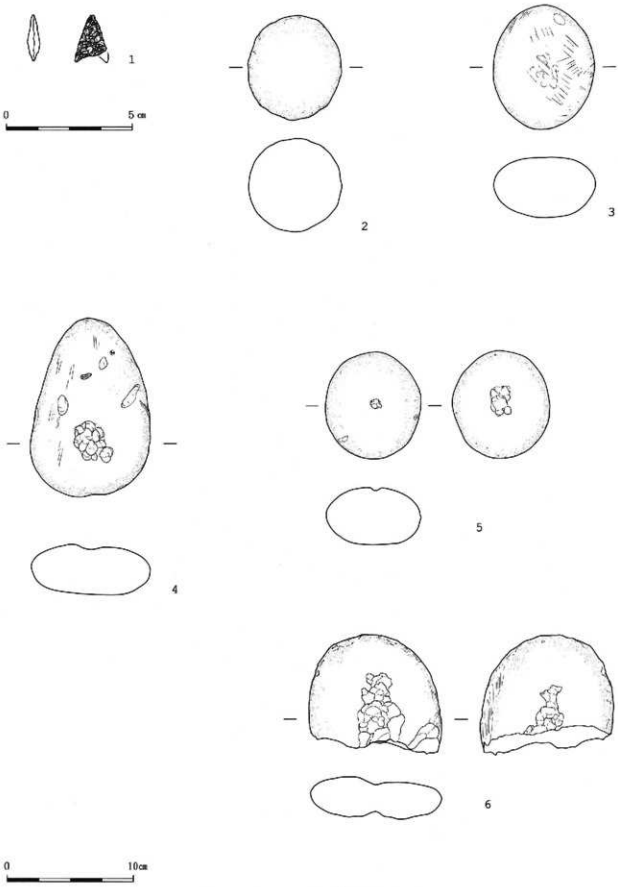
第３３図　ＳＤ－０３土器実測図



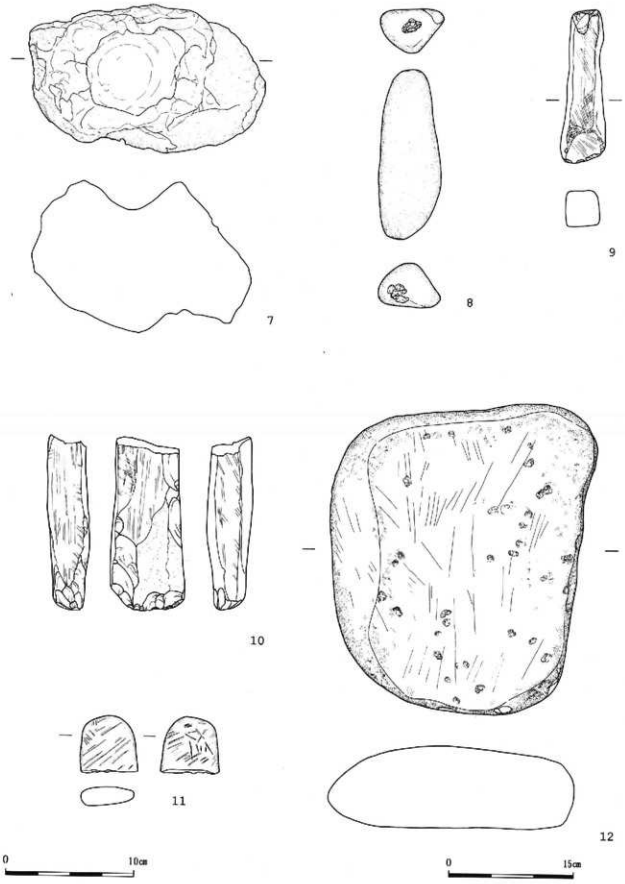
第３４図　ピット土器実測図



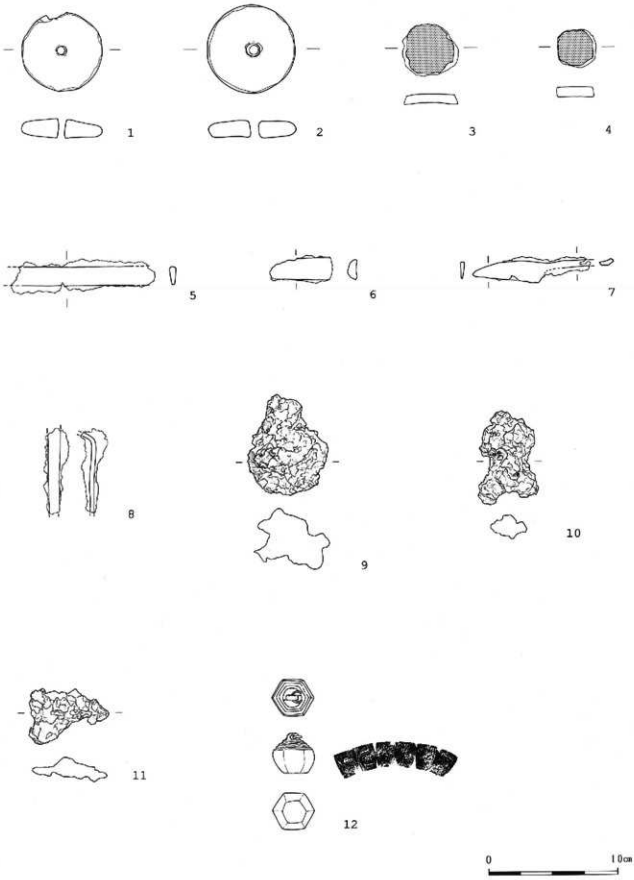
第３５図　遺構外土器実測図



第３６図　石器実測図（１）



第３６図　石器実測図（２）



第３７図　紡錘車・土製円盤その他実測図

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-75 21図-1	壺 弥生	口径 — 残高 3.4 底径 — 頸部一部	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙		(A) T字文 ボタン状貼付文 胴部赤色塗彩 (B)
SB-75 21図-2	深鉢 弥生	口径(14.3) 残高 3.9 底径 — 口縁部1/4	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/8 明赤褐 (B)2.5YR4/8 赤褐	口縁部は外反する	(A) ヨコのミガキ 赤色塗彩 (B) ヨコのミガキ 赤色塗彩
SB-75 21図-3	台付 深鉢 弥生	口径 — 残高 4.4 裾径 9.6 脚部一部	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR4/8 赤褐 (B)5YR5/6 明赤褐	脚部は直線的に開く	(A) タテのミガキ 赤色塗彩 (B) 刷毛調整 ナデ
SB-75 21図-4	鉢 弥生	口径(23.0) 残高 7.7 底径 — 口縁部1/5	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	口縁部は内弯する	(A) 体部ﾀﾃのミガキ 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ (B) 体部ﾖｺのミガキ 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 鉢或は甕
SB-75 21図-5	甕 弥生	口径 — 残高 4.2 底径 6.3 底部のみ	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR5/6 明赤褐	底部に穴を1つ持つ	(A) ナデ ケズリ (B) ナデ ケズリ ミガキ
SB-75 21図-6	壷 弥生	脚径 — 残高 3.2 裾径(19.2) 口縁部1/11	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/4 にぶい褐 (B)7.5YR4/2 灰褐	大きく開く裾部	(A) 刷毛調整の後ナデ (B) ナデ
SB-75 21図-7	壷 弥生	口径(12.6) 残高 6.3 底径 — 口縁部1/10	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR2/2 極暗赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	ゆるく外反する口縁部	(A) 頸部に簾状文 口縁部と胴部に波状文 (B) 外面が著しく剥落する
SB-75 21図-8	壷 弥生	口径(14.1) 残高 5.5 底径 — 口縁部1/5	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR3/1 黒褐 (B)5YR5/6 明赤褐	外反する口縁部	(A) 波状文を施す (B) ヨコのミガキ 外面が著しく剥落する
SB-76 22図-1	深鉢 弥生	口径 — 残高 6.8 底径 6.1 底部完存	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)5YR6/6 橙	平底	(A) ヘラミガキ 赤色塗彩 一部煤付着 (B) ヘラミガキ
SB-76 22図-2	高坏 弥生	口径(27.6) 残高 10.6 裾径 — 坏部1/3	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤	口縁部は大きく外反する	(A) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩 (B) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-76 22図-3	高坏 弥生	口径(27.4) 残高 4.9 裾径 — 口縁部1/7	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤	口縁部は外反する 口唇部に山形突起を有する	(A) ヘラミガキ 赤色塗彩 (B) ヘラミガキ 赤色塗彩
SB-76 22図-4	高坏 弥生	口径 — 残高 17.7 裾径 14.7 脚部ほぼ完存	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤 5YR6/6 橙	脚部は長く三角形の透かしを4ヶ所持つ	(A) タテのミガキ 赤色塗彩 (B) 坏部ヨコのミガキ 脚部刷毛調整 坏部赤色塗彩
SB-76 22図-5	鉢 弥生	口径 — 残高 3.1 底径 5.8 底部完存	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R5/6 赤 (B)10R4/6 赤	平底より立ち上がり外反ぎみの体部に移行する	(A) ヨコのヘラミガキ 底部にヘラ痕がみられる 赤色塗彩 (B) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-76 22図-6	鉢 弥生	口径(22.8) 残高 7.8 底径 — 口縁部1/6	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/4 にぶい橙 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	体部から口縁部まで直線的に立ち上がる	(A) 体部は刷毛調整とヘラケズリ 口縁部はナデ (B) ヨコのヘラミガキ 鉢或は甕
SB-76 22図-7	壷 弥生	口径 19.3 器高 29.4 底径 8.4 胴部1/4強	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR4/6 赤褐 (B)5YR4/6 赤褐	頸部のくびれは弱く、口縁径と胴部の最大径はほぼ同じ	(A) 櫛描波状文を施す (B) ヘラケズリ ヘラミガキ
SB-76 22図-8	壷 弥生	口径(32.0) 残高 9.3 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/4 にぶい橙 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	ゆるく外反する口縁部	(A) 櫛描直線文による格子目文 (B) 刷毛調整 ヘラケズリの後ヨコのヘラミガキ

第１１表　土器観察表（１）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-76 23図-9	壺 弥生	口径 17.2 残高 5.3 底径 — 口縁部5/8	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	外反する口縁部	(A) 波状文を施す (B) ヨコのヘラミガキ
SB-77 23図-1	壺 弥生	口径 — 残高 22.0 底径 7.8 胴部2/3-頸部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR4/4 褐 (B)7.5YR4/4 褐	胴下半部はゆるい鈍を持ち、ややくびれる 粘土帯積み上げ	(A) タテのヘラミガキ (B) ヘラケズリ タテのヘラミガキ
SB-77 23図-2	壺 弥生	口径 — 残高 16.7 底径 — 胴部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/4 にぶい橙 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	胴部はなで肩で頸部はすぼまる	(A) 胴部上位斜位のヘラミガキ 胴部下位タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (B) 胴毛調整
SB-77 23図-3	深鉢 弥生	口径(13.8) 残高 3.9 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR4/1 褐灰 (B)2.5YR4/4 にぶい赤褐	口縁部は屈曲して外反する	(A) ヘラミガキ 頸部櫛描直線文　赤色塗彩 (B) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-77 23図-4	ミニチュア 弥生	口径 (5.4) 器高 5.0 底径 (3.6) 口縁部-底部-半	胎：石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR4/4 にぶい赤褐 (B)5YR5/3 にぶい赤褐	口縁部は内寄する 手ずくね	(A) 体部タテのヘラミガキ 口縁部ヨコナデ　赤色塗彩 (B) 体部ヨコのヘラミガキ
SB-77 23図-5	高坏 弥生	口径 — 残高 17.1 裾径 16.0 脚部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)2.5YR5/6 明赤褐	脚部に二角形の透かしを4個有する	(A) タテのミガキ　赤色塗彩 (B) 坏部赤色塗彩 歪みが著しい
SB-77 23図-6	鉢 弥生	口径(24.8) 残高 10.8 底径 — 体部1/4	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙	直線的に開く体部 口縁部は先端で小さく内寄する	(A) 体部タテのヘラミガキ　口縁部ヨコナデ (B) 体部ヨコのヘラミガキ　口縁部ヨコナデ　付着物あり 鉢或は甑
SB-77 23図-7	鉢 弥生	口径(24.2) 残高 12.5 底径 — 口縁部-体部1/2	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙	直線的に開く体部	(A) ヨコのヘラミガキ (B) ヨコのヘラミガキ 鉢或は甑
SB-77 23図-8	片口鉢 弥生	口径 14.0 器高 12.5 底径 6.6 口縁部-底部7/8	胎：礫をわずかに含む 焼：良好 色：(A)5YR5/6 明赤褐 (B)5YR5/6 明赤褐	平底より立ち上がり直線的に開く胴部よりゆるく口縁で内寄する 口縁に片口を有する	(A) ヨコのミガキ (B) ヨコのミガキ
SB-77 23図-9	甑 弥生	口径 18.8 器高 13.0 底径 6.0 口縁部一部-歪	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙	体部は直線的に開く 口縁部は先端で小さく内寄する 底部に焼成前に1孔を穿つ	(A) 体部タテのヘラミガキ 口縁部ヨコナデ (B) 体部ヨコのヘラミガキ　口縁部ヨコナデ　付着物あり
SB-77 23図 -10	蓋 弥生	脚径 4.0 器高 8.0 裾径 13.8 脚部-鍔一部-歪	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/6 明褐 (B)7.5YR5/6 明褐	天井部に1孔を穿つ	(A) タテのヘラミガキ (B) ヘラケズリの後ヨコのヘラミガキ
SB-77 23図 -11	壺 弥生	口径 (9.2) 器高 10.9 底径 4.2 底部完-鍔-半	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/4 にぶい橙 (B)5YR6/4 にぶい橙	丸みのある胴部より外反する 口縁部に至る	(A) 櫛描波状文を施す　頸部に櫛描直線文による簾状文を施す (B) ヘラケズリ　ナデ
SB-77 23図 -12	壺 弥生	口径 15.2 器高 18.4 底径 5.6 ほぼ完存	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	平底で丸みのある胴部より外反する口縁部に至る 胴部中位に最大径を有する	(A) 胴部に等間隔の櫛波文を施す　口縁部に櫛描直線波状文を施す (B) 口縁部ヨコのミガキ　胴部から胴部はナナメのミガキ　胴部タテのミガキ
SB-77 23図 -13	壺 弥生	口径 20.3 残高 13.2 底径 — 口縁部完-胴一半	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR3/3 暗赤褐 (B)5YR3/3 暗赤褐	丸みのある胴部より外反する口縁部に至る	(A) 頸部に4連止めの櫛描波状文　口縁部と胴部に櫛描波状文 (B) 口縁部にヨコのヘラミガキ 胴部に刷毛調整
SB-77 23図 -14	壺 弥生	口径(33.2) 残高 11.3 底径 — 口縁部一部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR4/3 にぶい赤褐 (B)5YR4/4 にぶい赤褐	外反する口縁部	(A) 頸部に3連止めの波状文を施す　口縁部と胴部に波状文 (B) ケズリの後ヨコのヘラミガキ
SB-77 23図 -15	台付甕 弥生	口径 11.3 器高 15.8 裾径 8.5 ほぼ完存	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙	甕形の体部に短い脚部を有する	(A) 櫛描波状文を施す (B) 体部ヘラミガキ　脚部ナデ

第１２表　土器観察表（２）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-77 23図 -16	甕 弥生	口径 — 残高 6.8 底径 6.0 底部2/3~脚	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10YR5/2灰黄褐 (B)5YR6/6 橙	平底	(A) 櫛描波状文 ヘラケズリ (B) ヘラケズリ
SB-78 24図-1	壺 弥生	口径(19.2) 残高 3.7 底径 — 口縁部1/5	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/3 にぶい褐 (B)7.5YR5/3 にぶい褐	外反する口縁部	(A) 刷毛調整 ヘラケズリの後ヘラミガキ (B) ヘラミガキ
SB-78 24図-2	壺 弥生	口径 — 残高 9.4 底径 — 頸部1/2	胎：黒雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	外反する	(A) ヘラケズリの後ヘラミガキ (B) ヘラケズリの後ヘラミガキ
SB-78 24図-3	壺 弥生	口径(8.7) 残高 6.1 底径 — 口縁部~頸1/6	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR4/2 灰褐 (B)5YR5/4 にぶい赤褐	口縁部は内寄する	(A) 刷毛調整 ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ (B) 刷毛調整 ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ
SB-78 24図-4	鉢 弥生	口径(11.8) 残高 4.2 底径 — 口縁部1/6	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤	体部はゆるやかに内寄する	(A) ヘラミガキ 赤色塗彩 (B) ヘラミガキ 赤色塗彩 鉢或は高坏坏部
SB-78 24図-5	甕 弥生	口径(14.2) 残高 6.5 底径 — 口縁部1/4	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/3 にぶい褐 (B)5YR5/4 にぶい赤褐	口縁部は緩やかに外反する	(A) 波状文を施す 頸部には2連止めの簾状文を施す (B) ヨコのヘラミガキ
SB-78 24図-6	甕 弥生	口径(12.2) 残高 5.5 底径 — 口縁部1/4	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/4 にぶい褐 (B)7.5YR5/4 にぶい褐	ゆるく外反する口縁部	(A) 頸部櫛描直線文による簾状文 口縁部と胴部に波状文 (B) ヨコのヘラミガキ
SB-78 24図-7	甕 弥生	口径 — 残高 6.0 底径 — 口縁部~胴	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR4/2 灰褐 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	外反する口縁部	(A) 波状文、簾状文が施される (B) 刷毛調整
SB-78 24図-8	甕 弥生	口径 — 残高 16.2 底径 8.3 胴部~底部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR5/6 明赤褐 (B)5YR5/4 にぶい赤褐		(A) 胴部櫛描波状文 胴部下位刷毛調整の後杵のヘラミガキ (B) ヘラケズリの後ヘラミガキ
SB-78 24図-9	甕 弥生	口径 — 残高 11.7 底径 — 胴部~部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/4 にぶい橙 (B)5YR6/4 にぶい橙	張りのある胴部	(A) 櫛描直線文による格子目文を施す (B) 刷毛調整 ヘラケズリ ミガキ
SB-79 25図-1	壺 弥生	口径 — 残高 9.0 底径 — 胴部~部	胎：礫、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR5/6 明赤褐 (B)7.5YR7/6 橙	イチジク形の胴部	(A) 胴部上位タテのミガキ 下位ヨコのミガキ 赤色塗彩 (B) 刷毛調整
SB-79 25図-2	高坏 弥生	口径(21.4) 残高 7.5 脚径 — 坏部~部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤	口縁部外反する	(A) タテのヘラミガキ 口縁部ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩 (B) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-79 25図-3	鉢 弥生	口径(16.0) 残高 4.1 底径 — 口縁部~部	胎：細砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/4 にぶい赤褐 (B)2.5YR5/4 にぶい赤褐	直線的に開く体部	(A) ヨコのミガキ 赤色塗彩 (B) ヨコのミガキ 赤色塗彩 鉢或は高坏坏部
SB-79 25図-4	鉢 弥生	口径 — 残高 2.0 底径 3.7 底部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)10R4/6 赤 (B)10R4/6 赤	小型	(A) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (B) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-79 25図-5	甕 弥生	口径 — 残高 11.0 底径 — 胴部~部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR3/3 暗褐 (B)5YR5/6 明赤褐		(A) 波状文を施した後6条の簾状文を施す (B) ヘラケズリの後ヘラミガキ
SB-79 25図-6	甕 弥生	口径 — 残高 15.1 底径 — 胴部~部	胎：礫、石英、雲母、粗砂粒含 焼：良好 色：(A)7.5YR6/4 にぶい橙 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	丸みのある胴部	(A) ヘラケズリ、刷毛調整の後櫛描波状文を施す (B) 刷毛調整とヘラケズリ

第１３表　土器観察表（３）

出土地点 PGNo.NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-79 25図-7	甕 弥生	口径 — 残高 10.8 底径 (8.0) 底部—胴一部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)2.5YR5/6 明赤褐 (内)7.5YR3/2 黒褐	平底より立ち上がり直線的に開く胴部に移行する	(外) タテのケズリ タテのヘラミガキ (内) 刷毛調整
SB-79 25図-8	甕 弥生	口径 — 残高 9.0 底径 6.6 底部—胴部	胎：雲、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR4/6 赤褐 (内)5YR6/4 にぶい橙	平底より立ち上がり、胴部は直線的に開く	(外) タテのヘラケズリの後タテのヘラミガキ (内) 刷毛調整
SB-79 25図-9	甕 弥生	口径 — 残高 7.3 底径 — 一部	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)7.5YR3/2 黒褐 (内)5YR4/6 赤褐	胴部に丸みをもつ	(外) 櫛描波状文 (内) ヨコのヘラミガキ
SB-80 26図-1	壺 弥生	口径 — 残高 12.0 底径 9.5 底部完一部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR6/6 橙 (内)5YR6/6 橙	平底より立ち上がり、胴部下部は直線的に開く	(外) タテの刷毛調整 (内) 斜めの刷毛調整及びナデ
SB-80 26図-2	高坏 弥生	口径 — 残高 7.3 裾径 — 坏部1/2	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)2.5YR5/6 明赤褐 (内)2.5YR5/8 明赤褐	口縁部の端部は蝶状を呈するものと見われるが、欠損し疑似口縁状を呈している	(外)(内)表面は磨耗していて不明であるがヘラミガキを施していると見われる　赤色塗彩
SB-80 26図-3	高坏 弥生	口径 — 残高 3.6 裾径(15.0) 脚部—部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/6 明赤褐	脚部に円形の透かしを有する	(外) ナデ (内) 刷毛調整
SB-81 27図-1	壺 弥生	口径 — 残高 7.4 底径 — 胴部—部	胎：雲、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)7.5YR5/4 にぶい褐 (内)7.5YR5/4 にぶい褐		(外) 頸部に櫛描直線文を施す (内) 表面剥落
SB-81 27図-2	壺 弥生	口径(18.4) 残高 8.0 底径 — 口縁部—部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR3/2 暗赤褐 (内)5YR3/3 暗赤褐	口縁部は外反する	(外) 波状文を施す　頸部に3連止めの櫛状文を施す (内) ヨコのヘラミガキ
SB-81 27図-3	壺 弥生	口径(16.4) 残高 4.0 底径 — 口縁部—部	胎：雲、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)10YR6/4 にぶい黄橙	外反する口縁部	(外) 櫛描波状文を施す (内) 磨耗が著しく不明
SB-81 27図-4	壺 弥生	口径(16.4) 残高 3.5 底径 — 口縁部—部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR4/4 にぶい赤褐 (内)5YR4/4 にぶい赤褐	外反する口縁部	(外) 櫛描波状文 (内) 刷毛調整　ヘラミガキ
SB-81 27図-5	壺 弥生	口径 — 残高 16.4 底径 6.2 胴部1/4-部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR5/4 にぶい赤褐 (内)10YR5/3 にぶい黄褐	丸みのある胴部	(外) 櫛描波状文を施す (内) ヘラケズリの後ナデ　ミガキ
SB-81 27図-6	台付甕 弥生	口径 — 残高 3.5 裾径 (9.0) 脚部—部	胎：雲、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/6 明赤褐		(外) ヘラケズリ (内) ナデ　ヘラケズリ
SB-82 28図-1	壺 弥生	口径(23.5) 器高 49.9 底径 — 腹径の一部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)2.5YR5/6 明赤褐 (内)2.5YR5/6 明赤褐	大型の壺で胴下半部にくびれがなく球形を呈している	(外) 頸部にT字文を施す (内) 表面は剥落している
SB-82 28図-2	壺 弥生	口径(19.4) 残高 6.2 底径 — 口縁部1/6	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)2.5YR6/6 橙 (内)7.5YR5/1 褐灰	大きく開く口縁部	(外) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (内) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-82 28図-3	壺 弥生	口径 — 残高 10.6 底径 — 頸部一部	胎：雲、石英、雲母、粗砂粒含 焼：良好 色：(外)10R4/6 赤 (内)2.5YR5/6 明赤褐	すぼまる頸部	(外) T字文を施す　ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) ヘラケズリ 頸部赤色塗彩
SB-82 28図-4	壺 弥生	口径 19.6 器高 29.5 底径 7.6 ほぼ完存	胎：雲、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(外)2.5YR4/6 赤褐 (内)2.5YR4/6 赤褐	肩部が比較的張りがあり、頸部の屈曲がはっきりした形態である	(外) 頸部にT字文を施す タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) 胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコのヘラミガキ　口縁部赤色塗彩

第１４表　土器観察表（４）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	胎土 焼成 色調	成形・形態ほか	整形ほか
SB-82 28図-5	壺 弥生	口径 — 残高 35.0 底径 9.4 底部完一脚	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)5YR5/6 明赤褐 (外)5YR5/6 明赤褐	胴部はイチジク形を呈すると思われる	(外) 頸部にT字文　胴部上位ヨコのヘラミガキ　胴部下位タテのヘラミガキ　赤色塗彩痕 (内) ヘラケズリ　ナデ
SB-82 28図-6	壺 弥生	口径 13.1 残高 13.5 底径 4.5 底部1/3残	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/4 赤褐 (外)10R4/4 赤褐	胴部は浅く中位で強く張る 口縁部は屈曲して外反する	(外) 口縁部ナデかヘラミガキ　胴部上位ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) 胴部ヘラケズリナデ　口縁部ヨコのヘラミガキ　口縁部赤色塗彩
SB-82 28図-7	壺 弥生	口径 — 残高 25.7 底径 7.6 口縁1/6一底部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/8 赤 (外)2.5YR5/6 明赤褐	平底より立ち上がり丸みのある胴部よりゆるやかに外反して口縁部に至る	(外) タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) 口縁部赤色塗彩
SB-82 28図-8	壺 弥生	口径 13.5 残高 12.2 底径 — 口縁3/4一胴上位	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)2.5YR5/6 明赤褐 (外)2.5YR5/6 明赤褐	口縁部はゆるやかに小さく開く	(外) 口縁部ヨコナデ　胴部タテのヘラミガキ (内) 口縁部ヨコナデ　口縁部から胴部へラケズリとヘラミガキ
SB-82 28図-9	壺 弥生	口径 — 残高 40.8 底径 11.7 底部一胴部1/4	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)5YR5/6 明赤褐 (外)2.5YR5/8 明赤褐	胴部下半は稜を有して若干くびれる	(外) 刷毛調整の後タテのヘラミガキ　付着物あり (内) 剥落していて不明
SB-82 28図 -10	壺 弥生	口径 — 残高 4.3 底径 — 頸部一部	胎：粗砂粒わずかに含む 焼：良好 色：(内)7.5YR6/6 橙 (外)7.5YR5/6 明褐		(外) ヘラ描き羽状文 (内)
SB-82 28図 -11	壺 弥生	口径 — 残高 7.8 底径 5.2 胴部下位一底部	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/6 赤 (外)5YR5/6 明赤褐	平底 胴部下位は直線的に開く ＊土器敷物	(外) タテのヘラミガキ　底部まで赤色塗彩 (内) 刷毛調整　ナデ
SB-82 28図 -12	高坏 弥生	口径 24.8 残高 22.1 脚径 18.2 口縁上部一脚一部欠損	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/4 赤褐 (外)10R4/4 赤褐	脚部に三角形透窓を4つ持つ 口縁部に山形突起を4つ持つ	(外) 坏部ヨコのヘラミガキ　脚部タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) 坏部ヨコのヘラミガキ　脚部刷毛調整　坏部に赤色塗彩
SB-82 28図 -13	高坏 弥生	口径 — 残高 6.8 脚径(11.7) 接合部一脚一部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)2.5YR5/6 明赤褐 (外)5YR4/1 褐灰	脚部は低く、ラッパ状を呈し裾部で大きく開く 脚部に三角形透窓を5ヶ所持つ	(外) 脚部タテのヘラミガキ　裾部ヨコナデ　赤色塗彩 (内) 坏部ヘラミガキ　脚部ナデ　裾部ヨコナデ　縁部色塗彩
SB-82 28図 -14	鉢 弥生	口径(15.3) 器高 9.3 底径 5.0 口縁5一胴部1/3	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/6 赤 (外)10R4/6 赤	体部は直線的に開き、口縁部の先端は内弯する	(外) 口縁部ヨコナデ　体部タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) 口縁部ヨコナデ　体部ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩　底部は剥落著しい
SB-82 28図 -15	鉢 弥生	口径(13.4) 器高 10.0 底径 6.0 底部完一胴部1/2	胎：雲母、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)2.5YR5/6 明赤褐 (外)2.5YR5/6 明赤褐	口縁部は内弯する	(外) 口縁部ヨコナデ　体部ヘラケズリの後タテのヘラミガキ (内) 口縁部ヨコナデ　体部タテのヘラミガキ
SB-82 28図 -16	鉢 弥生	口径(19.2) 器高 7.0 裾径 5.8 底部一口縁部1/2	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)2.5YR5/6 明赤褐 (外)5YR6/4 にぶい橙	直線的に開く体部	(外) 口縁部ヨコナデ　体部タテのヘラミガキ (内) 口縁部ヨコナデ　体部ヨコのヘラミガキ
SB-82 28図 -17	鉢 弥生	口径(12.6) 器高 2.2 底径 4.0 底部一口縁部1/2	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10R4/6 赤 (外)10R4/6 赤	直線的に開く体部 口縁部に孔を穿つ	(外) タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩
SB-82 28図 -18	鉢 弥生	口径(24.0) 残高 5.1 底径 — 口縁部一部	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)10YR5/2 灰黄褐 (外)10YR5/2 灰黄褐	口縁部は内弯する	(外) 刷毛調整の後タテのヘラミガキ (内) 刷毛調整の後ナナメ及びヨコのヘラミガキ
SB-82 28図 -19	鉢 弥生	口径(16.8) 残高 5.4 底径 — 口縁部1/3	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)5YR5/6 明赤褐 (外)5YR5/6 明赤褐	直線的に開く体部	(外) ヨコのヘラミガキ (内) ヨコのヘラミガキ 付着物が内外面にある
SB-82 28図 -20	甕 弥生	口径 21.4 器高 13.0 底径 5.1 ほぼ完存	胎：石英、雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(内)5YR5/6 明赤褐 (外)2.5YR4/6 赤褐	平底に1孔を穿つ	鉢或は甕 (外) 口縁部ヨコナデ　体部タテのヘラミガキ (内) 口縁部ヨコナデ　体部ヨコのヘラミガキ

第１５表　土器観察表（５）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-82 28図 -21	壺 弥生	口径 5.0 器高 9.2 最大径(20.4) 脚部径脚部-部	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5YR5/6 明赤褐 (内)2.5YR5/6 明赤褐	天井部に2孔を有する 肩部から脚部にかけて外反して大きく開く	(外) タテのヘラミガキ (内) ヨコのヘラミガキ
SB-82 28図 -22	壺 弥生	口径 14.3 器高 18.7 底径 6.4 ほぼ完存	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR3/2 暗赤褐 (内)5YR4/3 にぶい赤褐	口縁部は外反する 胴部はやや上位に最大径を持つ	(外) 櫛描波状文を施す　胴部最大径周辺が著しく剥離している (内) ヨコのヘラケズリの後ヘラミガキ
SB-82 28図 -23	壺 弥生	口径(19.8) 残高 10.6 底径 — 口縁部-胴部-4	胎；雲、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/3 にぶい赤褐 (内)5YR5/3 にぶい赤褐	外反する口縁部	(外) 櫛描波状文を施す (内) ヘラケズリの後ヨコのヘラミガキ
SB-82 28図 -24	壺 弥生	口径 16.9 残高 15.4 底径 — 口縁部-胴部1/2	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR4/3 褐 (内)7.5YR4/3 褐	ゆるく外反する口縁部 胴部最大径は口径より大きく丸みを持つ	(外) 櫛描波状文を施す (内) 刷毛調整　ヘラケズリの後ナデ　ヨコのナデ　口縁部ヨコナデ
SB-82 28図 -25	壺 弥生	口径 — 残高 2.0 底径 — 口縁部一部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR4/3 褐 (内)7.5YR4/3 褐	口縁部は外側へ折り返される	(外) 波状文を施す (内) ヘラケズリ
SB-82 28図 -26	深鉢 縄文	口径 — 残高 4.0 底径 — 胴部一部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/4 にぶい褐 (内)7.5YR5/3 にぶい褐	沈線による区画文 LR縄文	(外) (内)
SB-82 28図 -27	深鉢 縄文	口径 — 残高 4.5 底径 — 胴部一部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/3 にぶい褐 (内)7.5YR4/3 褐	沈線による区画文 LR縄文	(外) (内)
SB-82 28図 -28	皿 陶器	口径(14.4) 残高 2.2 底径 — 口縁部一部	胎；細砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5Y7/2 灰黄 (内)2.5Y7/2 灰黄	浅く直線的に開く体部	(外) ロクロナデ　乳白色の釉および鉄絵が描かれる (内)
SB-83 29図-1	壺 弥生	口径 — 残高 8.8 底径 — 胴部一部	胎；雲、石英を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/4 にぶい赤褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	すぼまる頸部	(外) T字文及びボタン状貼付文を施す　胴部外のヘラミガキ (内) 刷毛調整　ナデ
SB-83 29図-2	壺 弥生	口径(23.8) 残高 4.0 底径 — 口縁部一部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5YR4/6 赤褐 (内)2.5YR3/6 暗赤褐	外反する口縁部	(外) タテのヘラミガキ　口縁部ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-83 29図-3	壺 弥生	口径(17.0) 残高 6.0 底径 — 口縁部一部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5YR6/6 橙 (内)5YR6/4 にぶい橙	外反する口縁部	(外) 刷毛調整　ヨコのヘラミガキ　赤色塗彩 (内) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SB-83 29図-4	鉢 弥生	口径(17.0) 残高 5.7 底径 — 口縁部一部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)10R4/6 赤 (内)10R4/6 赤	直線的に開く体部 口縁部はゆるく内弯する	(外)(内) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩 鉢或は高坏坏部
SB-83 29図-5	壺 弥生	口径(30.6) 残高 6.8 底径 — 口縁部一部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR6/6 橙 (内)7.5YR6/6 橙	外反する口縁部	(外) 波状文を施す (内) ヨコのヘラミガキ
SB-83 29図-6	壺 弥生	口径(11.0) 残高 3.3 底径 — 口縁部一部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)10YR6/2 灰黄褐 (内)10YR5/2 灰黄褐	外反する口縁部	(外) 波状文を施す (内)
SB-83 29図-7	台付 壺 弥生	口径 — 残高 3.1 脚径 (8.0) 台部1/4	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	短く直線的に開く脚部	(外) 刷毛調整　ヘラケズリ (内) ヘラケズリ　ナデ
SK-27 30図-1	壺 弥生	口径 — 残高 4.5 底径 5.6 胴部1/4-脚部-4	胎；雲、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR4/2 灰褐 (内)7.5YR5/4 にぶい褐	平底	(外) ヘラケズリ (内) ヘラケズリ

第１６表　土器観察表（６）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SK-28 30図-2	高坏 弥生	口径 — 残高 (1.9) 脚径 — 接合部 —	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)5YR6/6 橙 (B)5YR6/6 橙		(A) 表面が磨耗しており調整不明　赤色塗彩 (B) 坏部赤色塗彩
SK-28 30図-3	椀 磁器	口径 — 残高 1.9 底径 6.1 底部	胎；細砂粒わずかに含む 焼；良好 色；(A)7.5Y7/1 灰白 (B)7.5Y6/2 灰オリーブ	底部から高台内面まで回転ヘラケズリ	(A) 刷毛調整　ナデ (B) 坏部内面に釉が施される
SK-30 30図-4	壷 弥生	口径(20.1) 残高 6.9 底径 — 口縁部一部	胎；礫、石英、白色砂粒、黒雲母含む 焼；良好 色；(A)5YR6/1 褐灰 (B)5YR5/2 灰褐	ゆるく外反する	(A) ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) ヘラミガキ　赤色塗彩
SK-30 30図-5	鉢 弥生	口径 — 残高 4.1 底径 5.2 底部穿孔-鍵-有	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)2.5YR4/8 赤褐 (B)2.5YR4/8 赤褐		(A) ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) ヘラミガキ　赤色塗彩 鉢或は深鉢
SK-30 30図-6	甕 弥生	口径 — 残高 1.9 底径 — 口縁部一部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)2.5YR3/1 暗赤灰 (B)2.5YR4/2 灰赤		(A) 櫛描波状文 (B)
SK-30 30図-7	甕 弥生	口径 — 残高 4.2 底径 (6.4) 底部-鍵-有	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)7.5YR5/3 にぶい褐 (B)7.5YR3/1 黒褐	平底	(A) ヘラケズリ (B) 刷毛調整　ヘラケズリ
SK-31 30図-8	甕 弥生	口径 — 残高 2.5 底径 — 口縁部一部	胎；礫、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)7.5YR6/4 にぶい橙 (B)7.5YR5/2 灰褐		(A) 櫛描波状文 (B)
SK-45 30図-9	壷 弥生	口径 — 残高 7.0 底径 — 類部一部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)5YR5/4 にぶい赤褐 (B)5YR6/6 橙		(A) 類部にT字文を施す　ボタン状貼付文を有する　類部下位赤色塗彩 (B) 刷毛調整とヘラミガキ
SK-47 図 30 -10	甕 弥生	口径 — 残高 3.2 底径 (5.6) 底部3/4-鍵	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)10YR6/4 にぶい黄橙 (B)7.5YR5/6 明褐	平底	(A) ヘラケズリ　ヘラミガキ (B) 付着部あり
SD-01 31図-1	壷 弥生	口径(21.6) 残高 3.1 底径 — 口縁部一部	胎；雲母、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)2.5YR4/4 にぶい赤褐 (B)7.5YR5/4 にぶい褐	外反する口縁部	(A) ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) ヘラミガキ　赤色塗彩
SD-01 31図-2	壷 弥生	口径 — 残高 6.7 底径 — 類部一部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	なで肩の胴部上位	(A) タテのヘラミガキ　赤色塗彩 (B) ヘラケズリ　類部赤色塗彩
SD-01 31図-3	壷 弥生	口径 — 残高 4.7 底径 — 類部一部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)2.5YR5/6 明赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐		(A) 櫛描直線文を上から下へ施す (B) ヨコのヘラミガキ　類部上位赤色塗彩
SD-01 31図-4	壷 弥生	口径 — 残高 4.1 底径 — 類部一部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)10R4/6 赤 (B)2.5YR4/6 赤褐		(A) 櫛描直線文によるT字文　ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) 表面が剥落している
SD-01 31図-5	鉢 弥生	口径 — 残高 1.5 底径 4.5 底部2/3	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)10YR4/4 赤褐 (B)10YR4/4 赤褐	平底	(A) ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) ヘラミガキ　赤色塗彩 付着物あり
SD-01 31図-6	鉢 弥生	口径(16.8) 残高 3.2 底径 — 口縁部一部	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)5YR5/4 にぶい赤褐 (B)7.5YR3/1 黒褐	若干丸みを持ちながら直線的に開く体部	(A) 付着物あり (B)
SD-01 31図-7	甕 弥生	口径 — 残高 8.5 底径 — 類部一部	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(A)5YR5/4 にぶい赤褐 (B)5YR5/4 にぶい赤褐	若干肩の張る胴部	(A) 胴部上位に櫛描波状文を施す (B) ナデ　ミガキ

第１７表　土器観察表（７）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	撃形ほか
SD-01 31図-8	甕 弥生	口径 — 残高 5.5 底径 4.4 底部～胴部	胎；礫、石英、雲母、粗砂粒含 焼；良好 色；(B)2.5YR5/6 明赤褐 (H)5YR5/6 明赤褐	平底より立ち上がり、丸みのある胴部へ移行する。	(B) ヘラケズリ (H) ヘラケズリ
SD-01 31図-9	甕 弥生	口径 — 残高 3.2 底径 (6.0) 底部一部	胎；礫、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR5/4 にぶい赤褐 (H)5YR5/4 にぶい赤褐	平底	(B) ヘラケズリの後指ナデ ヘラミガキ (H) ヘラケズリ ナデ 付着物あり
SD-02 32図-1	壺 弥生	口径(22.0) 残高 6.8 底径 — 口縁部1/4	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR6/6 橙 (H)5YR6/6 橙	頸部より外反して直線的に開く口縁部	(B) ヘラミガキ 赤色塗彩 (H) ヘラミガキ 赤色塗彩
SD-02 32図-2	壺 弥生	口径 — 残高 9.0 底径 (5.0) 底部～胴部一部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR5/6 明赤褐 (H)5YR5/6 明赤褐		(B) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (H) ヨコのヘラミガキ
SD-02 32図-3	壺 弥生	口径 — 残高 3.3 底径 — 頸部一部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR5/6 明赤褐 (H)5YR5/6 明赤褐		(B) ボタン状貼付文 T字文 (H) 刷毛調整
SD-02 32図-4	壺 弥生	口径 — 残高 4.1 底径(10.4) 底部1/2	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR5/6 明褐 (H)7.5YR4/6 褐	平底	(B) (H) 刷毛調整 付着物あり
SD-02 32図-5	壺 弥生	口径 — 残高 2.5 底径 10.0 底部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR5/8 明褐 (H)7.5YR4/4 褐	平底	(B) ヘラケズリ ヘラミガキ (H) ヘラケズリ ナデ
SD-02 32図-6	壺 弥生	口径 — 残高 3.5 底径 9.8 底部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR6/4 にぶい橙 (H)7.5YR7/4 にぶい橙		(B) ヘラケズリ ヘラミガキ (H) 刷毛調整 ヘラケズリ
SD-02 32図-7	壺 弥生	口径 — 残高 1.7 底径 5.6 底部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR5/4 にぶい褐 (H)7.5YR6/4 にぶい橙	平底	(B) タテのヘラケズリ ヘラミガキ 赤色塗彩 底部ヘラケズリ (H) ヘラミガキ
SD-02 32図-8	深鉢 弥生	口径(15.6) 残高 4.2 底径 — 口縁部 一部	胎；礫、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)2.5YR4/6 赤褐 (H)2.5YR4/6 赤褐	ゆるく外反する口縁部	(B) ヘラケズリ ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩 (H) ヘラケズリ ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SD-02 32図-9	高坏 弥生	口径 — 残高 5.2 裾径 — 接合部	胎；礫、石英、白色砂粒を含む 焼；良好 色；(B)2.5YR4/8 赤褐 (H)2.5YR4/8赤褐～5YR5/6明赤褐		(B) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (H) 坏部ヘラミガキ 坏部赤色塗彩 脚部刷毛調整 ナデ
SD-02 32図 -10	高坏 弥生	口径 — 残高 4.1 裾径 — 接合部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR5/6 明褐 (H)7.5YR5/6 明褐		(B) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (H) ヘラミガキ 坏部赤色塗彩
SD-02 32図 -11	鉢 弥生	口径 17.8 残高 7.6 底径 5.4 口縁部～体部3/4	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR5/6 明赤褐 (H)5YR5/6 明赤褐	口縁部に片口を有する	(B) 口縁部ヨコのヘラミガキ 体部打ち欠き 赤色塗彩 (H) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SD-02 32図 -12	甕 弥生	口径(10.0) 残高 4.9 底径 — 口縁部1/4	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5Y4/1 灰 (H)7.5Y4/1 灰	ゆるく外反する口縁部	(B) 櫛描波状文が雑に施文される (H)
SD-02 32図 -13	甕 弥生	口径 — 残高 3.7 底径 — 口縁部 一部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)7.5YR6/3 にぶい褐 (H)10YR5/4 にぶい黄褐	折り返し口縁	(B) 櫛描文 (H) ヘラミガキ
SD-02 32図 -14	甕 弥生	口径 — 残高 6.3 底径 7.0 底部2～胴一部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(B)5YR6/6 橙 (H)5YR6/4 にぶい橙	平底	(B) ヘラケズリ ナデ ヘラミガキ (H) ヘラケズリ ナデ

第１８表　土器観察表（８）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
SD-02 32図 -15	甕 弥生	口径 — 残高 6.8 底径 7.0 底部—部-4	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR6/6 橙 (内)5YR6/4 にぶい橙	平底	(外) ヘラケズリ ヘラミガキ (内)
SD-02 32図 -16	甕 弥生	口径 — 残高 1.9 底径 (5.8) 底部1/4	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)10YR5/2 灰黄褐 (内)7.5YR5/8 明褐	平底	(外) ヘラケズリ (内)
SD-02 32図 -17	台付 甕 弥生	口径 — 残高 7.8 最径(10.0) 脚部—部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)10YR5/4 にぶい黄褐 (内)10YR5/3 にぶい黄褐	接合部より外反して裾部に至る 裾部の先端は内側へ折り返す	(外) ナデ (内) 脚部ナデ ケズリ 坏部ナデ
SD-02 32図 -18	台付 甕 土師	口径 — 残高 3.6 最径(10.0) 脚部—部	胎；礫、石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/6 明褐 (内)7.5YR5/6 明褐	裾部の先端は内側へ折り返す	(外) 刷毛調整 タテのミガキ (内) ヘラケズリ ナデ 東海系S字口縁台付き甕
SD-03 33図-1	壺 弥生	口径 — 残高 2.3 底径 (7.2) 底部—部	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5YR4/8 赤褐 (内)5YR4/8 赤褐	平底	(外) ヘラミガキ 赤色塗彩 (内) 刷毛調整
SD-03 33図-2	高坏 弥生	口径(26.8) 残高 4.0 底径 — 口縁部—部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/6 赤褐 (内)5YR7/4 にぶい橙	外反する口縁部	(外) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩 (内) ヨコのヘラミガキ 赤色塗彩
SD-03 33図-3	甕 弥生	口径(21.6) 残高 3.8 底径 — 口縁部—部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/6 明赤褐	外反する口縁部	(外) 櫛描波状文 (内)
SD-03 33図-4	甕 弥生	口径 — 残高 6.4 底径 — 口縁部—部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/3 にぶい赤褐 (内)5YR3/1 黒褐		(外) 櫛描波状文 簾状文 (内)
SD-03 33図-5	甕 弥生	口径 — 残高 5.4 底径 — 口縁部—部	胎；石英、雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/3 にぶい赤褐 (内)5YR4/3 にぶい赤褐	外反する口縁部	(外) 櫛描波状文 (内) ヘラケズリの後ヨコのヘラミガキ
SD-03 33図-6	甕 弥生	口径 — 残高 2.5 底径 — 口縁部—部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/6 赤褐 (内)5YR3/2 暗赤褐		(外) 櫛描波状文 (内) ヘラミガキ
SD-03 33図-7	甕 弥生	口径 — 残高 3.1 底径 (5.8) 底部—部	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/4 にぶい赤褐 (内)5YR5/6 明赤褐	平底	(外) ヘラケズリ (内) ヘラミガキ
SD-03 33図-8	甕 弥生	口径 — 残高 1.9 底径 (5.8) 底部—部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)7.5YR4/3 褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	平底	(外) ヘラケズリ ヘラミガキ (内)
SD-03 33図-9	台付 甕 弥生	口径 — 残高 3.6 最径 (9.8) 脚部—部	胎；石英、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)2.5YR4/6 赤褐 (内)2.5YR5/6 明赤褐		(外) ナデ 刷毛調整 (内) ナデ 刷毛調整
SD-03 33図 -10	台付 甕 弥生	口径 — 残高 2.6 最径 — 接合部—部	胎；石英、雲母、輝石(黒曜石)を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/4 にぶい赤褐 (内)5YR5/6明褐~10YR3/2黒褐		(外) 表面が磨耗していて不明 (内) 表面が磨耗していて不明
P-79 34図-1	甕 弥生	口径(10.6) 残高 8.1 底径 — 口縁部—部	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR4/3 にぶい赤褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	口縁部は外反する 口縁部に刺み	(外) 波状文 (内) ヘラケズリ ヘラミガキ
P-144 34図-2	壺 弥生	口径 — 残高 10.5 底径 — 頸部—部	胎；礫、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(外)5YR5/4 にぶい赤褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	すぼまる頸部	(外) T字文を施す 頸部下位赤色塗彩 (内) 刷毛調整

第１９表　土器観察表（９）

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	器質	成形・形態ほか	整形ほか
S16E60 35図-1	壺 弥生	口径(18.4) 残高 10.8 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/6 橙 (B)7.5YR6/8 橙	外反する口縁部	(A) タテのヘラミガキ (B) ヨコのヘラミガキ
S14E56 35図-2	壺 弥生	口径 — 残高 9.0 底径 — 一部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR5/4 にぶい赤褐 (B)2.5YR5/6 明赤褐	すぼまる頸部	(A) T字文及びボタン状貼付文を施す　頸部下位赤色塗彩 (B) 刷毛調整　ヘラミガキ
S9E61 35図-3	壺 弥生	口径 — 残高 11.6 底径 — 胴部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/6 明褐 (B)7.5YR5/6 明褐		(A) 櫛描直線文によるT字文 (B) 刷毛調整
S15E55 35図-4	高坏 弥生	口径 — 残高 2.9 脚径 — 接合部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5YR4/6 赤褐 (B)2.5YR4/6赤褐-5YR5/6褐赤		(A) タテのヘラミガキ 赤色塗彩 (B) 脚部刷毛調整　ケズリ 坏部ヨコヘラミガキ 坏部赤色塗彩
S16E57 35図-5	鉢 弥生	口径(18.6) 残高 6.5 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/6 橙 (B)7.5YR6/4 にぶい橙	体部は丸みをもちながら直線的に開く	(A) 口縁部ヨコナデ ヘラミガキ　赤色塗彩 (B) 調整不明　赤色塗彩 鉢或は高坏坏部
S16E58 35図-6	蓋 弥生	口径 (4.8) 残高 5.2 脚径 口縁1/2-脚一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR5/6 明赤褐 (B)5YR5/6 明赤褐	天井部に1孔を有する	(A) タテのヘラミガキ (B) 刷毛調整
S11E56 35図-7	壺 弥生	口径(16.6) 残高 4.0 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR5/4 にぶい赤褐 (B)5YR3/1 黒褐		(A) 櫛描波状文 (B) 刷毛調整　ヘラミガキ
S9E62 35図-8	壺 弥生	口径 — 残高 4.4 底径 — 胴部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/3 にぶい褐 (B)7.5YR5/2 灰褐		(A) 頸部羽状文 口縁と胴部櫛描斜状文 (B) ケズリ
S4E58 35図-9	壺 弥生	口径 — 残高 4.7 底径 — 口縁部一部	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/6 明褐 (B)7.5YR5/6 明褐		(A) 櫛描格子目文 (B) ヘラケズリ　ナデ
S15E57 35図 -10	壺 弥生	口径 — 残高 2.6 底径 口縁部一部	胎：礫、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR5/6 明赤褐 (B)5YR5/6 明赤褐	口縁部外側へ折り返す	(A) 刷毛調整 (B) 刷毛調整
S15E55 35図 -11	壺 弥生	口径 — 残高 10.1 底径 5.4 底部穿孔一部	胎：礫、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR6/3 にぶい褐 (B)7.5YR6/3 にぶい褐	平底 丸みのある胴部	(A) 刷毛調整　ヘラミガキ (B) ヘラケズリ　ヘラミガキ
S16E60 35図 -12	壺 弥生	口径 — 残高 2.7 底径 (3.8) 底部2/3	胎：礫、石英、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)5YR6/6 橙 (B)5YR4/1 褐灰	平底	(A) ヘラケズリ　ナデ (B) ヘラケズリ　ナデ
Z 35図 -13	深鉢 縄文	口径 — 残高 4.8 底径 — 口縁部一部	胎：雲母、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/4 にぶい褐 (B)7.5YR5/4 にぶい褐	口縁部の内側に稜を有して肥厚する	(A) 隆帯文 (B)
S4E58 35図 -14	坏 須恵	口径(13.0) 残高 2.4 底径 — 口縁部一部	胎：粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)2.5Y6/1 黄灰 (B)2.5Y6/1 黄灰	口縁部直線的に開く	(A) ナデ (B) ナデ
S5E63 35図 -15	鍋 内耳土器	口径(30.0) 残高 5.4 底径 — 口縁部一部	胎：礫、粗砂粒を含む 焼：良好 色：(A)7.5YR5/3 にぶい褐 (B)7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部内側に横状把手を有する	(A) (B)

第２０表　土器観察表（１０）

図版No.	出土地点	種　　類	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ　g	材　　質	備　　考
第36図-1	SD-01	石鏃	1.9	1.4	0.5	0.72	黒曜石	凹基　無茎　一部欠損
2	SB-75	磨石	8.3	7.3	7.4	532.0	安山岩	河原石　熱を受けたあとがある
3	SB-76	擦石	10.0	8.0	4.8	498.0	安山岩	河原石
4	SB-79	凹石	14.1	9.5	4.0	740.0	安山岩	河原石
5	SB-82	凹石	8.6	7.7	4.6	458.0	安山岩	
6	SB-82	凹石	9.5	10.3	3.1	397.0	角閃石安山岩	一部欠損
7	SK-28	凹石	18.6	11.8	10.5	2410.0	安山岩	
8	SB-82	敲石	13.5	4.9	3.5	334.0	玄武岩	長軸両端に使用痕
9	SB-76	砥石　敲石	12.3	3.5	2.8	176.0	玄武岩	河原石　両面に研痕
10	SB-82	砥石	13.7	6.0	3.3	360.0	砂岩	一部欠損　片面と両側面に研痕
11	S9E60	砥石	4.5	4.6	1.4	46.5	安山岩	一部欠損　両面に研痕
12	SB-82	作業台	37.9	29.5	9.9	20400.0	安山岩	

第２１表　石器観察表

出土地点 図版NO	器種 種類	法量 残存	材質	成形・形態ほか	整形・調整ほか
SB-75 図-1	紡錘車 弥生	直径 6.4 厚さ 1.5 重量 64.8 ほぼ完存	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(上面)7.5YR5/4にぶい橙 (下面)7.5YR5/4にぶい橙	断面形が偏平を呈する	ナデ
SB-78 図-2	紡錘車 弥生	直径 6.9 厚さ 1.3 重量 74.6 ほぼ完存	胎；雲母、粗砂粒を含む 焼；良好 色；(上面)5YR5/4にぶい赤褐 (下面)7.5YR4/2灰褐		(上面)ナデ (下面)ナデ
SD-03 図-3	土製円盤 弥生	直径 4.0 厚さ 0.7 重量 16.6	胎；粗砂粒を含む 焼；良好 色；(表)10R4/6 赤 (裏)2.5YR4/6 赤褐		(表) ヘラミガキ 赤色塗彩 (裏) 刷毛調整
SD-03 図-4	土製円盤 弥生	直径 3.0 厚さ 0.8 重量 9.3	胎；微砂粒を含む 焼；良好 色；(表)10R4/6 赤 (裏)2.5YR5/6 明赤褐		(表) ヘラミガキ 赤色塗彩 (裏) 刷毛調整

		長さ	幅	厚さ	重さ			
SB-75 図-5	金属製品	11.3	2.5	1.9	35.4	鉄製品	断面は三角形	
SD-01 図-6	金属製品	5.0	2.1	1.3	15.2	鉄製品	断面は二日月形	
S5E64 図-7	金属製品 刀子?	10.3	2.0	1.1	15.1	鉄製品	断面は三角形	
S5E63 図-8	金属製品	6.8	1.8	1.9	13.8	鉄製品	断面は板状	
SB-79 図-9	鉄滓	7.7	6.2	3.9	105.5			
SB-82 図-10	鉄滓	7.4	4.6	2.7	76.9			
SB-82 図-11	鉄滓	6.1	4.4	1.6	33.8			
S5E64 図-12	分銅	3.2	3.3		112.0	銅製品		側面に刺字が見られるが判読不明

第２２表　紡錘車・土製円盤その他観察表

写真図版

調査地区周辺

調査地区全域（上が北）

SB-82 出土土器

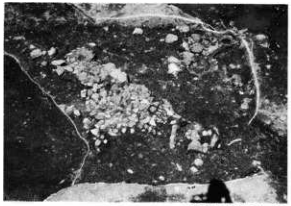
SB-75 （南から）

SB-76 炉（南西から）

SB-76 （南西から）

SB-77 （北西から）

SB-76 土器出土状況（西から）



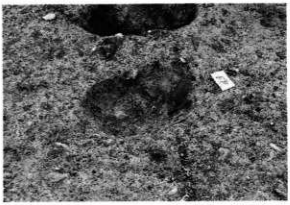
SB-77 （南西から）

SB-76 炉（南西から）

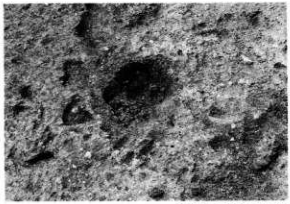
SB-77 土器出土状況（北西から）

SB-78（南西から）

SB-80（南東から）



SB-78 炉（南西から）



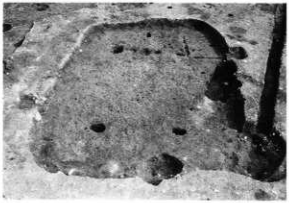
SB-80 炉（南東から）

SB-79（北東から）

SB-81（南から）

SB-79（南西から）

SB-81 炉（南から）



SB-82 （南から）

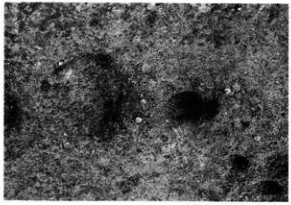
SK-28 （東から）

SB-82 炉西側土器集中状況（南から）

SK-28 石出土状況（東から）

SB-82 炉（南から）

SK-47 石出土状況（東から）



SB-82 炉（南から）

SD-01 （西から）

SD-02 （西から）

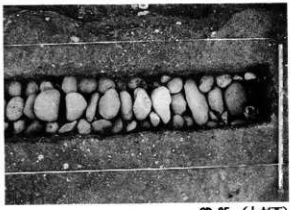
SD-05 （上が西）

SD-03 （西から）

SD-05 （南から）

SD-05 （上が東）

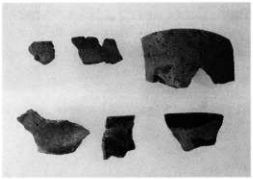
基本土層



SD-05 （上が西）

作業風景

出土土器
SB-75
1, 2, 4
6, 7, 8

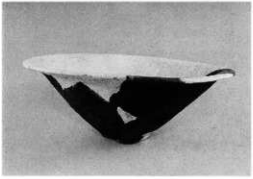


SB-75
3

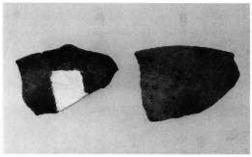
SB-75
5

SB-76
1

SB-76
2



SB-76
3, 6

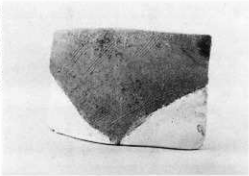


SB-76
4

SB-76
5

SB-76
7

写真図版8



SB-76
8

SB-76
9

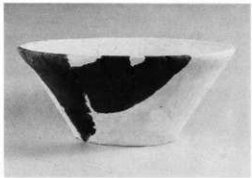
SB-77
1

SB-77
2

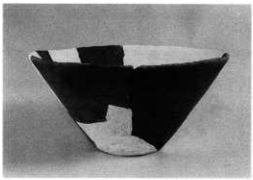
SB-77
3

SB-77
4

SB-77
5



SB-77
6



SB-77 7

SB-77 8

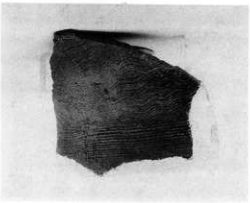
SB-77 9

SB-77 11

SB-77 10

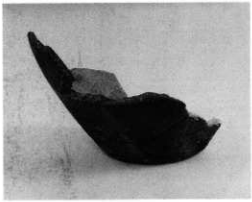
SB-77 12

SB-77 13

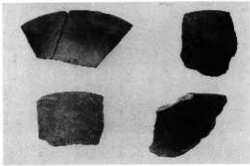


SB-77 14

SB-77 15

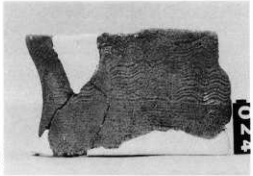


SB-77 16



SB-78 1, 3 4, 7

SB-78 2

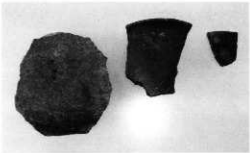


SB-78 5

SB-78 6

SB-78 8

SB-78 9



SB-79
1, 2, 3

SB-79
4

SB-79
5

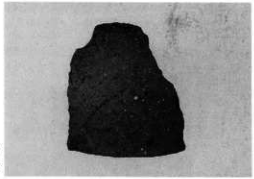
SB-79
6

SB-79
7, 9

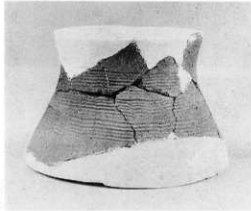
SB-79
8

SB-80
1

SB-80
2



SB-80
3



SB-81
1

SB-81 2

SB-81 3

SB-81 4

SB-81 5

SB-81 6

SB-82 1

SB-82 3

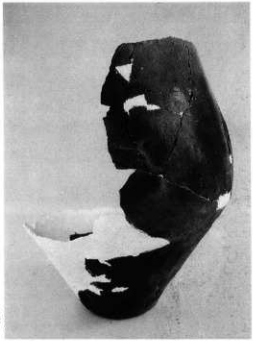
SB-82 4

SB-82
5

SB-82
6

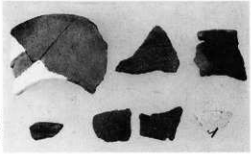
SB-82
7

SB-82
8



SB-82
9

SB-82
11



SB-82
2, 10, 18
25~28

SB-82 12

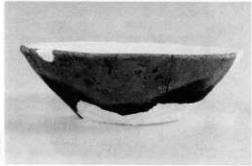
SB-82 13

SB-82 14

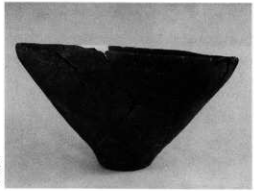
SB-82 15

SB-82 16

SB-82 17



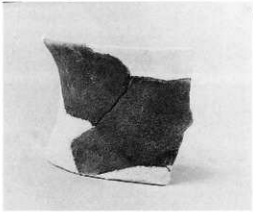
SB-82 19



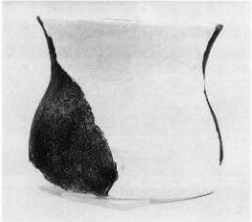
SB-82 20

SB-82 21

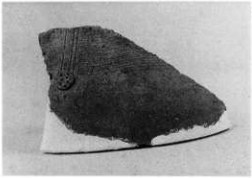
SB-82
22



SB-82
23

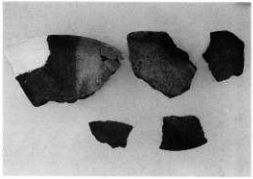


SB-82
24

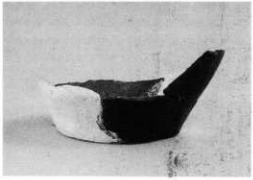


SB-83
1

SB-83
5

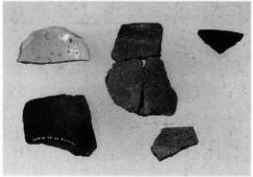


SB-83
2, 3, 4
6, 7

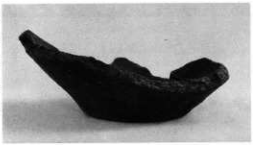


SK-27
1

SK-28
2



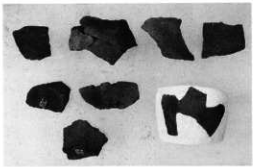
SK-28
3
SK-30
4, 6, 7
SK-31
8



SK-30
5

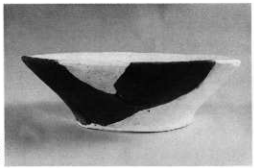
SK-45
9

SK-47
10

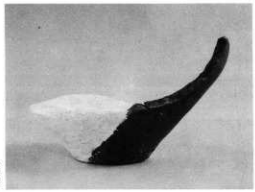


SD-01
1~7
9

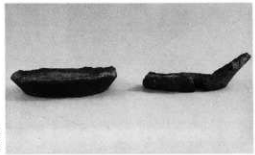
SD-01
8



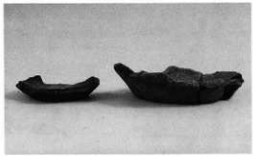
SD-02
1



SD-02
2



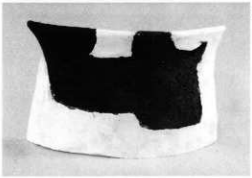
SD-02
4, 5



SD-02
6, 7

SD-02
9

SD-02
11

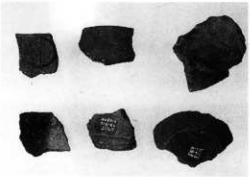


SD-02
12

SD-02
14

SD-02
15

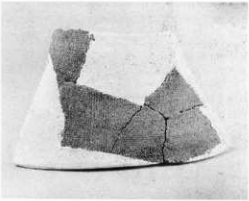
SD-02
17



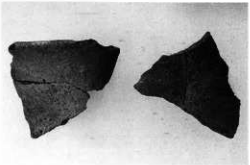
SD-02
3, 8, 10
13, 16, 18

SD-03
1~10

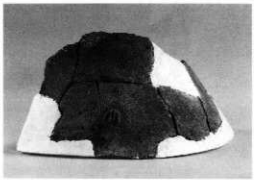
P-79
1



P-144
2

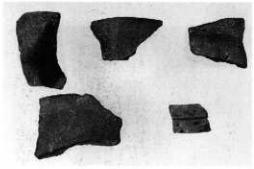


遺構外
1, 3



遺構外 2

遺構外 4

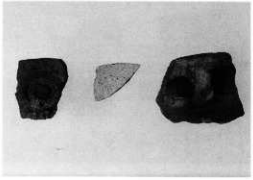


遺構外 5, 7, 8 9, 10

遺構外 6

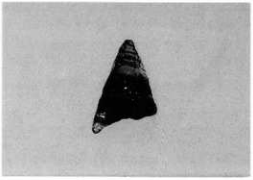
遺構外 11

遺構外 12

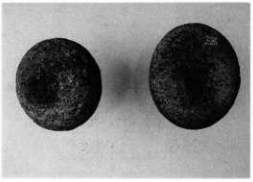


遺構外 13, 14, 15

遺構外



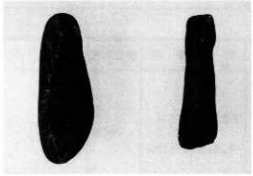
石器 1



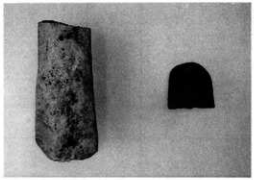
石器 2, 3

石器 4, 5, 6

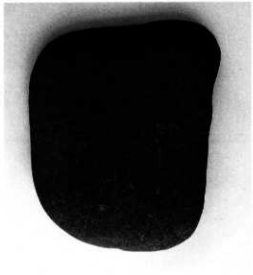
石器 7



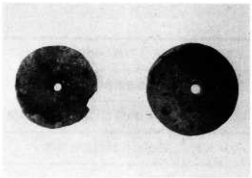
石器 8, 9



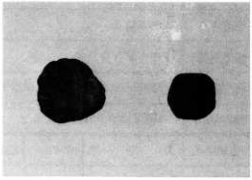
石器 10, 11



石器 12

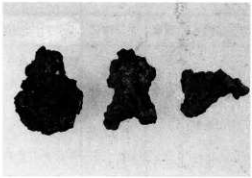


紡錘車 1, 2



土製円盤 3, 4

金属製品 5, 6, 7, 8



金属製品 9, 10, 11

分銅 12

報告書抄録

ふりがな	しもまちだいせき
書名	下町田遺跡Ⅳ
副書名	信州大学(常田)総合研究棟新営工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第92集
編著者名	久保田敦子
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386－0025　長野県上田市天神二丁目4番74号　℡０２６８－２２－４１００
発行年月日	西暦２００３年３月２５日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯°′″	東経°′″	調査期間	調査面積	調査原因
常入遺跡群 下町田遺跡	上田市常田三丁目 １５番1号	20203	36°23′21″	138°16′00″	平成14年4月25日～ 平成14年7月18日	1,260㎡	信州大学(常田)総合研究棟新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
常入遺跡群 下町田遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居址９ 溝跡４ 土坑２３ ピット１２７	弥生土器 土師器 石器	

上田市文化財調査報告書第92集

下町田遺跡Ⅳ

信州大学（常田）総合研究棟新営工事に係る
常入遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査報告書

発行日　平成15年3月25日
発　行　上田市教育委員会
長野県上田市天神二丁目4番74号
TEL. 0268－22－4100
印　刷　田口印刷株式会社